

薬師後遺跡 2

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道
新設事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成24年3月

国土交通省常総国道事務所
財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第350集

薬師やくし後遺跡うしろ 2

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道
新設事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成24年3月

国土交通省常総国道事務所
財団法人茨城県教育財団

序

茨城県では、県土の均衡ある発展を念頭におきながら地域の特性を生かした振興を図るために、高規格幹線道路などの根幹的な県土基盤の整備とともに、広域的な交通ネットワークの整備を推進しています。

その一環として国土交通省が整備を推進している首都圏中央連絡自動車道は、都心部と中核都市を結ぶ3環状9放射の道路ネットワークです。道路網の整備により、首都圏の交通混雑が緩和されるほか、環境改善、経済効率の向上など、様々な効果が期待されます。しかしながら、その事業予定地内には埋蔵文化財包蔵地である薬師後遺跡が所在し、記録保存の措置を講ずる必要があるため、当財団が国土交通省関東地方整備局常総国道事務所から埋蔵文化財発掘調査の委託を受け、平成18年6月からこれを実施しました。そのうち、平成18・19年に実施した調査の成果については、既に、当財団の『文化財調査報告』第308集として平成21年3月に刊行したところです。

本書は、平成21年7月から9月までの3か月間に行われた調査の成果を収録したものです。学術的な研究資料としてはもとより、また、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者であります国土交通省関東地方整備局常総国道事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、稲敷市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、深く感謝申し上げます。

平成24年 3月

財団法人茨城県教育財団
理事長 鈴木 欣一

例 言

- 1 本書は、国土交通省常総国道事務所の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成 21 年度に発掘調査を実施した、茨城県稲敷市椎塚字大久保 1370 番地ほかに所在する薬師後遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。
調査 平成 21 年 7 月 1 日～ 9 月 30 日
整理 平成 23 年 4 月 1 日～ 10 月 31 日
- 3 発掘調査は、調査課長池田晃一のもと、以下の者が担当した。
平成 21 年度
首席調査員兼班長 成島一也 平成 21 年 7 月 1 日～9 月 30 日
主任調査員 市村俊英 平成 21 年 7 月 1 日～9 月 30 日
調査員 大久保隆史 平成 21 年 7 月 1 日～9 月 30 日
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長原信田正夫のもと、以下の者が担当した。
調査員 大久保隆史 平成 23 年 4 月 1 日～ 10 月 31 日

凡 例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し、 $X = -7,280 \text{ m}$ 、 $Y = +45,720 \text{ m}$ の交点を基準点 (A 1a1) とした。なお、この原点は、日本測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、「A1区」「B2区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3…0と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A1a1区」、「B2b2区」のように呼称した。

2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 HG - 遺物包含層 SB - 掘立柱建物跡 SD - 溝跡 SF - 道路跡 SH - 方形竪穴遺構

SI - 竪穴住居跡 SK - 土坑 SM - 地点貝塚 P - ビット

遺物 DP - 土製品 M - 金属製品 Q - 石器・石製品 TP - 拓本記録土器









土層 K - 攪乱

3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は400分の1、各遺構の実測図は原則として60分の1の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。前回の報告において遺構全体図にずれがあったため、加筆修正して再掲載する。

(2) 遺物実測図は、原則として3分の1の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

	焼土・赤彩・施軸・自然軸		火床面・横雑土器断面
	竈構茶材・黒色処理・貝散布		煤・柱痕跡・柱あたり
	土器		土製品
	石器・石製品		金属製品
	硬化面		

4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。また、土層解説中の含有物については、各々総量を記述した。

5 遺構一覧表・遺物観察表の表記は、次のとおりである。

(1) 現存値は () を、推定値は [] を付して示した。計測値の単位はm、cm、kg、gで示した。

(2) 遺物観察表の備考の欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

6 竪穴住居跡の「主軸」は、竈を通る軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸（径）方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N - 10° - E）。

目 次

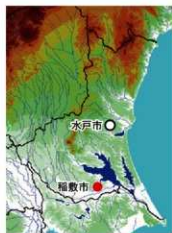
序	
例 言	
凡 例	
目 次	
概 要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	3
第2章 位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 調査の成果	11
第1節 遺跡の概要	11
第2節 基本層序	11
第3節 遺構と遺物	12
1 古墳時代の遺構と遺物	12
(1) 竪穴住居跡	12
(2) 土坑	44
2 奈良時代の遺構と遺物	46
(1) 竪穴住居跡	46
(2) 土坑	73
3 平安時代の遺構と遺物	75
(1) 竪穴住居跡	75
(2) 掘立柱建物跡	92
(3) 土坑	102
4 その他の遺構と遺物	104
(1) 地点貝塚	104
(2) 方形竪穴遺構	105
(3) 道路跡	106
(4) 土坑	107
(5) 溝跡	113
(6) 遺物包含層	115
(7) 遺構外出土遺物	115
第4節 まとめ	122
写真図版	PL 1～PL26
抄 録	
付 図	

やくしうしろ 薬師後遺跡の概要

遺跡の位置と調査の目的

薬師後遺跡は、稲敷市のほぼ中央部に位置し、霞ヶ浦に注ぐ小野川右岸、谷津に挟まれた標高25～28mの台地の上に立地しています。

当遺跡の調査は、首都圏中央連絡自動車道（圏央道）の建設に伴い、遺跡の記録保存を目的に平成18年度から開始されました。この報告書は、平成21年度の調査結果を収録したものです。



平成21年度の調査の内容

平成21年度の調査区は、当遺跡が所在する台地の東部にあたり、古墳時代（6～7世紀）、奈良時代（8世紀）、平安時代（9世紀）の住居跡や掘立柱建物跡が確認されました。調査した面積は802㎡という狭い範囲でしたが、数多くの遺構が重なり合って掘り込まれていました。



重なり合って確認できた住居跡と掘立柱建物跡

古墳時代後期の住居跡です。住居の奥に作られているのが竈で、当時の人々はここで煮炊きをしていました。この住居跡からは、たくさんの土器とともに滑石という加工し易い石で作られた、剣形品や穴の開いた円板などが出土しています。これらは「石製模造品」と呼ばれ、集落や古墳で行われるマツリに使用されたものと考えられています。



奈良時代・平安時代の住居跡からは、須臾器や軸が掛けられた灰釉陶器が出土しました。これらは東海地方から運んでこられたもので、特に灰釉陶器は当時の人々からとても珍重されており、親から子へと受け継がれる場合もあったようです。このような遺物が出土したことから、貴重品を手に入れることの出来る有力者が集落に住んでいたことが考えられます。

平安時代の掘立柱建物跡です。人が立っているところが建物の柱を立てた穴です。このような建物は、住居や倉庫として使用されていたと考えられます。これまでの調査区から見つかった建物は南北に長い建物でしたが、今回の調査区からは、東西に長い建物跡が3棟見つかりました。



調査の結果

薬師後遺跡は、小野川とほど近い台地の上に立地しています。そのため、古代の信太郎（霞ヶ浦南西岸周辺の地域）の役所があったと考えられている下君山周辺や、霞ヶ浦との行き来が容易であり、当時の物流（特に河川を用いた船による物資の運搬）を考えたとき、非常に重要な場所に作られた集落であるといえます。古墳時代、奈良時代はもとより、特に平安時代に関しては集落の中心部にあたる部分の調査であり、今回の調査によって、東西に長い掘立柱建物跡が見つかったことや、視、灰釉陶器など有力人物の存在を窺うことのできる遺物が出土したことは、集落の性格を考える上で重要な成果と言えます。

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

国土交通省関東地方整備局常総国道事務所は、稲敷市において一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業を進めている。

平成16年9月29日、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成17年3月8日に現地踏査を、平成18年2月21日から23日、5月17・18日、7月4日から7月6日にかけて試掘調査を実施し、薬師後遺跡の所在を確認した。

平成18年8月10日、茨城県教育委員会教育長は国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長あてに、事業地内に薬師後遺跡が所在すること及びその取り扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

平成18年2月24日、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対し、文化財保護法第94条に基づき、土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、遺跡の現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、平成18年2月27日、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長に対して、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

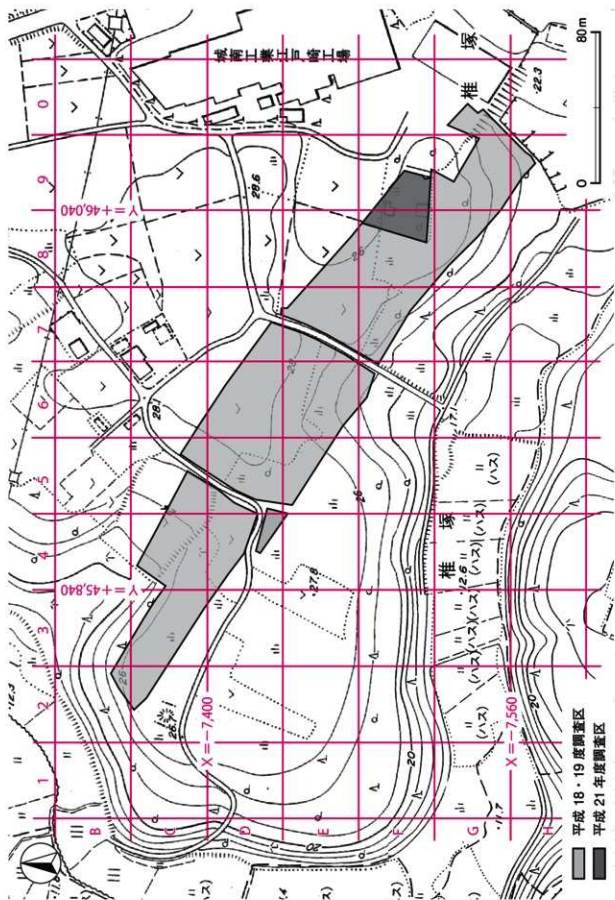
平成20年2月25日、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書を提出した。平成20年2月26日、茨城県教育委員会教育長は、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長あてに、薬師後遺跡について、発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて調査機関として、財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成21年7月1日から平成21年9月30日まで発掘調査を実施した。

第2節 調査経過

薬師後遺跡の調査は、平成21年7月1日から9月30日までの3か月間にわたって実施した。以下、その概要を表で記載する。

工程		期間					
		7月		8月		9月	
調査表	表土撤去	撤去	撤去				
遺構	調査						
遺物	洗浄						
遺物写真	整理						
補遺	調査						



第1図 薬師後遺跡調査区設定図（稲敷市都市計画図2500分の1より作成）

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

薬師後遺跡は、茨城県稲敷市椎塚字大久保1370番地ほかに所在している。

遺跡が所在する稲敷市は、茨城県の南部に位置し、北は霞ヶ浦南岸に面し、東は横利根川、南は利根川を挟んで千葉県と境を接している。地形は、稲敷台地と呼ばれる標高20～30mの洪積台地と、小野川を含む霞ヶ浦水系と利根川水系による沖積低地からなっている。これらの水系に挟まれた台地は、北西方向のつくば市から続く筑波・稲敷台地の最東南端に当たる。市域の稲敷台地は、小野川右岸の神宮寺台地と左岸の江戸崎台地に分かれ、いずれの台地上もごく緩やかな起伏をもち、緑辺部は多数の谷津が複雑に入り組み、樹枝状に開析されている。市域の南西部から流入して、北に向きを変えて流れる小野川は、北東部の霞ヶ浦「江戸崎入り」に注いでいる。

稲敷台地の地層は、第四紀洪積世古東京湾時代に堆積した成田層が基盤となり、下部から上部にかけて成田層下部、成田層上部、龍ヶ崎砂礫層、常総粘土層、関東ローム層、表土層の順に堆積している。堆積状況は、水平かつ単調である。

当遺跡は、小野川右岸の神宮寺台地の南部に位置し、台地の南西部から樹枝状に入り込んだ利根川水系の谷津に挟まれた標高25～28mの舌状台地上に立地している。平成21年度の調査区は遺跡の東部にあたり、調査前の現況は宅地である。

第2節 歴史的環境

当遺跡の所在する地域は、台地、低地、河川、湖沼と変化に富んだ自然環境を示し、旧石器時代から近世までの遺跡が多数分布している。ここでは、『茨城県遺跡地図』¹⁾に登録されている当該地域の子遺跡を中心に、時代ごとに概観する。

旧石器時代は、明確な生活の痕跡に乏しいが、小野川左岸の中峰遺跡で5か所の石器集中地点が調査されており、彫器、ナイフ形石器を含む359点の石器が出土している²⁾。このほか、同じく小野川左岸の兎松遺跡³⁾(70)から尖頭器と細石刃が、霞ヶ浦「江戸崎入り」左岸の秋平遺跡⁴⁾から尖頭器未製品とナイフ形石器が、それぞれ出土している。

縄文時代になると遺跡数は増加している。霞ヶ浦水系と利根川水系に挟まれた台地上には、前期から晩期の貝塚が多数確認されており、現在、国の史跡に指定されている広畑貝塚⁵⁾や、獣骨製のヤスがタイの頭骨に突き刺さった状態で出土した椎塚貝塚⁶⁾(9)など、著名な貝塚も少なくない。また、このほかにも桶の台古墳群⁷⁾・思川遺跡⁸⁾で早期の炉穴、豆葉節北遺跡⁹⁾で早期から前期・晩期の住居跡、中佐倉貝塚¹⁰⁾で前期の住居跡と地点貝塚、柏木遺跡¹¹⁾(28)で前期の陥し穴、中峰遺跡で中期の土坑、兎松遺跡で中期の住居跡と中期から後期の遺物包含層が、それぞれ調査されている。

弥生時代の遺跡は数少ないが、近年、後期集落の調査例が増加している。小野川左岸では堂ノ上遺跡¹²⁾(69)、沼里川左岸では塚本遺跡¹³⁾、霞ヶ浦「江戸崎入り」左岸では桶の台古墳群、大日山古墳群¹⁴⁾、思川遺跡、秋平遺跡で、住居跡がそれぞれ調査されている。この内、大日山古墳群は、土器の様相から集落形成の時期が中

期後葉まで遡ることが判明している。また、思川久保遺跡¹⁵⁹でも当該期の住居跡が確認されている。

古墳時代の遺跡は、台地上や台地縁辺部に集落跡と古墳が隣接するように点在している。小野川左岸では、中峰遺跡で前・後期の住居跡が調査されているほか、堂ノ上遺跡で中期 36 軒、後期 88 軒の住居跡が調査され、竈溝入期の集落の様相が明らかになっている。小野川右岸では、青宿遺跡（17）で円墳、方墳各 1 基が調査され、円墳は 6 世紀末から 7 世紀前半の築造と推定されている¹⁶⁰。沼里川左岸の塚本遺跡では、初期竈が付設された住居跡 4 軒が、沼里川を挟み塚本遺跡の対岸に位置する豆葉師北遺跡では前期の集落跡が、それぞれ調査されている。霞ヶ浦「江戸崎入り」左岸では、池平遺跡¹⁶¹で前期から後期、大日山古墳群・中佐倉貝塚で中・後期、二の宮貝塚¹⁶²、思川遺跡、秋平遺跡で後期の集落跡がそれぞれ調査されている。また、楯の台古墳群では前期から後期の集落跡と、後期の古墳群が調査されている。この古墳群は、全長約 40 m の前方後円墳が主墳で、箱式石棺が確認されている。姫宮古墳群は、全長約 32 m と 30 m の 2 基の前方後円墳を主墳として、2 つの支群が形成されている¹⁶³。水手塚古墳は、内部赤彩の箱式石棺や武具・馬具などの副葬品から 6 世紀前葉の築造と考えられている¹⁶⁴。霞ヶ浦「江戸崎入り」右岸では、柏木遺跡で前・後期の集落跡が調査されている。霞ヶ浦南岸の西原古墳群は、全長約 34 m の前方後円墳が主墳で、箱式石棺が確認されており、直刀・勾玉が出土している¹⁶⁵。前山古墳は、径約 30 m の円墳で、切石横穴式石室が確認されている¹⁶⁶。利根川左岸の諏訪原古墳群は、円墳だけで構成された古墳群で、箱式石棺が確認されている¹⁶⁷。幸田古墳群は、全長約 45 m の前方後円墳が主墳で、1 号墳は埴輪を有している¹⁶⁸。福田古墳群は、全長約 55 m の前方後円墳が主墳で、箱式石棺・横穴式石室が確認されており、埴輪を有しているものもある¹⁶⁹。東大沼古墳群は、全長約 40 m の前方後円墳が主墳で、調査された 7 号墳は、箱式石棺や直刀・鉄鏃などの副葬品から 6 世紀後葉の築造と考えられている¹⁷⁰。このような古墳時代の遺跡分布をみると、前期から中期にかけての急激な変化は認められないが、中期後葉から後期前葉になって新しく形成された集落や築造された古墳が数多く認められる。

奈良時代に編纂された「常陸国風土記」によると、信太郡は東を「信太流海」、南を「復浦流海」に挟まれており、郡内を「東海大道」が通っていた。その官道沿いには常陸国最初の駅家「復浦津」が設置されていた¹⁷¹。また、平安時代に編纂された『倭名類聚抄』によると、信太郡は大野、高来、小野、朝夷、高田、子方、志万、中家、島津、信太、乘浜、稲敷、阿弥、駅家の 14 郡に分かれていた。当遺跡が所在する椎塚地区は、『新編常陸国誌』によると小野郡内に比定されている¹⁷²。小野川左岸の下君山廃寺は、当遺跡西方約 5 km に所在する寺院跡で、8 世紀前半の重文軒平瓦、9 世紀前半の国分寺系素縁複弁十葉花文軒九瓦及び均整唐草文軒平瓦が出土しており、信太郡の郡寺跡と推定されている¹⁷³。沼里川右岸の豆葉師北遺跡では 9 世紀の住居跡と溝跡、霞ヶ浦「江戸崎入り」左岸では、秋平遺跡で 8～11 世紀、思川遺跡で 8～11 世紀、中佐倉貝塚で 8・10～11 世紀、楯の台古墳群で 9 世紀、池平遺跡で 10 世紀の集落跡、二の宮貝塚で 10～11 世紀の掘立柱建物跡を伴う集落跡がそれぞれ調査されており、これらは信太郡内の村落に比定されている。霞ヶ浦「江戸崎入り」右岸では、柏木遺跡で 8～10 世紀の掘立柱建物を伴う集落跡が調査されており、高田郡内の村落に比定されている。また、霞ヶ浦南岸の幸田遺跡・幸田台遺跡は、当遺跡東方約 5 km に所在する 8～10 世紀の掘立柱建物を伴う集落跡で、同じ高田郡内に比定されている¹⁷⁴。その他、塔の前廃寺跡は単宇型式の寺院跡で、8 世紀前半の鋸歯文縁複弁花文軒九瓦及び重文軒平瓦が出土している¹⁷⁵。このような奈良・平安時代の遺跡分布をみると、古墳時代後期から継続する集落と、奈良・平安時代になって新しく形成された集落がそれぞれ認められるが、いずれもの集落も 11 世紀後半以降の様相については不明な部分が多い。

平安時代末期には古代の郡の解体が進む。信太郡内も小野川を挟んで東西に分かれ、東には東条庄、西には信太庄がそれぞれ立庄され、中世へとつながっていく。南北朝時代末期になると、関東管領上杉氏被官の土

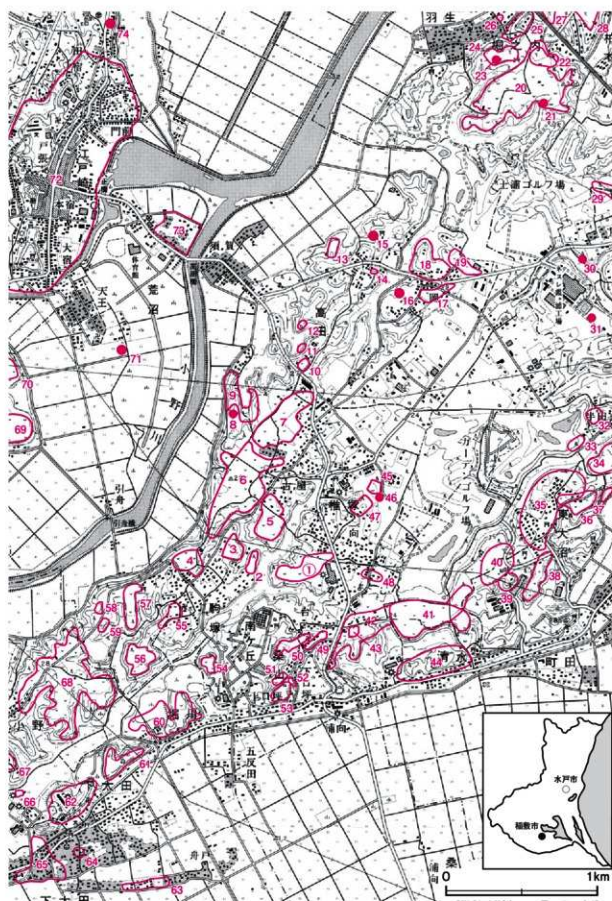
岐原氏が信太主惣政所として当地域に移住する。小野川左岸の江戸崎城跡(72)は土岐原(土岐)氏の居城跡で、その支配は天正18(1590)年の佐竹氏による常陸国統一まで約200年間続いた。中世の城館遺跡としては、利根川左岸の東条城跡(62)、霞ヶ浦南岸の神宮寺城跡、小野川左岸の羽賀城跡、御城遺跡(73)などが知られている。

近世初期、佐竹義宣は江戸崎城に弟名盛重を配して領国経営に当たったが、慶長7(1602)年に秋田へ国替えとなる。その後青山忠俊が入部して江戸崎藩が成立するが、同15(1610)年に移封されて廃藩となる。その後、元和5(1619)年には丹羽長重が入部して再び立藩するが、同8(1622)年に移封されて再び廃藩となり、江戸崎城は廃城になったといわれている³²⁾。

※ 文中の()内の番号は、表1、第2図の該当遺跡番号と同じである。なお、本章は、『茨城県教育財団文化財調査報告』第308集を基に若干の加除をしたものである。

註

- 1) 茨城県教育庁文化課編『茨城県遺跡地図』茨城県教育委員会 2001年3月
- 2) 本橋弘巳「中峰遺跡・見松遺跡 一般国道465号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第286集 2008年3月
- 3) 註2)に同じ。
- 4) 大賀健ほか「秋平遺跡・池平遺跡・中佐倉貝塚 ザ・インベリアル・ゴルフクラブ建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」江戸崎町倉倉地区遺跡発掘調査会 1999年11月
- 5) 茨城県史編さん原始古代史専門委員会編『茨城県史料 考古資料編-先土器・縄文時代-』茨城県 1979年3月
- 6) 註5)に同じ。
- 7) 岡宮正光ほか「桶の台古墳群 第2・3次発掘調査報告書」江戸崎町教育委員会 2001年3月
- 8) 鈴木美治「一般国道新川江戸崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 二の宮貝塚・大日山古墳群・思川遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第65集 1991年3月
- 9) 芳賀友博ほか「塚本遺跡・豆菜師北遺跡 一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内埋蔵文化財調査報告書 谷ヶ道遺跡 一般国道6号牛久土浦バイパス建設事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第310集 2009年3月
- 10) 註4)に同じ。
- 11) 松浦敏「一般国道新川江戸崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 柏木古墳群」『茨城県教育財団文化財調査報告』第74集 1992年3月
- 12) 前島直人他「堂ノ上遺跡 一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第309集 2009年3月
- 13) 註9)に同じ。
- 14) 註8)に同じ。
- 15) 茨城県教育庁文化課編『茨城県遺跡・古墳発掘調査報告書Ⅶ(平成2・3年度)』茨城県教育委員会 1993年3月
- 16) 小川和博「青宿遺跡発掘調査報告書」稲敷市教育委員会 2008年3月
- 17) 註4)に同じ。
- 18) 註8)に同じ。
- 19) 岡宮正光「姫宮古墳群1・2号墳・水神塚古墳」江戸崎町教育委員会 2000年10月
- 20) 註19)に同じ。



第2図 薬師後遺跡周辺遺跡分布図 (国土地理院 25,000 分の 1「江戸崎」「下総滑川」)

表1 薬師後遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代							番号	遺跡名	時代									
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世			
①	薬師後遺跡	○	○	○	○	○	○	○	38	中台遺跡									○	
2	奥山遺跡		○		○				39	東大沼城跡										○
3	代遺跡		○		○				40	西畑遺跡									○	
4	駒塚貝塚		○		○	○			41	新畑遺跡		○							○	○
5	原平遺跡		○		○	○	○		42	清水古墳群									○	
6	宮前遺跡		○		○	○			43	神屋遺跡									○	○
7	中畑遺跡		○		○	○			44	清水城跡										○
8	中峯大日塚							○	○	45	椎塚台遺跡									○
9	椎塚貝塚		○							46	隠里の塚古墳								○	
10	天ノ宮遺跡		○							47	椎塚城跡									○
11	蓮沼貝塚		○							48	椎塚荒久遺跡								○	
12	中根貝塚		○							49	台坪古墳群									
13	真福寺遺跡								○	50	台坪遺跡								○	○
14	高田岡貝塚		○							51	上ノ台北遺跡		○							○
15	高田大神古墳					○				52	上ノ台遺跡								○	
16	青宿古墳		○		○					53	桑山古墳群								○	
17	青宿遺跡		○		○					54	天王台遺跡								○	
18	東条高田城跡							○		55	原屋敷遺跡									○
19	馬場添遺跡		○		○					56	原山遺跡								○	
20	中道遺跡					○	○			57	駒塚台上遺跡		○						○	○
21	稲荷久保古墳					○				58	大塚山古墳								○	
22	内道古墳群					○				59	駒塚荒久遺跡		○						○	
23	人形塚古墳					○				60	八幡台遺跡		○	○					○	○
24	人形塚遺跡					○				61	秋葉台遺跡								○	○
25	堀之内リュガイ城跡							○		62	東条城跡								○	○
26	内小屋遺跡							○		63	中曾根遺跡								○	○
27	柏木古渡古墳群					○				64	中門遺跡								○	
28	柏木遺跡(柏木古墳群)		○		○	○				65	上宿遺跡								○	
29	木戸古墳群					○				66	池遺跡								○	
30	町山穴かまび跡					○	○			67	勝ヶ台遺跡		○						○	○
31	迎山塚								○	68	小野遺跡		○						○	○
32	原遺跡		○	○	○					69	堂ノ上遺跡			○	○				○	○
33	半田古墳群					○				70	児松遺跡		○	○					○	
34	宮平遺跡		○		○	○				71	古橋塚									○
35	東大沼古墳群					○				72	江戸崎城跡									○
36	櫛平遺跡		○		○	○				73	御城遺跡									○
37	塙下遺跡							○	○	74	外浦古墳								○	

- 21) 茨城県教育庁文化課編『重要遺跡報告書Ⅲ』茨城県教育委員会 1986年3月
- 22) 茨城県史編さん原始古代史専門委員会編『茨城県史料 考古資料編 古墳時代』茨城県 1974年2月
- 23) 新利根村史編纂委員会編『新利根村史(一)』新利根村 1981年11月
- 24) 東町史編纂委員会編『東町史 資料編 原始古代』東町 1998年3月
- 25) 註22)に同じ。
- 26) 森田忠治ほか「東大沼古墳群第7号墳発掘調査報告書」『東町立歴史民俗資料館文化財調査報告』第1集 2000年3月
- 27) 秋本吉徳『風土記(一) 常陸国風土記』講談社 1979年4月
- 28) 中山信名著・栗田寛補訂『宮崎報恩会版 新編常陸国誌』嵩書房 1978年12月
- 29) 瓦次堅ほか『学術調査報告』4「茨城県における古代瓦の研究」茨城県立歴史館 1994年3月
- 30) 岡宮正光「幸田遺跡・幸田台遺跡 東台団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」東村教育委員会 1995年3月
- 31) 註27)に同じ。
- 32) 茨城県教育庁文化課編『重要遺跡報告書Ⅱ(城館跡)』茨城県教育委員会 1985年3月

参考文献

- ・茨城県農地部農地計画課『土地分類基本調査 佐原』1988年12月

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

栗師後遺跡は、稲敷市の中央部に位置し、小野川右岸の標高約25～28mの舌状台地上に立地している。平成21年度の調査区は、遺跡の東部にあたる。調査面積は802㎡で、調査前の現況は宅地である。

調査の結果、竪穴住居跡33軒（古墳時代15・奈良時代11・平安時代7）、掘立柱建物跡5棟（平安時代）、方形竪穴遺構1軒（時期不明）、溝跡2条（時期不明）、道路跡1条（時期不明）土坑61基（古墳時代2・奈良時代2・平安時代3、時期不明54）、地点貝塚2か所（時期不明）、遺物包含層1か所（奈良・平安時代）を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に34箱出土している。主な出土遺物は、縄文土器（深鉢）、土師器（坏・高坏・椀・皿・高台付椀・高台付皿・鉢・蓋・甕・壺・瓶・手捏土器・無台盤・羽釜）、須恵器（坏・高台付坏・盤・蓋・瓶・鉢・甕・瓶・硯）、灰釉陶器（高台付皿・長頸瓶・瓶類・短頸壺）、陶器（折縁皿・播鉢）、磁器（碗）、土製品（スタンプ形土製品・土玉・勾玉・支脚・紡錘車・置き竈）、石器（石鏃・打製石斧・磨製石斧・剥片・砥石）、石製品（白玉・小玉・剣形品・有孔円板）、金属製品（刀子・鎌・鉄滓）、貝類（ヤマトシジミ）などである。

第2節 基本層序

基本層序を確認するテストピットは、調査区北西部の平坦面（F9c2区）に設定した。

第1層は黒褐色の耕作土層である。粘性は普通で、締まりは強く、層厚は14～16cmである。

第2層は暗褐色の旧表土層である。粘性は弱く、締まりは強く、層厚は10～12cmである。

第3層は褐色のソフトロームからハードロームへの漸移層である。粘性は強く、締まりは普通で、層厚は2cmである。本層は、調査区北東部周辺でのみ確認することができた。

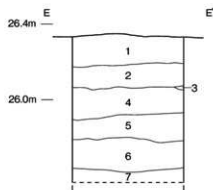
第4層は暗褐色のハードローム層である。粘性・締まりともに強く、層厚は12～17cmである。

第5層は褐色のハードローム層である。粘性・締まりともに強く、層厚は10～15cmである。

第6層はにぶい黄橙色のハードローム層である。粘性・締まりともに強く、層厚は14～18cmである。本層は、常総粘土層の直上層であり、箱根東京軽石層の東京バミスを含む層に対比される。

第7層は灰白色の粘土層である。粘性・締まりともに極めて強い。下部まで掘り抜いていないため、層厚は不明である。本層は、常総粘土層に対比される。

本調査区においては、第1・2黒色帯の存在は確認できなかった。遺構は、その殆どが第4層の上面で、遺跡の北東部においては第3層の上面で確認できた。



第3図 基本土層図

第3節 遺構と遺物

1 古墳時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴住居跡 15 軒、土坑 2 基を確認した。なお、平成 21 年度の調査区は、平成 18・19 年度の調査区と隣接しているため、継続調査の遺構に関しては、本報告に伴い遺構のプランの変更や柱穴の番号の付け替え、年代の再考を行った。既調査分の詳細については、『茨城県教育財団 文化財調査報告第 308 集』（以下『第 308 集』）を参照されたい。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

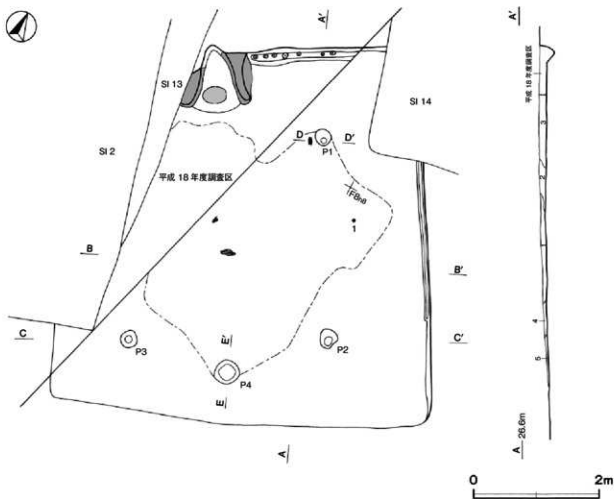
第 22 号住居跡（第 4・5 図）

位置 調査区西部の F 8 h7 区、標高 26.2 m の平坦な台地上に位置している。

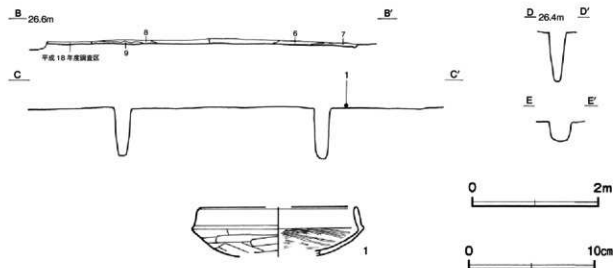
確認状況 北西部については平成 18 年度に調査し、『第 308 集』において報告している。南東部については平成 21 年度に調査した。

重複関係 第 2・13・14 号住居に掘り込まれている。

規模と形状 西部を第 2・13 号住居、北東コーナー部を 14 号住居に掘り込まれているため、南北軸は 6.04 m で、



第 4 図 第 22 号住居跡実測図



第5図 第22号住居跡・出土遺物実測図

東西軸は6.04mしか確認できなかった。平面形は方形と推定でき、主軸方向はN-28°-Wである。壁高は2cmである。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。北壁下及び東壁下の一部で撥溝を確認した。

ピット 4か所。P1～P3は深さ76～80cmで、配置から支柱穴である。P4は深さ31cmで、南壁付近の中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 9層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|------|-------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 | 6 褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 | 7 褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 灰褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 | 8 褐色 | ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 9 褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 5 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量 | | |

遺物出土状況 土師器片32点(坏6, 甕26), 焼成粘土塊2点が出土している。また、混入した縄文土器片5点(深鉢), 須恵器片7点(坏4, 蓋1, 甕2)も出土している。Iは東部の覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器や重複関係から6世紀後葉に比定できる。床面から少量の炭化材が出土しており、廃絶の際に部材の一部を焼却した可能性がある。

第22号住居跡出土遺物観察表(第5図)

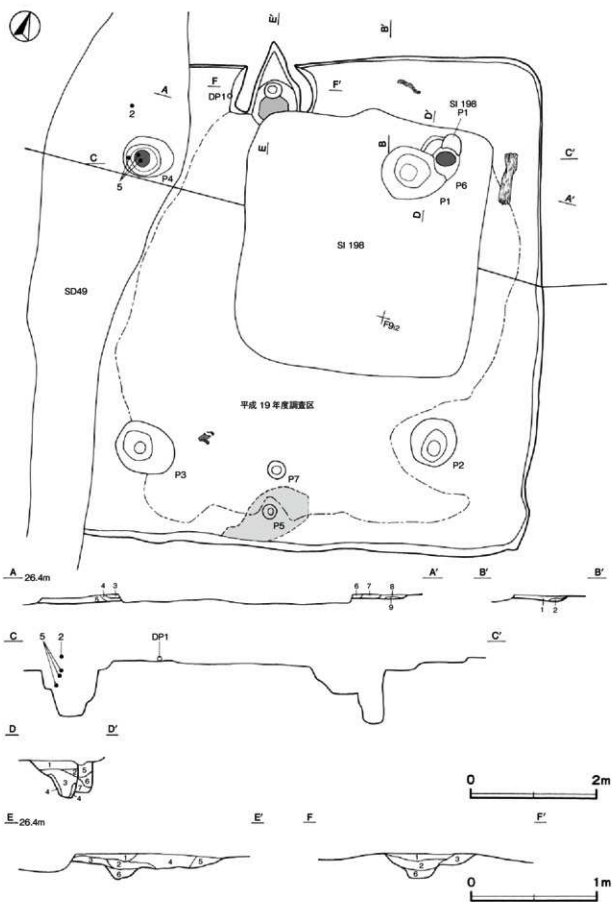
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	[12.4]	(3.9)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラケズリ 内面ヘラミカキ	覆土下層	20%

第170号住居跡(第6～8図)

位置 調査区南部のF9il区, 標高26.1mの平坦な台地上に位置している。

確認状況 南部については平成19年度に調査し, 『第308集』において報告している。北部については平成21年度に調査した。

重複関係 第198号住居, 第49号溝に掘り込まれている。



第6図 第170号住居跡実測図

規模と形状 西部を第49号溝に掘り込まれているため、南北軸は7.92mで、東西軸は7.00mしか確認できなかった。平面形は方形もしくは長方形と推定され、主軸方向はN-17°-Wである。壁高は5cmで、ほぼ直立している。

床 平坦で、壁際を除いて踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで153cmで、燃烧部幅は70cmである。袖部は地山を掘り残して基部としている。火床部は床面から2cmほどくぼんでおり、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外に42cm掘り込まれ、火床部から緩やかに傾斜して立ち上がっている。また、火床面の北部に、深さ5cmほどの掘り込みが確認でき、規模や火床面との位置関係から、支脚が埋設されていた痕跡と考えられる。

竈土層解説

1 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量	4 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量
2 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量	5 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子少量
3 暗褐色	焼土粒子多量、ロームブロック・炭化粒子・粘土	6 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量

ピット 7か所。P1・P4は深さ60cm・80cmで、配置から主柱穴である。また、土層からP6からP1へと柱の立て替えが行われたことが想定される。第1～3層はP1の柱抜き取り後の覆土、第4層は掘方への埋土である。第5～7層はP6の柱抜き取り後の埋土である。

ピット土層解説

1 暗褐色	ロームブロック・炭化物少量、粘土ブロック・焼土粒子微量	4 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	5 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量	6 黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
		7 褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量

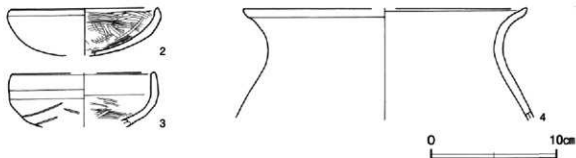
覆土 9層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

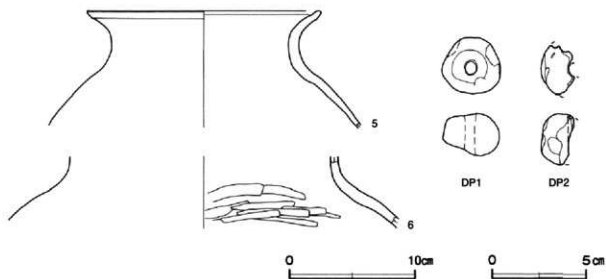
1 褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	6 褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
2 褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	7 褐色	ロームブロック微量
3 暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量	8 褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
4 暗褐色	焼土粒子少量、ローム粒子微量	9 褐色	ロームブロック極微量
5 暗褐色	焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量		

遺物出土状況 土師器片106点(坏2, 高坏1, 甕103), 土製品7点(土玉2, 支脚1, 焼成粘土塊4)が出土している。また、混入した縄文土器片14点(深鉢), 須恵器片9点(蓋2, 甕7)も出土している。DP1は竈左袖付近, 2は北西部の覆土下層から, 5はP4の覆土中層から上層にかけて出土しており、柱抜き取り後に廃棄されたものと考えられる。3・4・6, DP2は覆土中から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土遺物や重複関係から7世紀初頭と考えられる。床面から焼土塊や少量の炭化材が出土しており、廃絶の際に部材の一部を焼却した可能性がある。



第7図 第170号住居跡出土遺物実測図(1)



第8図 第170号住居跡出土遺物実測図(2)

第170号住居跡出土遺物観察表(第7・8図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
2	土師器	坏	11.6	3.7	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部内面ヘラミガキ	覆土下層	90%
3	土師器	坏	[11.2]	(4.3)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面工具痕 内面ヘラミガキ	覆土中	10%
4	土師器	甕	[22.2]	(8.9)	-	長石・石英・雲母・繊維・赤色粒子	橙	普通	外・内面摩耗	覆土中	10%
5	土師器	甕	18.6	(9.3)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	外・内面摩耗	F4覆土中層～上層	10%
6	土師器	甕	-	(5.8)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐色	普通	体部外面摩耗 内面ヘラナデ	覆土中	10%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP1	土玉	30	2.2	0.6	(196)	長石・石英・赤色粒子・黒色粒子	ナデ調整 上端部穿孔後、ヘラ切り 一部欠損	覆土下層	PL22
DP2	土玉	(1.8)	(2.7)	-	(9.9)	長石・石英・赤色粒子	ナデ調整 一部欠損	覆土中	

第191号住居跡(第9図)

位置 調査区北部のF9e4区、標高26.1mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第761号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北東部が調査区域外に延びているため、南北軸は3.20mで、東西軸は2.50mしか確認できなかった。平面形は方形もしくは長方形で、南北軸方向はN-17°-Wである。壁高は23~32cmで、ほぼ直立している。

床 平坦で、全面が踏み固められている。壁下には燼溝が通っている。

ピット 3か所。P1・P2は深さ40cm・52cmで、配置から主柱穴である。P3は深さ30cmで、南壁際の中央部に位置していることから出入口施設に伴うピットと考えられる。

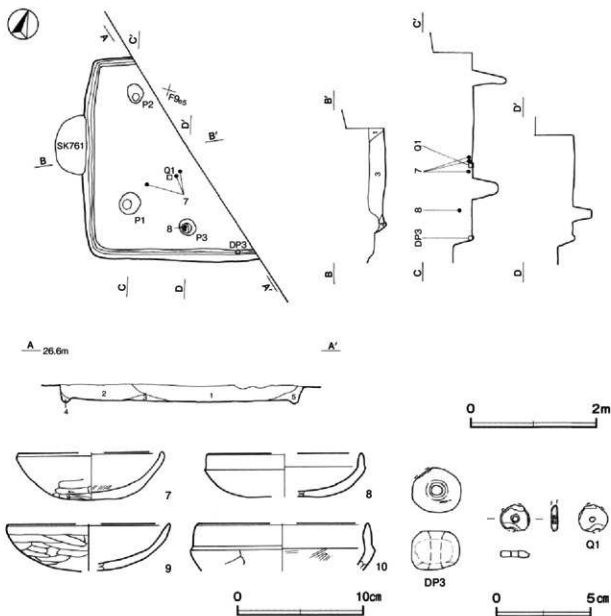
覆土 5層に分層できる。ロームブロックや焼土ブロックを含んでいる層があることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | | | |
|---|-------|------------------------------|---|-------|---------------------|
| 1 | にぶい褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 | 4 | 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・粘土粒子微量 |
| 2 | 黒褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子・粘土粒子微量 | 5 | にぶい褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 |
| 3 | 褐色 | ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子少量、粘土粒子微量 | | | |

遺物出土状況 土師器片 135点（坏33, 鉢1, 甕101）、土製品2点（土玉、支脚）、石製品1点（有孔円板）が、覆土中層から下層を中心に散在した状態で出土している。7、Q1は中央部、DP3は南東部壁際の覆土下層から、8はP3上位の覆土中層から、9・10は覆土中から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から6世紀後葉に比定できる。



第9図 第191号住居跡・出土遺物実測図

第191号住居跡出土遺物観察表（第9図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
7	土師器	坏	[114]	3.7	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラケズリ	覆土下層	50%
8	土師器	坏	[122]	3.5	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	外・内面単純 二次火熱痕	覆土中層	30%
9	土師器	坏	[128]	3.8	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラケズリ	覆土中	30%
10	土師器	坏	[136]	(3.8)	-	長石・石英・赤色粒子	明赤褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラケズリ	覆土中	10%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP 3	土玉	25	20	06	(108)	長石・石英	ナデ調整 孔端部摩耗 一部欠損	覆土下層	PL22
番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 1	白瓦	15	03	04	(1.0)	滑石	全面研磨 一方向からの穿孔	覆土下層	PL24

第193号住居跡(第10～12図)

位置 調査区南東部のF 9h5区、標高26.2mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第204号住居跡を掘り込み、第214・219・220号住居、第21号掘立柱建物、第3号道路に掘り込まれている。

規模と形状 長軸6.34m、短軸6.06mの方形で、主軸方向はN-13°-Wである。壁高は6～30cmで、ほぼ直立している。

床 平坦で、中央部から北壁付近にかけて踏み固められている。壁下には壁溝が巡っている。

竈 北壁中央部やや東寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで150cmで、燃焼部幅は50cmである。袖部は地山を掘り残して基部とし、砂質粘土を含む第13～20層を積み上げて構築されている。火床部は床面から2cmほどくぼんでおり、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外に32cm掘り込まれ、火床部から緩やかに傾斜して立ち上がっている。第21・22層は、火床部の構築土である。

甕土層解説

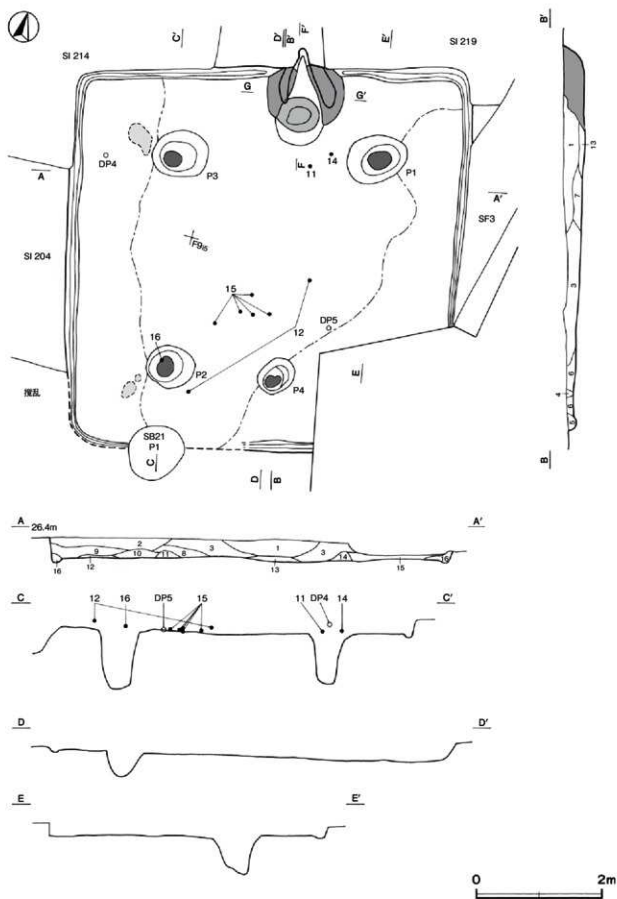
- | | |
|--|---------------------------------------|
| 1 黒褐色 粘土粒子中量、ロームブロック・焼土粒子少量、炭化物微量 | 12 黒褐色 粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 灰黄褐色 粘土粒子多量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 13 黒褐色 炭化物中量、ロームブロック・焼土ブロック少量、粘土粒子微量 |
| 3 暗赤褐色 焼土粒子・粘土粒子多量、炭化粒子少量、ローム粒子微量 | 14 黒褐色 ロームブロック中量 |
| 4 暗褐色 焼土粒子・粘土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量 | 15 黒褐色 粘土粒子多量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 5 黒褐色 粘土粒子中量、ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 16 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・粘土粒子少量、炭化物微量 |
| 6 黒褐色 焼土ブロック・炭化粒子中量、ローム粒子・粘土粒子少量 | 17 黄褐色 粘土粒子多量、ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 7 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量、粘土粒子微量 | 18 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量、粘土粒子微量 |
| 8 暗褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量、粘土粒子微量 | 19 暗褐色 粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 9 暗褐色 粘土粒子多量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 20 暗褐色 焼土粒子中量、ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子少量 |
| 10 黒褐色 焼土粒子中量、ローム粒子少量、炭化粒子・粘土粒子微量 | 21 褐色 粘土粒子中量、ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 11 暗赤褐色 焼土ブロック多量、炭化粒子中量、ローム粒子少量、粘土粒子微量 | 22 黒褐色 焼土粒子多量、炭化粒子少量、ロームブロック・粘土粒子微量 |

ピット 4か所。P1～P3は深さ60～94cmで、配置から主柱穴である。P4は深さ40cmで、南壁寄りの中央部に位置していることから出入口施設に伴うピットと考えられる。

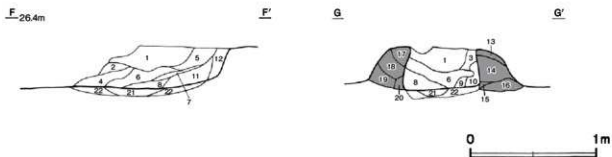
覆土 16層に分層できる。ブロック状の堆積状況を示していることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|-----------------------------------|-------------------------------|
| 1 黒褐色 粘土粒子中量、ロームブロック・焼土粒子少量、炭化物微量 | 9 極暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量 | 10 暗褐色 焼土粒子中量、炭化物・ローム粒子少量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 | 11 黒褐色 炭化材中量、焼土粒子少量、ロームブロック微量 |
| 4 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子中量、炭化粒子少量 | 12 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 5 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子中量、炭化物微量 | 13 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、ロームブロック微量 |
| 6 暗褐色 焼土ブロック多量、ローム粒子中量、炭化粒子微量 | 14 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 7 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量 | 15 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 8 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子中量、炭化物微量 | 16 暗褐色 ローム粒子少量 |



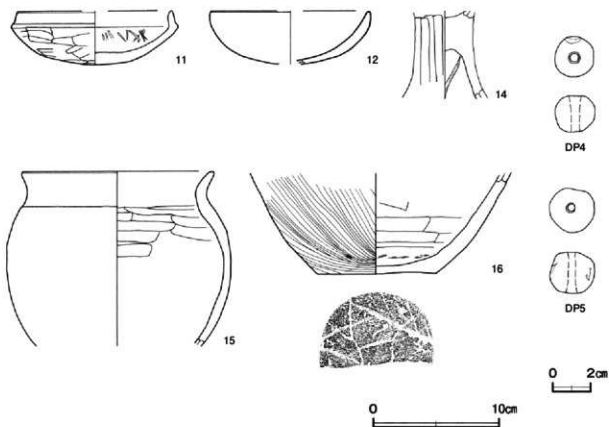
第10图 第193号住居跡実測図(1)



第11図 第193号住居跡実測図(2)

遺物出土状況 土師器片 798点(坏104, 高坏1, 鉢2, 甕691), 土製品3点(土玉), 焼成粘土塊17点が、覆土中層から下層にかけて散在した状態で出土している。また、混入した縄文土器85点(深鉢), 土師器片69点(坏60, 高台付碗5, 高台付皿3, 甕1)も出土している。DP5は中央部の床面, 15は中央部の床面から覆土下層にかけて, 11・14は竈前面, 16はP2上位の覆土下層から, 12は中央部と南部, DP4は北西部の覆土中層から, それぞれ出土している。

所見 時期は, 出土土器や重複関係から6世紀後葉に比定できる。床面から焼土と少量の炭化材が出土しており, 廃絶の際に部材の一部を焼却した可能性がある。



第12図 第193号住居跡出土遺物実測図

第193号住居跡出土遺物観察表 (第12図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考	出土位置	備考
11	土師器	坏	[120]	4.3	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面ヘラミガキ	体部外面ヘラケズリ	覆土下層	60% PL14
12	土師器	坏	[126]	4.2	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	外・内面摩耗		覆土中層	10%
14	土師器	高坏	-	(7.0)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	外面ヘラケズリ後 ナデ 内面工具痕		覆土下層	10%
15	土師器	甕	15.1	(13.8)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ナデ 内面ヘラミガキ		床面・覆土下層	40% PL14
16	土師器	甕	-	(7.0)	9.3	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	外面ヘラミガキ 内面ヘラナデ		覆土下層	20%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP 4	土玉	21	1.9	0.6	(8.7)	長石・石英・雲母・赤色粒子	ナデ調整 一方向からの穿孔 一部欠損	覆土中層	PL22
DP 5	土玉	24	2.2	0.5	12.9	長石・石英	ナデ調整 一方向からの穿孔	床面	PL22

第197号住居跡(第13・14図)

位置 調査区北西部のF 8c0区。標高26.2mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第51号溝、第856号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.95m、短軸5.90mの方形で、主軸方向はN-19°-Eである。壁高は34~46cmで、ほぼ直立している。

床 平坦で、壁際の一部を除いて踏み固められている。壁下には壁溝が巡っている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで130cmで、燃焼部幅は45cmである。袖部は、砂質粘土を含む暗褐色土を積み上げて構築されている。火床部は床面と同じ高さを使用している。火床面は赤変硬化しており、煙道部寄りには支脚が据えられている。煙道部は壁外に25cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

甕土層解説

1	にぶい褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量	10	灰褐色	ロームブロック・焼土粒子少量
2	にぶい橙色	粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	11	灰褐色	ローム粒子・焼土粒子少量
3	灰褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・粘土粒子微量	12	黒褐色	焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
4	にぶい褐色	焼土粒子中量	13	暗褐色	焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
5	灰褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量	14	暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
6	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量	15	灰褐色	焼土ブロック多量、ローム粒子・粘土粒子少量
7	黒褐色	炭化物・ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量	16	暗褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック微量
8	にぶい褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量	17	灰褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量
9	灰褐色	ロームブロック・焼土粒子・粘土粒子少量	18	黒褐色	炭化物・焼土粒子・粘土粒子中量

ピット 5か所。P1~P4は深さ62~70cmで、配置から主柱穴である。P5は深さ20cmで、南壁寄りの中央部に層していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 7層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

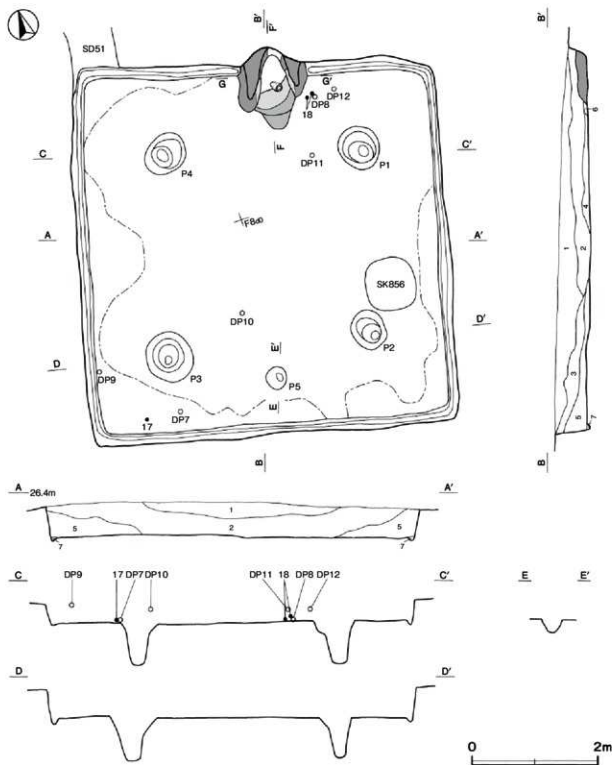
土層解説

1	暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量	5	暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量
2	暗褐色	焼土ブロック・炭化粒子中量、ロームブロック微量	6	暗褐色	焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子多量、ローム粒子中量
3	暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量			
4	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子少量、焼土粒子微量	7	暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量

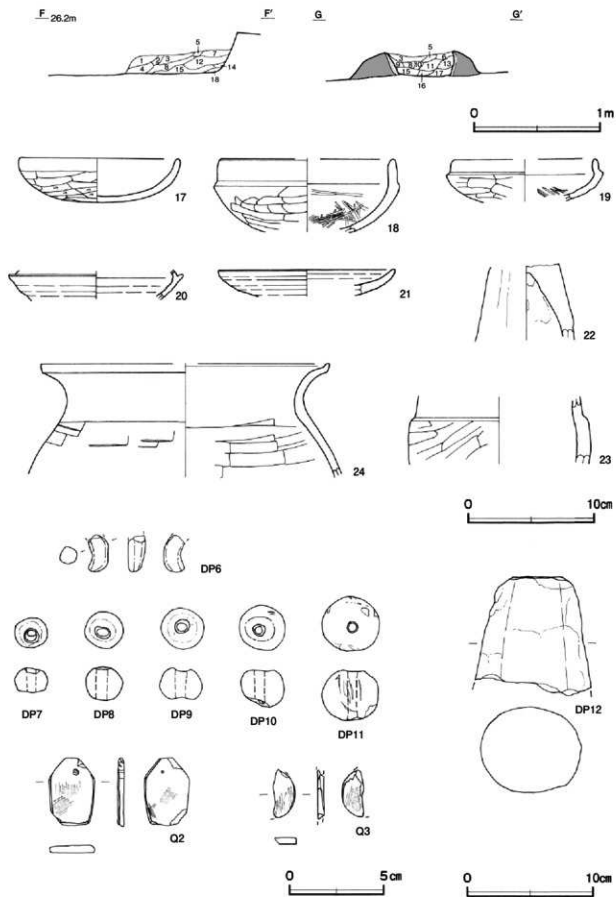
遺物出土状況 土師器片1,480点(坏167, 高坏6, 鉢5, 甕1,296, 瓶6), 須臾器片2点(坏身, 不明), 土製品8点(勾玉1, 土玉5, 支脚2), 石製品2点(有孔円板, 剣形模造品), 焼成粘土塊104点が、覆土上層から床面にかけて散在した状態で出土している。また、混入した縄文土器片187点(深鉢), 須臾器片52

点(坏34, 高台付坏2, 蓋7, 甕9)も出土している。18, DP 8は竈右袖付近, 17は南西部の床面から, DP 7は南西部の覆土下層から, DP10は中央部, DP12は北部, DP11は北東部, DP 9は南西部の覆土上層から, 19~24, DP 6, Q 2・Q 3は覆土中から, それぞれ出土している。

所見 時期は, 出土遺物から6世紀末に比定できる。



第13図 第197号住居跡実測図



第14图 第197号住居跡・出土遺物実測図

第197号住居跡出土遺物観察表(第14図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
17	土師器	坏	125	35	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラケズリ 内面横ナデ	床面	80% PL14
18	土師器	坏	[138]	(58)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子・黒色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラケズリ 内面ヘラミガキ	床面	30%
19	土師器	坏	[102]	(33)	-	長石・石英・雲母・鉄酸化物・赤色粒子	にぶい	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラケズリ 内面ヘラミガキ	覆土中	10%
20	須恵器	坏身	-	(22)	-	長石	黄灰	良好		覆土中	5%
21	須恵器	不明	[139]	(21)	-	長石・石英	灰	良好		覆土中	10%
22	土師器	高坏	-	(58)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい	普通	外面砥ぎ痕	覆土中	10%
23	土師器	鉢	-	(54)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラケズリ 内面ナデ	覆土中	10%
24	土師器	甕	[228]	(90)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ヘラナデ	覆土中	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP 6	勾玉	(20)	1.1	0.9	(20)	長石・石英	ナデ調整 一部欠損	覆土中	PL23

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP 7	土玉	31	2.6	0.5	234	長石・石英	ナデ調整 一方からの穿孔	覆土下層	PL23
DP 8	土玉	25	2.0	0.6	112	長石・石英	ナデ調整 上・下端部穿孔後、ヘラ切り	覆土下層	PL23
DP 9	土玉	23	1.6	0.6	6.6	長石・石英・赤色粒子	ナデ調整 一方からの穿孔	覆土上層	PL23
DP10	土玉	21	1.8	0.6	6.5	長石・石英・赤色粒子	ナデ調整 一方からの穿孔	覆土上層	PL23
DP11	土玉	1.9	1.8	0.5	3.8	長石・石英	ナデ調整 上・下端部穿孔後、ヘラ切り	覆土上層	PL23

番号	器種	最小径	最大径	高さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP12	支脚	5.5	(9.2)	5.5	(90)	長石・石英・雲母・赤色粒子	ナデ調整 一部欠損	覆土上層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 2	磨石	3.6	2.4	0.4	0.1	(6.7)	滑石	全面研磨 一方からの穿孔	覆土中	PL24
Q 3	有孔磨石	(2.6)	(1.3)	0.4	0.1	(1.5)	滑石	全面研磨	覆土中	PL24

第201号住居跡(第15図)

位置 調査区中央部のF 8g0区、標高26.2mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第208A号住居跡を掘り込み、第25号掘立柱建物、第195号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.02m、短軸4.87mの方形で、主軸方向はN-8°-Eである。壁高は1cmである。

床 平坦な貼床で、硬化面は確認できなかった。貼床は、平坦に掘りくぼめた部分にロームブロックや焼土粒子を含む第4~6層を埋土して構築されている。北・東・南西部の一部を除き、壁下には壁溝が巡っている。

竈 北壁中央部に付設されており、火床面のみ確認することができた。火床面は赤変硬化している。

遺土層解説

1 赤褐色 焼土粒子多量、粘土粒子中量、ローム粒子少量 2 暗褐色 色 ローム粒子少量

ピット 4か所。P1~P4は深さ62~76cmで、配置から主柱穴である。

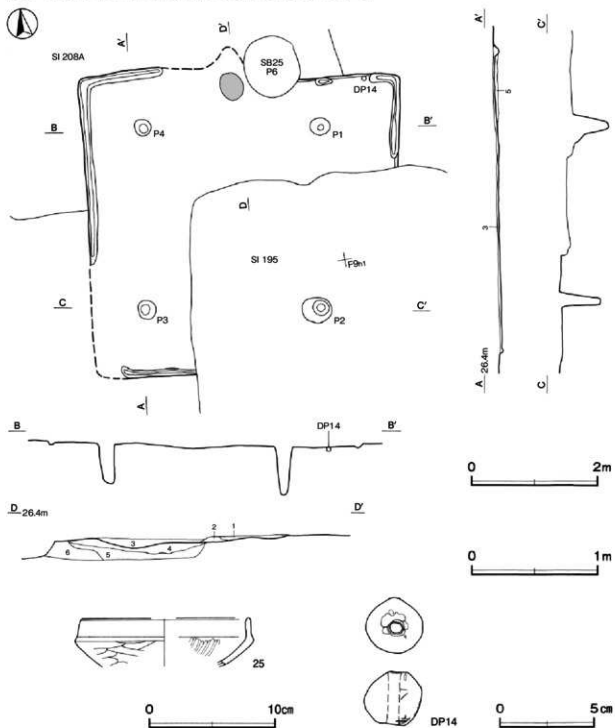
覆土 単一層である。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。第4~6層は貼床の構築土である。

土層解説

3 灰褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量 5 褐色 焼土粒子中量、ロームブロック少量
4 にぶい褐色 ロームブロック中量 6 明褐色 ロームブロック多量

遺物出土状況 土師器片41点(坏18, 甕22, 手捏土器1), 土製品1点(土玉)が出土している。また、混入した縄文土器片17点(深鉢)も出土している。DP14は北西部の床面、25は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器や重複関係から6世紀中葉に比定できる。



第15図 第201号住居跡・出土遺物実測図

第201号住居跡出土遺物観察表 (第15図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
25	土陶器	坏	(130)	(36)	-	長石・石英・雲母・赤色鉄子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラズリ 内面放射状のヘラミズギ	覆土中	10%
番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴		出土位置	備考	
DP14	土玉	30	28	0.7	220	長石・石英	ナデ調整	一方向からの穿孔	床面	PL22	

第202A号住居跡（第16～21図）

位置 調査区北部のF9d2区、標高26.3mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第202B・216号住居跡を掘り込み、第221号住居、第22・23・25号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 長軸6.84m、短軸6.70mの方形で、主軸方向はN-3°-Wである。壁高は50～60cmで、ほぼ直立している。

床 平坦で、壁際を除いて踏み固められている。南壁中央部を除いて壁下には壁溝が巡っている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで85cmで、燃焼部幅は60cmである。右袖部は第202B号住居跡の竈の一部掘り残して基部とし、砂質粘土を含む第18～20・29～31層を積み上げて構築されている。左袖部は砂質粘土を含む第25～28層を積み上げて構築されている。火床部は床面から5cmほどくぼんでおり、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外に18cm掘り込まれ、火床部から緩やかに傾斜して立ち上がっている。

竈土層解説

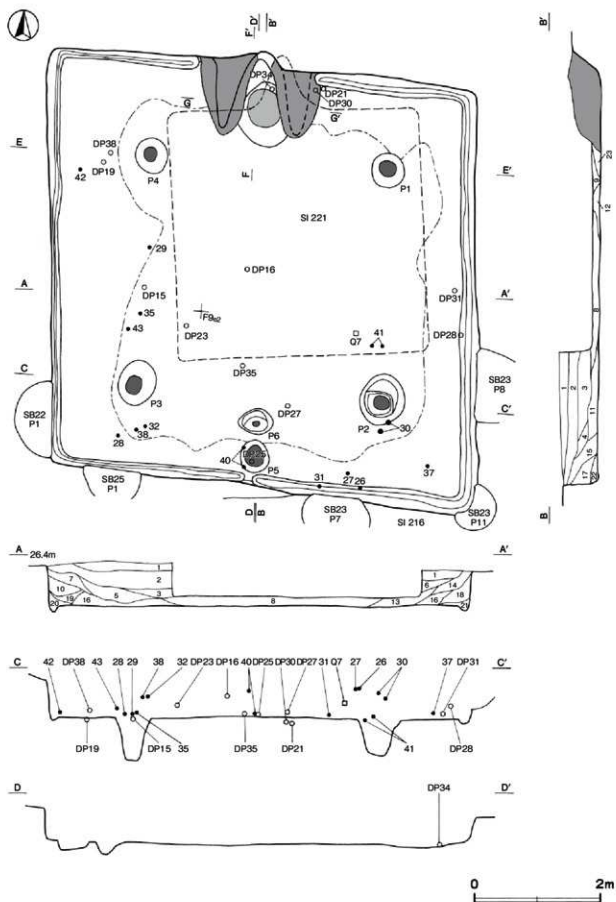
1 暗褐色	焼土ブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微量	19 黒褐色	焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物・ローム粒子少量
2 暗褐色	焼土ブロック中量、炭化材・粘土粒子少量	20 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化材・粘土粒子少量
3 暗褐色	焼土ブロック・粘土ブロック微量	21 暗褐色	焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
4 暗褐色	焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量	22 暗褐色	焼土粒子・炭化粒子少量
5 暗褐色	粘土ブロック中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量	23 黒褐色	ロームブロック中量・焼土ブロック少量
6 暗褐色	焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量	24 赤褐色	焼土ブロック多量、粘土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子微量
7 黒褐色	粘土ブロック少量、炭化物・焼土粒子微量	25 にぶい褐色	砂質粘土ブロック多量、焼土粒子中量、炭化粒子少量、ロームブロック微量
8 灰黄褐色	粘土粒子中量、焼土ブロック少量	26 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化粒子少量、粘土粒子微量
9 暗赤褐色	焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子中量	27 赤黒色	焼土粒子多量、炭化物中量、ロームブロック少量
10 暗褐色	粘土ブロック多量、焼土粒子微量	28 暗褐色	ロームブロック・炭化物・焼土粒子・粘土粒子少量
11 暗褐色	粘土粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量	29 褐色	焼土粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量
12 暗褐色	粘土ブロック少量、炭化物・焼土粒子微量	30 灰褐色	焼土粒子・粘土粒子中量
13 黒褐色	粘土ブロック・焼土粒子中量	31 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
14 暗褐色	焼土ブロック中量、炭化粒子・粘土粒子少量		
15 灰黄褐色	焼土ブロック中量、粘土ブロック少量		
16 暗褐色	粘土ブロック中量、焼土粒子少量		
17 褐色	粘土粒子少量、焼土粒子微量		
18 暗赤褐色	焼土ブロック多量、ローム粒子微量		

ピット 6か所。P1～P4は深さ58～70cmで、配置から主柱穴である。P5・P6は深さ13cm・21cmで、南壁際の中央部に位置していることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。

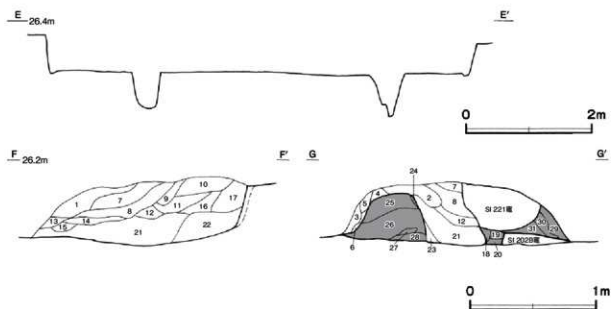
覆土 23層に分層できる。第1・2層は、均質な極暗褐色土と黒褐色土が堆積していることから自然堆積である。第3～23層は、多くの層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

1 極暗褐色	ローム粒子・炭化粒子・砂粒少量	13 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量、粘土粒子微量
2 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量、砂粒微量	14 暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量
3 黒褐色	焼土ブロック・炭化物少量、ロームブロック、粘土粒子微量	15 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
4 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	16 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
5 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量、粘土粒子微量	17 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子・粘土粒子微量
6 黒褐色	炭化物・ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量	18 暗褐色	ロームブロック少量
7 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量	19 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
8 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化材少量、粘土粒子微量	20 暗褐色	ロームブロック中量
9 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量、砂質粘土ブロック微量	21 暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量
10 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量	22 暗褐色	ロームブロック中量、砂質粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
11 黒褐色	ロームブロック・炭化物・焼土粒子少量、砂質粘土ブロック微量	23 暗褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック・砂質粘土ブロック・炭化物少量
12 暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量		



第16图 第202A号住居跡実測图(1)



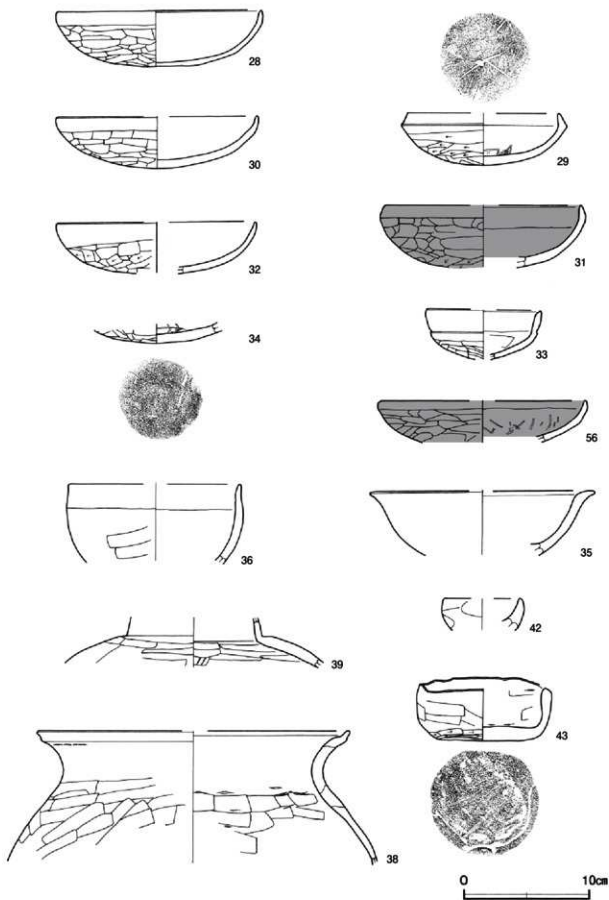
第17図 第202A号住居跡実測図(2)

遺物出土状況 土師器片 3,736点 (坏 377, 高坏 42, 鉢 18, 甕 3,262, 瓶 35, 手捏土器 2), 須恵器片 1点 (坏カ), 土製品 40点 (勾玉 7, 土玉 24, 支脚 9), 石器 1点 (砥石), 石製品 4点 (白玉 2, 小玉 1, 双孔円板カ 1), 滑石剥片 1点, 鉄製品 1点 (鎌), 炭化種子 1点 (桃), 焼成粘土塊 25点が, 南半部の覆土中層から下層を中心に出土している。また, 混入した縄文土器片 303点 (深鉢), 土師器片 1点 (高台付椀), 須恵器片 77点 (坏 54, 蓋 3, 甕 19, 硯 1) も出土している。DP30は竈右袖の構架材から出土している。DP21は竈右袖付近, DP28は東部壁際, 31・DP25は南部壁際, DP19は北西部, DP15は西部の床面から出土している。41は東部の床面と覆土下層から出土した破片が接合したものである。DP23は中央部, 42は北西部, DP31は東部, DP35は南部, 28は南西部, 29・35・43は西部, DP38は北西部の覆土下層から出土している。37は南東部の覆土下層から横位で潰れた状態で出土している。30はP 2付近, 40はP 5上面の覆土下層と上層から, 出土した破片が接合したものである。DP16は中央部, Q 7は東部, 32・38は南西部の覆土中層から出土している。26・27は南部壁際の覆土上層から斜位の状態でも出土しており, 残存率が高いことから, 廃絶時に投棄されたものと考えられる。DP27は南部の覆土上層から出土している。36は竈の覆土中, 33, DP18・DP20・DP26, Q 6・Q 8, M 1は覆土下層, 39, DP24, Q 4は覆土中層, DP22・DP29・DP32・DP33・DP36・DP37, Q 5は覆土上層, 34・56, DP17は覆土中から, それぞれ出土している。

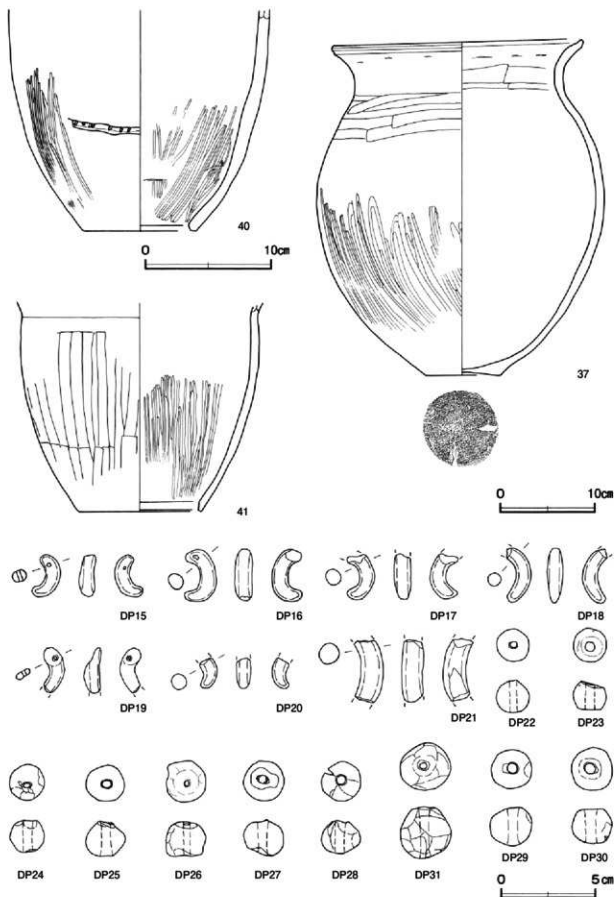
所見 出土遺物や重複関係から7世紀初頭と考えられる。竈の右袖部は, 第202B号住居跡の竈の一部を掘り残し, 構架材を積み上げることで袖部として再利用している。このことから, 本跡は第202B号住居跡を建て替えた住居の可能性がある。



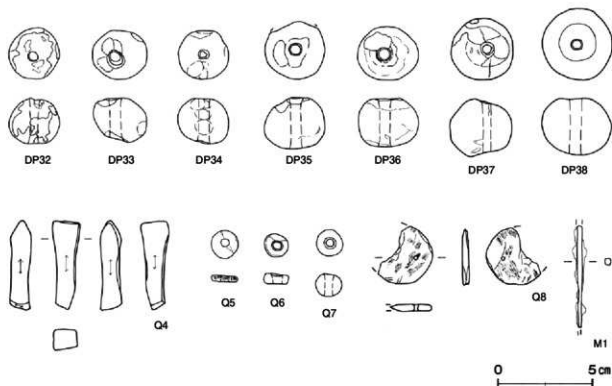
第18図 第202A号住居跡出土遺物実測図(1)



第19図 第202A号住居跡出土遺物実測図(2)



第20图 第202A号住居跡出土遺物実測图(3)



第21図 第202A号住居跡出土遺物実測図(4)

第202A号住居跡出土遺物観察表(第18～21図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	構成	手法の特徴	備考		
25	土師器	坏	13.6	5.4	-	長石・石英・雲母	にぶい	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面横ナデ	体部外面ヘラケズリ 覆土上層	95% PL14	
27	土師器	坏	13.2	4.1	-	長石・石英・赤色 鉄粒子・黒色鉄粒子	明赤褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ ナデ 内面ヘラミガキ	体部外面ヘラケズリ 覆土上層	95% PL14	
28	土師器	坏	16.2	4.5	-	長石・石英	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ ナデ 内面ヘラミガキ	体部外面ヘラケズリ 覆土下層	80% PL14	
29	土師器	坏	[12.0]	4.2	-	長石・石英・雲母・ 赤色鉄粒子・黒色鉄粒子	にぶい赤褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ ナデ 内面ヘラミガキ	体部外面ヘラケズリ 覆土下層	60% PL14	
30	土師器	坏	[16.0]	4.1	-	長石・石英・雲母・ 赤色鉄粒子・黒色鉄粒子	にぶい	普通	口縁部外・内面横ナデ ナデ 内面ナデ	体部外面ヘラケズリ 覆土下層・ 上層	30%	
31	土師器	坏	[15.4]	(4.8)	-	長石・石英・雲母・ 赤色鉄粒子・黒色鉄粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面横ナデ	体部外面ヘラケズリ 床面	30%	
32	土師器	坏	[15.8]	(4.1)	-	長石・石英・雲母・ 赤色鉄粒子・黒色鉄粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面横ナデ	体部外面ヘラケズリ 覆土中層	25%	
33	土師器	坏	[9.2]	(3.9)	-	長石・石英・雲母	にぶい	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面ヘラミガキ	体部外面ヘラケズリ 覆土下層	20%	
34	土師器	坏	-	(1.6)	-	長石・石英・雲母・ 赤色鉄粒子	にぶい	普通	外面ヘラケズリ 内面ヘラミガキ	覆土中	30%	
56	土師器	坏	[16.2]	(3.3)	-	長石・石英・赤色 鉄粒子・黒色鉄粒子	にぶい	普通	口縁部外・内面横ナデ ナデ 内面ヘラミガキ	体部外面ヘラケズリ 覆土中	20%	
35	土師器	高坏	[17.6]	(5.0)	-	長石・石英・赤 色鉄粒子	明赤褐色	普通	外・内面単純	覆土下層	15%	
36	土師器	鉢	[13.5]	(6.3)	-	長石・石英・赤 色鉄粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面ナデ	体部外面ヘラナデ 覆土中	10%	
37	土師器	甕	26.0	35.0	7.8	長石・石英・雲母・ 赤色鉄粒子	にぶい	普通	口縁部外・内面横ナデ 前部外・内面ヘラナデ 体部外面ヘラミガキ後ナデ 内面ナデ	体部外面ヘラケズリ 覆土下層	90% PL14	
38	土師器	甕	[24.8]	(10.5)	-	長石・石英・雲母・ 赤色鉄粒子	にぶい	普通	口縁部外・内面横ナデ	体部外・内面ヘラナデ 覆土中層	10% PL14	
39	土師器	壺	-	(4.0)	-	長石・石英・雲母・ 赤色鉄粒子・黒色鉄粒子	にぶい	黄	口縁部外・内面横ナデ	体部外・内面ヘラナデ 覆土中層	5%	
40	土師器	瓶	-	(17.5)	9.0	長石・石英・赤色 鉄粒子・黒色鉄粒子	橙	普通	体部外・内面ヘラミガキ	接合面にキズ 覆土下層・ 上層	50%	
41	土師器	瓶	-	(21.5)	[12.8]	長石・石英・赤 色鉄粒子	にぶい	普通	口縁部外・内面横ナデ	体部外面縦位のヘラケ ズリ後 ナデ 内面縦位のヘラミガキ	床面・覆土 下層	20%
42	土師器	手捏土器	[6.0]	(2.6)	-	長石・石英・赤色 鉄粒子・黒色鉄粒子	にぶい	普通	外・内面ナデ	覆土下層	10%	
43	土師器	手捏土器	9.9	5.0	8.4	長石・石英・赤色 鉄粒子・黒色鉄粒子	にぶい	普通	外面ヘラケズリ後 ナデ	内面工具痕	覆土下層	85% PL14

番号	器種	長さ	厚さ	孔径	重層	胎土	特徴	出土位置	備考
DP15	勾玉	2.2	1.5	0.9	1.9	長石・石英	ナデ調整 一方からの穿孔	床面	PL23
DP16	勾玉	2.7	1.7	0.9	(3.1)	長石・石英・赤 色鉄粒子	ナデ調整 未完成の穿孔痕1か所 一部欠損	覆土中層	PL23

番号	器種	長さ	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP17	勾玉	(24)	(1.5)	0.9	(2.5)	長石・石英	ナデ調整 一部欠損	覆土中	PL23
DP18	勾玉	(29)	(1.3)	0.8	(2.0)	長石・石英	ナデ調整 一部欠損	覆土下層	PL23
DP19	勾玉	(24)	(1.1)	0.9	(1.5)	長石・石英	ナデ調整 一方からの穿孔 一部欠損	床面	PL23
DP20	勾玉	(1.6)	(0.9)	0.8	(1.1)	長石・石英・赤色粒子	ナデ調整 一部欠損	覆土下層	PL23
DP21	勾玉	(3.3)	(1.5)	1.2	(5.3)	長石・石英・赤色粒子	ナデ調整 一部欠損	床面	PL23

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP22	土玉	1.7	1.7	0.4	4.9	長石・石英	ナデ調整 一方からの穿孔	覆土上層	PL23
DP23	土玉	1.8	1.5	0.5	4.6	長石・石英・赤色粒子	ナデ調整 上・下端面穿孔後、ヘラ切り	覆土下層	PL23
DP24	土玉	1.9	1.7	0.6	6.1	長石・石英・赤色粒子	ナデ調整 上端面穿孔後、ヘラ切り	覆土中層	PL23
DP25	土玉	2.1	1.9	0.7	6.9	長石・石英・赤色粒子	ナデ調整 一方からの穿孔	床面	PL23
DP26	土玉	2.1	1.9	0.4	9.4	長石・石英	ナデ調整 指頭痕 上端面穿孔後、ヘラ切り	覆土下層	PL23
DP27	土玉	2.2	1.9	0.5	8.4	長石・石英・赤色粒子	ナデ調整 上・下端面穿孔後、ヘラ切り	覆土上層	PL23
DP28	土玉	2.1	1.8	0.6	6.4	長石・石英	ナデ調整 一方からの穿孔	床面	PL23
DP29	土玉	2.2	2.0	0.6	8.6	長石・石英・赤色粒子	ナデ調整 一方からの穿孔	覆土上層	PL23
DP30	土玉	2.2	1.8	0.6	9.0	長石・石英・赤色粒子	ナデ調整 上端面穿孔後、ヘラ切り	磁石付機軸材	PL23
DP31	土玉	3.2	(2.7)	0.8	(19.5)	長石・石英	ナデ調整 一方からの穿孔	覆土下層	PL23
DP32	土玉	3.2	2.5	0.7	(21.6)	長石・石英・赤色粒子	ナデ調整 一方からの穿孔 一部欠損	覆土上層	PL23
DP33	土玉	2.7	2.7	0.6	17.3	長石・石英・赤色粒子	ナデ調整 一方からの穿孔	覆土上層	PL23
DP34	土玉	2.7	2.4	0.5	16.2	長石・石英	ナデ調整 一方からの穿孔	覆土中	PL23
DP35	土玉	2.9	2.3	0.6	(17.4)	長石・石英	ナデ調整 指頭痕 上・下端面穿孔後、ヘラ切り	覆土下層	PL23
DP36	土玉	2.7	2.4	0.6	17.5	長石・石英	ナデ調整 指頭痕 一方からの穿孔	覆土上層	PL23
DP37	土玉	3.3	3.1	0.5	31.4	長石・石英	ケズリ後ナデ調整 上・下端面穿孔後、ヘラ切り	覆土上層	PL23
DP38	土玉	3.7	3.0	0.6	42.5	長石・石英	ナデ調整 上端面穿孔後、ヘラ切り	覆土下層	PL23

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 4	砥石	4.7	1.5	1.2	11.1	凝灰岩	紙面5面	覆土中層	PL24

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 5	白玉	1.1	0.2	0.3	0.4	滑石	全面研磨 一方からの穿孔	覆土上層	PL24
Q 6	白玉	1.0	0.4	0.4	0.4	滑石	全面研磨 一方からの穿孔	覆土下層	PL24
Q 7	小玉	1.1	0.9	0.3	1.3	蛇紋岩	全面研磨 一方からの穿孔	覆土中層	PL24

番号	器種	長さ	幅	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 8	双日月形*	2.3	(2.2)	0.3	0.2	(1.7)	滑石	全面研磨 両方向からの穿孔	覆土下層	PL24

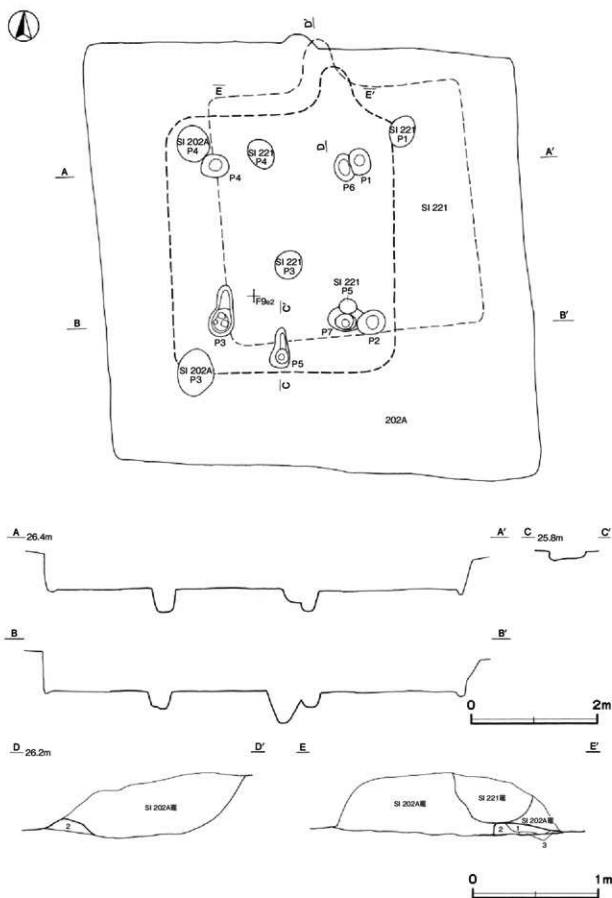
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 1	鏃	(5.5)	(0.2~0.3)	0.3	(3.1)	鉄	断面方形	覆土下層	PL24

第 202B 号住居跡 (第 22 図)

位置 調査区北部の F 9 d2 区、標高 26.3 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 202A・221 号住居に掘り込まれている。

規模と形状 第 202A 号住居に掘り込まれており、竈の一部及びピットの明確な確認できた。竈と柱穴の位置から、長軸 4.00 m、短軸 3.50 m ほどの長方形で、主軸方向は N-4°-W と推定できる。



第 22 图 第 202B 号住居跡实测图

床 第202A号住居に掘り込まれていたため、床面は確認できなかった。

竈 第202A号住居跡の竈右袖部の基部で火床部の一部のみを確認した。北壁東寄りに付設されていたものと推測される。第1層上面が火床面で、赤変硬化している。第2・3層は火床部の構築土である。

竈土層解説

- 1 灰 褐色 焼土ブロック・炭化物・ローム粒子・粘土粒子少量 3 暗 褐色 粘土粒子多量、ローム粒子少量、炭化粒子微量
2 灰 褐色 ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子・粘土粒子微量

ピット 7か所。P1～P4は深さ22～38cmで、配置から支柱穴である。P5は深さ12cmで、支柱穴との位置関係から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6・P7は深さ20cm・56cmで、P6からP1・P7からP2へと、柱の立て替えが行われた可能性がある。

覆土 第202A号住居に掘り込まれていたため、遺存しない。

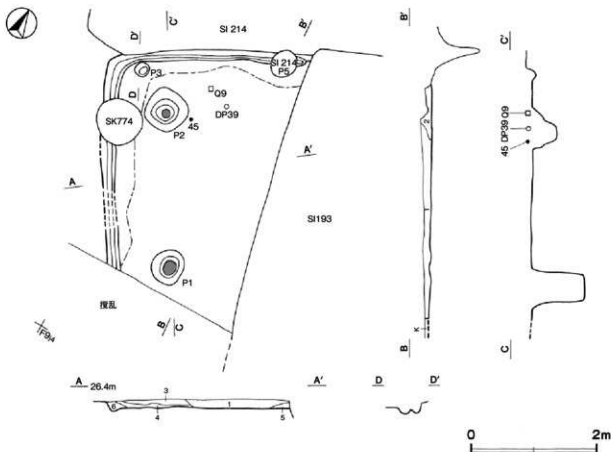
所見 遺物が出土していないため、時期を明確にすることは困難であるが、重複関係や竈を有する住居であることなどから6世紀代と考えられる。

第204号住居跡(第23・24図)

位置 調査区南部のF9区、標高26.2mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第193・214号住居、第774号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 東部を第193号住居に掘り込まれ、南部が調査区域外に延びているため、南北軸4.40m、東西



第23図 第204号住居跡実測図

軸 3.14 mしか確認できなかった。平面形は方形もしくは長方形で、南北軸方向はN-24°-Wである。壁高は12cmで、ほぼ直立している。

床 平坦で、壁際を除いて踏み固められている。壁下には壁溝が巡っている。

ピット 3か所。P1・P2は深さ41cm・80cmで、配置から支柱穴である。P3は深さ10cmで、性格不明である。

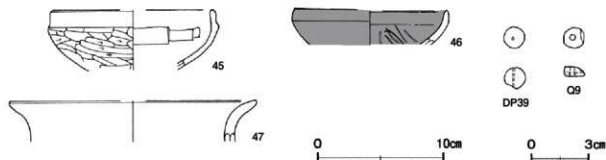
覆土 6層に分層できる。ブロック状の堆積状況を示していることから、埋め戻されている。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	4 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子少量
2 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	5 暗褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
3 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量、炭化粒子極微量	6 黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片153点(坏22, 高坏1, 甕129, 瓶1), 土製品1点(土玉), 石製品1点(白玉)が出土している。また、混入した縄文土器片15点(深鉢), 須恵器片5点(坏2, 高台付坏1, 甕2)も出土している。45はP3覆土中とP2付近の覆土下層から出土した破片が接合したものである。DP39, Q9は北部の覆土下層から、46・47は覆土中から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器や重複関係から6世紀中葉に比定できる。



第24図 第204号住居跡出土遺物実測図

第204号住居跡出土遺物観察表(第24図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
45	土師器	坏	[126]	(48)	-	長石・石英・赤色粒子・黒色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラケズリ 内面ヘラナデ	P3覆土中・覆土下層	10%
46	土師器	坏	[122]	(27)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面ヘラミガキ	覆土中	10%
47	土師器	甕	[195]	(33)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	外・内面横ナデ	覆土中	5%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP39	土玉	1.1	1.1	0.1	1.3	長石・石英	ナデ調整	覆土下層	PL22

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q9	白玉	1.1	0.5	0.3	0.6	滑石	全面研磨 一方向からの穿孔	覆土下層	PL24

第206号住居跡(第25図)

位置 調査区東部のF96区、標高26.0mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第219号住居、第3号道路、第858号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北部及び東部が調査区域外に延びているため、南北軸は3.00m、東西軸は1.75mしか確認できなかった。主軸方向はN-13°-Eである。壁高は10cmで、ほぼ直立している。

床 平坦で、硬化面は確認できなかった。

ピット 2か所。P1は深さ54cmで、配置から主柱穴である。P2は深さ37cmで、主柱穴との位置関係から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

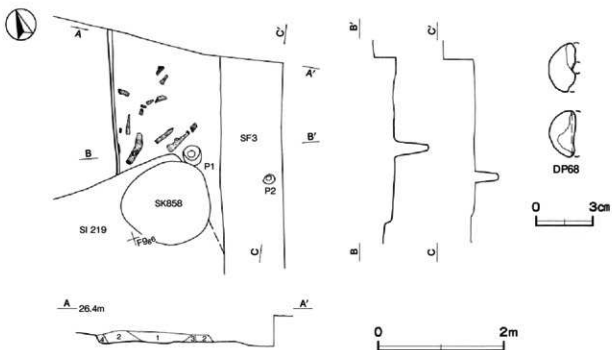
覆土 4層に分層できる。ブロック状の堆積状況を示していることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------|-------|----------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・炭化物・焼土粒子少量 | 3 暗褐色 | ロームブロック・炭化物少量、焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | 炭化材・焼土粒子多量、ローム粒子少量 | 4 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 |

遺物出土状況 土師器片44点(坏7, 甕37)、土製品1点(土玉)、焼成粘土塊4点が出土している。また、混入した縄文土器8点(深鉢)、須恵器片2点(長頭瓶、瓶)も出土している。DP68は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器片から6世紀後半と考えられる。床面から炭化材や焼土粒子が多量に確認できたことから、焼失住居と考えられる。



第25図 第206号住居跡・出土遺物実測図

第206号住居跡出土遺物観察表(第25図)

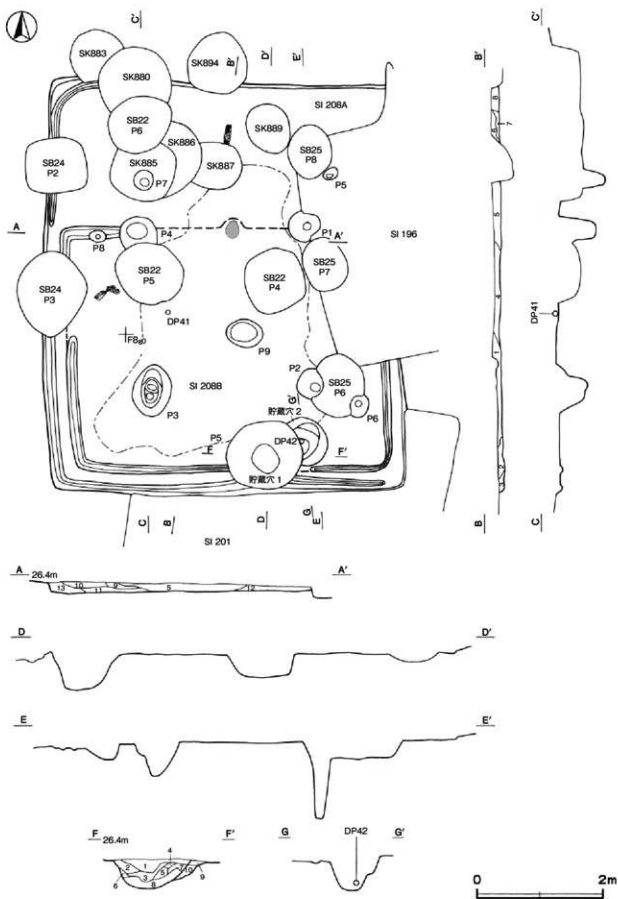
番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	動土	特徴	出土位置	備考
DP68	土玉	(1.5)	(2.5)	(0.7)	(8.0)	長石・石英・赤色粒子	ナメ調整 一方向からの穿孔 一部欠損	覆土中	

第208A号住居跡(第26・27図)

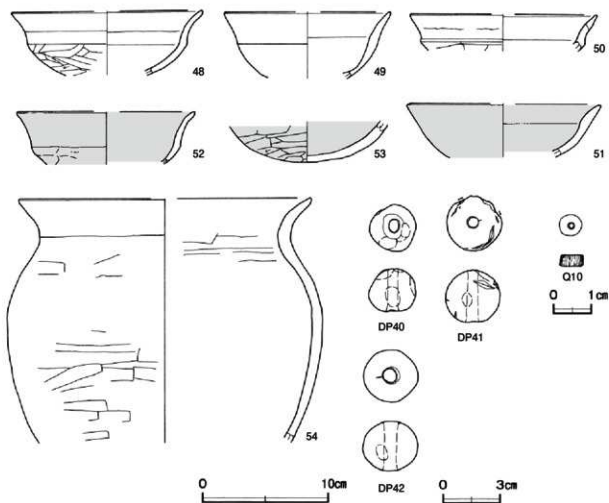
位置 調査区西部のF900区、標高26.2mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第208B号住居跡を掘り込み、第196・201号住居、第22・24・25号掘立柱建物、第880・883・885～887・889・894号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸6.55m、短軸5.74mの長方形で、主軸方向はN-2°-Wである。壁高は4cmで、ほぼ直立している。



第26图 第208A·B号住居跡実測图



第27図 第208A・B号住居跡出土物実測図

床 平坦で、中央部が踏み固められている。第208B号住居跡の竈火床面が踏み固められた状態で確認できたことから、第208B号住居跡の床を再利用しているものと考えられる。西・南壁下で壁溝を確認した。

貯蔵穴1 第208A号住居跡の南壁際やや東寄りに位置し、長軸121cm、短軸107cmの円形で、深さは42cmである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。第1～8層は貯蔵穴1の覆土である。

貯蔵穴1土層解説

1 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	5 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量	6 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量	7 暗褐色	焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子微量
4 暗褐色	焼土粒子中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量	8 褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量

ピット 9か所。P1～P4は深さ47～123cmで、配置から主柱穴である。P5～P9は深さ7～30cmで、性格不明である。

覆土 13層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

1 暗褐色	ロームブロック中量	7 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
2 暗褐色	ロームブロック少量	8 暗褐色	ロームブロック少量・焼土粒子・炭化粒子微量
3 褐色	ロームブロック微量	9 褐色	焼土粒子中量、ロームブロック・炭化粒子微量
4 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・粘土粒子微量	10 褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
5 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量	11 褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
6 暗褐色	炭化物中量、ロームブロック・焼土粒子・粘土粒子少量	12 褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
		13 褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片 139 点 (坏 70, 甕 69), 土製品 1 点 (土玉), 石製品 1 点 (白玉) が出土している。また, 混入した縄文土器片 72 点 (深鉢), 須恵器片 1 点 (甕) も出土している。DP41 は中央部の覆土下層, 51 は貯蔵穴 1 の覆土下層と上層, 48・50・54 は貯蔵穴 1 の覆土上層, Q 10 は覆土上層, 49・52・53, DP40 は覆土中から, それぞれ出土している。

所見 時期は, 出土土器から 6 世紀前葉に比定できる。第 208A 号住居跡は第 208B 号住居跡の東・南・西の三方の壁を若干掘り込んだほか, 主に北側に 2.3 m 拡張されている。焼土ブロックや少量の炭化材が床面付近から出土しており, 第 208 A 号住居の廃絶時に部材の一部を焼却した可能性がある。

第 208A 号住居跡出土遺物観察表 (第 27 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考		
48	土師器	坏	[15.0]	(5.1)	-	長石・石英・赤色 粒子・黒色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面ナデ	体部外面ヘラケズリ	貯蔵穴 1 覆土上層	40%	
49	土師器	坏	[13.0]	(5.3)	-	長石・石英・赤色 粒子・黒色粒子	橙	普通	外・内面摩耗		覆土中	40%	
50	土師器	坏	[14.6]	(2.9)	-	長石・石英・赤色 粒子・黒色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ ナデ	体部内面横ナデ	体部外面ヘラケズリ後	貯蔵穴 1 覆土上層	10%
51	土師器	坏	[15.4]	(4.2)	-	長石・石英・赤色 粒子	赤	普通	口縁部外・内面横ナデ	体部外・内面ナデ	貯蔵穴 1 東 土下層・土層	10%	
52	土師器	坏	[14.0]	(4.2)	-	長石・石英・赤色 粒子	赤	普通	口縁部外・内面横ナデ ナデ	体部外面ヘラケズリ後	内面ナデ	覆土中	5%
53	土師器	坏	-	(3.3)	-	長石・石英・赤色 粒子	赤	普通	外面ヘラケズリ	内面ナデ		覆土中	20%
54	土師器	甕	[23.0]	(19.4)	-	長石・石英・黒 母	明赤褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ	体部外・内面ナデ		貯蔵穴 1 覆土上層	10%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP40	土玉	25	2.2	0.6	129	長石・石英	ナデ調整 指頭直上・下層部穿孔後、ヘラ切り	覆土中	PL22
DP41	土玉	29	2.8	0.6	[21.3]	長石・石英	ナデ調整 工具痕 一方向からの穿孔 一部欠損	覆土下層	PL22

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 10	白玉	0.6	0.3	0.15	0.3	滑石	全面研磨 一方向からの穿孔	覆土上層	PL24

第 208B 号住居跡 (第 26・27 図)

位置 調査区西部の F 9 0 区, 標高 26.2 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 201・208A 号住居, 第 22・24・25 号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 竈火床面と壁溝から長軸 5.10 m, 短軸 3.91 m の長方形と推定される。主軸方向は第 202A 号住居跡と同一である。

床 第 208A 号住居跡南半部の床面で, 第 208B 号住居跡の壁溝を確認した。

竈 第 208A 号住居跡の床面で, 火床面のみ踏み固められた状態で確認した。北壁中央部に付設されている。

貯蔵穴 2 南壁際やや東寄りに位置し, 長軸 80cm, 短軸 78cm の円形で, 深さは 50cm である。底面は皿状で, 壁は外傾して立ち上がっている。第 9・10 層は貯蔵穴 2 の覆土である。締まりが非常に強いことから, 第 208A 号住居跡へ拡張された際に埋め戻されたと考えられる。

貯蔵穴 2 土層解説

9 層 色 ローム粒子多量, 焼土粒子・炭化粒子微量 10 層 色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量

ピット 明確に本跡に伴うピットは確認できなかったが, 第 208A 号住居跡の P 2・P 3 は本跡の主柱穴であり, 第 208A 号住居でも継続して使用されていた可能性がある。

覆土 床面を同じくして第208A号住居に拡張されていたため、覆土は遺存しなかった。

遺物出土状況 土製品1点(土玉)が出土している。DP42は貯蔵穴2への埋土下層から出土している。

所見 時期を明確にできる遺物は出土していないが、竈を有する住居跡であることや、貯蔵穴の位置・形態が第208A号住居と近似していることから、時期は6世紀初頭であると考えられる。

第208B号住居跡出土遺物観察表(第27図)

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP42	土玉	29	26	08	197	長石・石英・針状磁鉄物	ナテ調整 一方からの穿孔	貯蔵穴2埋土下層	PL22

第209号住居跡(第28図)

位置 調査区南部のF9h2区、標高26.2mの平坦な台地上に位置している。

確認状況 覆土のほとんどが削平を受けていたため、床面が露出した状態で確認した。

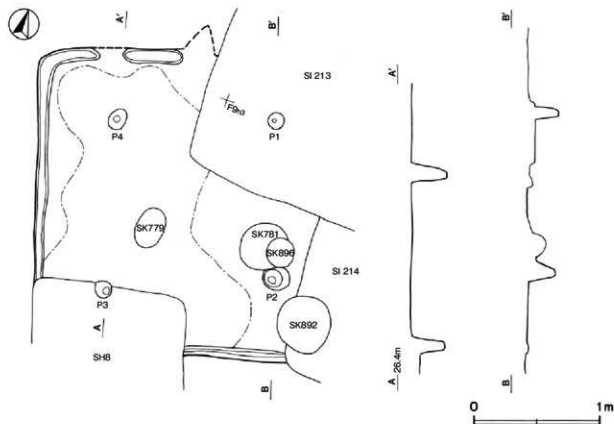
重複関係 第213・214号住居・第8号方形竪穴遺構、第779・781・892・896号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 東部を第213・214号住居に掘り込まれているため、南北軸は4.84mで、東西軸は4.52mしか確認できなかった。平面形は方形もしくは長方形で、南北軸方向はN-17°-Wである。

床 平坦で、中央部から西部にかけて踏み固められている。壁下には北壁の一部を除いて壁溝が巡っている。

竈 わずかなくほみが確認できたことから、北壁中央部に付設されていたと考えられるが、規模・形状は不明である。

ピット 4か所。P1~P4は深さ42~54cmで、配置から主柱穴である。



第28図 第209号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片7点(坯5, 甕2)が出土している。また、混入した縄文土器片1点(深鉢)が出土している。いずれも細片のため図示できない。

所見 時期は、出土土器や重複関係から6世紀代と考えられる。

第216号住居跡(第29・30図)

位置 調査区中央部のF9地区、標高26.2mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第194・200A・202A号住居、第23・25号掘立柱建物、第816・820・895・907号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北部を第202A号住居、南部を第194・200A号住居に掘り込まれているため、南北軸4.50m、東西軸5.00mしか確認できなかった。平面形は方形もしくは長方形で、南北軸方向はN-8°-Wである。壁高は6cmで、ほぼ直立している。

床 平坦な貼床で、壁際を除いて踏み固められている。貼床は、平坦に掘りくぼめた部分にローム粒子を含む第10層を埋土して構築されている。東壁下及び西壁下で壁溝を確認した。

竈 北壁中央部に付設されている。北部を202A号住居に掘り込まれていたため、規模は焚口部から煙道部までが130cm、燃焼部幅は36cmしか確認できなかった。袖部は、砂質粘土を含む暗褐色土を積み上げて構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さを使用しており、火床面は赤変硬化している。

竈土層解説

- | | |
|----------------------------------|--------------------------------|
| 1 暗褐色 焼土粒子多量、粘土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量 | 3 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 | 4 灰褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 |

ピット 5か所。P1～P4は深さ46～70cmで、配置から主柱穴である。P5は深18cmで、主柱穴との位置関係から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

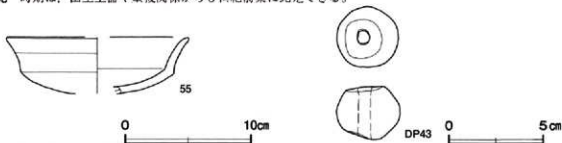
覆土 9層に分層できる。ブロック状の堆積状況を示していることから、埋め戻されている。第10層は貼床の構築土である。

土層解説

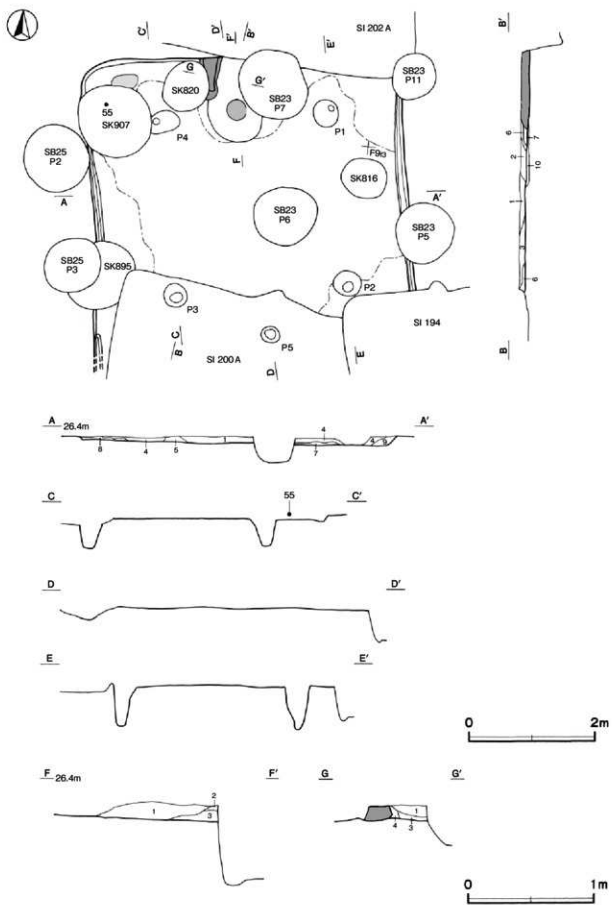
- | | |
|---------------------------|--------------------------|
| 1 灰褐色 ロームブロック・焼土粒子・粘土粒子少量 | 6 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック・粘土粒子少量 | 7 暗褐色 焼土粒子中量、ローム粒子少量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子微量 | 8 褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、粘土粒子微量 |
| 4 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量 | 9 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 5 暗褐色 ロームブロック少量 | 10 暗褐色 ローム粒子少量 |

遺物出土状況 土師器片66点(坯13, 甕53)、土製品1点(土玉)焼成粘土塊1点が出土している。また、混入した縄文土器片30点(深鉢)、土師器片1点(高台付皿)須恵器片4点(甕3, 甌1)も出土している。55は北西部の覆土下層と覆土中、DP43は竈の覆土中から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器や重複関係から6世紀前葉に比定できる。



第29図 第216号住居跡出土遺物実測図



第30图 第216号住居跡実測図

第216号住居跡出土遺物観察表 (第29図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
55	土師器	埴	[142]	(45)	-	長石・石英・細礫	橙	普通	外・内面単純	覆土下層・覆土中	40% PL14
番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴			出土位置	備考
DP63	土玉	3.3	2.8	0.7	29.5	長石・石英・赤色砂子	ナテ調整	上・下端部穿孔状、ヘラ切り		覆土中	PL22

第220号住居跡 (第31図)

位置 調査区南東部のF9h5区、標高26.0mの平坦な台地上に位置している。

確認状況 第193号住居跡の調査中に、壁溝や床面の一部が確認された。

重複関係 第193号住居跡を掘り込み、第3号道路に掘り込まれている。

規模と形状 大半を第3号道路に掘り込まれており、第193号住居跡の調査時に一部を除いて床面を掘り込んでしまったため、規模・形状ともに明確にできなかった。壁高は8cmで、ほぼ直立している。

床 平坦な貼床で、確認できた部分は踏み固められている。貼床は、炭化材、焼土粒子、ローム粒子を含む第2層を埋土して構築されている。

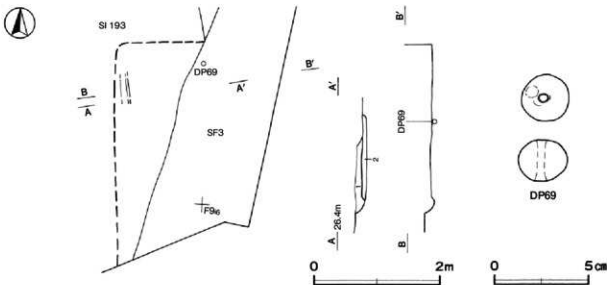
覆土 単一層である。焼土ブロックや炭化物を含んでいることから、埋め戻されている。第2層は貼床の構築土である。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化物・焼土粒子少量 2 暗褐色 炭化材・焼土粒子多量、ローム粒子少量

遺物出土状況 土師器片18点(坏8、甕10)、土製品1点(土玉)、焼粘土塊1点が出土している。また、混入した縄文土器1点(深鉢)も出土している。DP69は北部の床面から出土している。

所見 時期は、出土土器から6世紀代と考えられる。



第31図 第220号住居跡・出土遺物実測図

第220号住居跡出土遺物観察表 (第31図)

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴		出土位置	備考
DP69	土玉	2.6	2.2	0.4	14.0	長石・石英	ナテ調整	一方向からの穿孔	床面	PL22

表2 古墳時代堅穴住居跡一覧表

番号	位置	平面形	主軸方向	規模 長軸×短軸(m)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設				障土	主な出土遺物	時期	備考	
								注柱穴	基入口	ゴト	伊・重					新視穴
22	F 817	[方形]	N-28°-W	6.04 × 6.04	2	平坦	一部	3	1	-	覆1	-	人為	土師器片	6世紀後半	本跡→SI 2・13・14
170	F 911	[方形 長方形]	N-17°-W	7.92 × 7.00	5	平坦	-	4	2	3	覆1	1	人為	土師器片, 土玉, 支脚	7世紀初葉	本跡→SI198, SD49
191	F 964	[方形 長方形]	N-17°-W	3.20 × (2.50)	23-32	平坦	全周	2	1	-	-	-	人為	土師器片, 土玉, 支脚, 有孔円板	6世紀後半	本跡→SK761
193	F 915	方形	N-13°-W	6.34 × 6.06	6-30	平坦	ほぼ全周	3	1	-	覆1	-	人為	土師器片, 土玉	6世紀後半	SI304 → 本跡 → SI214・219・220, SI221, SF 3
197	F 810	方形	N-19°-E	5.95 × 5.90	34-46	平坦	全周	4	1	-	覆1	-	人為	土師器片, 陶器器片, 白土, 土玉, 支脚, 石, 土師器片, 刺形透通器	6世紀末	本跡→SK856, SD61
201	F 810	方形	N-8°-E	5.02 × 4.87	1	平坦	一部	4	-	-	覆1	-	人為	土師器片, 手取土器, 土玉	6世紀中葉	SI208A → 本跡 → SI196, SI205
202A	F 912	方形	N-3°-W	6.84 × 6.70	50-60	平坦	全周	4	2	-	覆1	-	自然・人為	土師器片, 手取土器, 陶器器片, 白土, 土玉, 支脚, 磁石, 白玉, 小石, 双孔円板, 滑石酒注, 瓦器, 炭化種子	7世紀初葉	SI202B・216 → 本跡 → SI221, SI222・23・25
202B	F 912	[長方形]	N-4°-W	(4.00) × (3.38)	-	-	-	4	1	2	覆1	-	-	-	6世紀代	本跡→SI202A・221
204	F 914	[方形 長方形]	N-24°-W	(4.40) × (3.14)	12	平坦	全周	2	-	1	-	-	人為	土師器片, 土玉, 白玉	6世紀中葉	本跡→SI190・214, SK724
206	F 916	[方形 長方形]	N-13°-E	(3.00) × (1.75)	10	平坦	-	1	1	-	-	-	人為	土師器片, 土玉	6世紀後半	本跡→SI219 → SF 3, SK856
208A	F 910	長方形	N-2°-W	6.55 × 5.74	4	平坦	ほぼ全周	4	-	5	-	1	人為	土師器片, 土玉, 白玉	6世紀前半	SI208B → 本跡 → SI196・201, SB22・24・25, SK880・883・885 → SK779・781・892・895
208B	F 910	長方形	N-2°-W	5.10 × 3.91	-	平坦	ほぼ全周	-	-	-	覆1	1	-	土玉	6世紀初葉	本跡→SI201, 208A, SB22・24・25
209	F 912	[方形 長方形]	N-17°-W	4.84 × (4.52)	-	平坦	ほぼ全周	4	-	-	覆1	-	-	土師器片	6世紀代	本跡→SI18・213・214, SK779・781・892・895
216	F 912	[方形 長方形]	N-8°-W	5.00 × (4.50)	6	平坦	一部	4	1	-	覆1	-	人為	土師器片, 土玉	6世紀前半	本跡→SI194・200A・202A, SB22・24・25, SK816・818・820・853・895・907
223	F 915	[方形 長方形]	-	-	8	平坦	一部	-	-	-	-	-	-	土師器片, 土玉	6世紀代	SI193 → 本跡 → SF 3

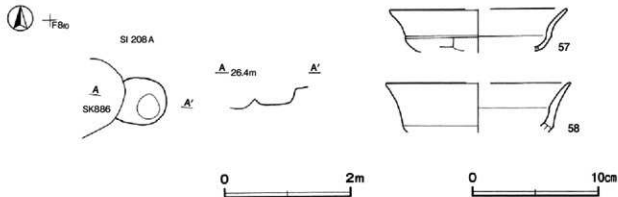
(2) 土坑

第 887 号土坑 (第 32 図)

位置 調査区西部のF 810区, 標高26.2mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第208A号住居跡を掘り込み, 第886号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 西部を第886号土坑に掘り込まれているため, 南北径は0.74mで, 東西径は0.63mしか確認できなかった。平面形は楕円形で, 長径方向はN-18°-Eと推定される。深さ26cmで, 底面は平坦であり, 壁は外傾して立ち上がっている。



第32図 第887号土坑・出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片13点(坏7,高坏1,甕5)が出土している。また、混入した縄文土器片3点(深鉢)も出土している。57・58は覆土中層から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から6世紀前葉に比定できる。

第887号土坑出土遺物観察表(第32図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
57	土師器	坏	[140]	(34)	-	長石・石英・赤色 粒子・黒色粒子	赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面ナデ	覆土中層	5%
58	土師器	坏	[146]	(39)	-	長石・石英・赤色 粒子・黒色粒子	赤褐	普通	外・内面摩耗	覆土中層	5%

第906号土坑(第33図)

位置 調査区北部のF8b0区、標高25.5mの平坦な台地上に位置している。

確認状況 第2号遺物包含層の堆積土中から確認された。

規模と形状 長径1.14m、短径0.84mの楕円形で、長径方向はN-54°-Wである。深さ22cmで、底面は皿状であり、壁は外傾して立ち上がっている。

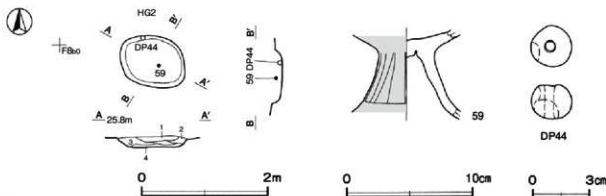
覆土 4層に分層できる。ブロック状の堆積状況から、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | | | |
|---|-----|--------------------------------|---|-----|---------------------------|
| 1 | 灰褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量 | 4 | 暗褐色 | 焼土ブロック多量、炭化物・ローム粒子・粘土粒子少量 |
| 2 | 暗褐色 | ロームブロック・粘土粒子少量、焼土粒子微量 | | | |
| 3 | 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微量 | | | |

遺物出土状況 土師器片6点(高坏1,甕5),土製品1点(土玉)が出土している。また、混入した縄文土器片2点(深鉢)も出土している。59は中央部、DP44は北壁際の覆土下層から、それぞれ出土している。

所見 底面付近の覆土には焼土ブロックや炭化材が含まれており、埋め戻しの際に混入したものと考えられる。時期は、出土土器から6世紀前葉に比定できる。



第33図 第906号土坑・出土遺物実測図

第906号土坑出土遺物観察表(第33図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
59	土師器	高坏	-	(72)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子・黒色粒子	赤	普通	脚部外側ヘラケズリ後・ナデ 裾部横ナデ 内面ナデ	覆土下層	30%
番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴			出土位置	備考
DP44	土玉	22	18	0.6	7.5	長石・石英	ナデ調整			覆土下層	PL22

表3 古墳時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
887	F 8 8 野	N-18°-E	[楕円形]	0.74 × 0.63	26	平坦	外傾	人為	土師器片	重複関係(古→新)
906	F 8 6 0	N-54°-W	楕円形	1.14 × 0.84	22	現状	外傾	人為	土師器片、土玉	SEZORA → 本跡 → SK886 本跡 → HG 2 再 掘

2 奈良時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴住居跡 11 軒、土坑 2 基を確認した。継続調査の遺構に関しては、本報告に伴い年代の再考を行った。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第 14 号住居跡 (第 34・35 図)

位置 調査区西部の F 8 8 区、標高 26.3 m の平坦な台地上に位置している。

確認状況 北西については平成 18 年度に調査し、『第 308 集』において報告している。南東部については平成 21 年度に調査した。

重複関係 第 22 号住居跡を掘り込み、第 5 号住居、第 24 号掘立柱建物、第 845・865・866・872・875・877・881・905 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 7.12 m、短軸 6.40 m の長方形で、主軸方向は N-12°-W である。壁高は 14 cm で、ほぼ直立している。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。北壁下の一部で、壁溝を確認した。

竈 北壁中央部に付設されている。右袖部を第 24 号掘立柱建物に掘り込まれているため、焚口部から煙道部までは 90 cm、燃焼部幅は 24 cm しか確認できなかった。袖部は、砂質粘土を含む暗褐色土を積み上げて構築されている。火床部は床面と同じ高さを使用しており、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外に 10 cm 掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

電土層解説

- | | | | |
|------|-----------------------|------|----------------------|
| 1 褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 3 褐色 | 焼土粒子多量、ローム粒子少量、炭化物微量 |
| 2 褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子少量、炭化物微量 | 4 褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 |

ピット 6 か所。P 1～P 3 は深さ 52～65 cm で、配置から主柱穴である。P 4 は深さ 52 cm で、土層と位置の関係から、P 1 に立て替えられる以前の主柱穴と推定される。P 5 についても、位置関係から、P 2 に立て替えられる以前の主柱穴と推定される。P 6 は深さ 60 cm で、性格不明である。第 1～6 層は P 1 の覆土で、第 7・8 層は P 4 の柱抜き取り後の埋土である。多くの層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

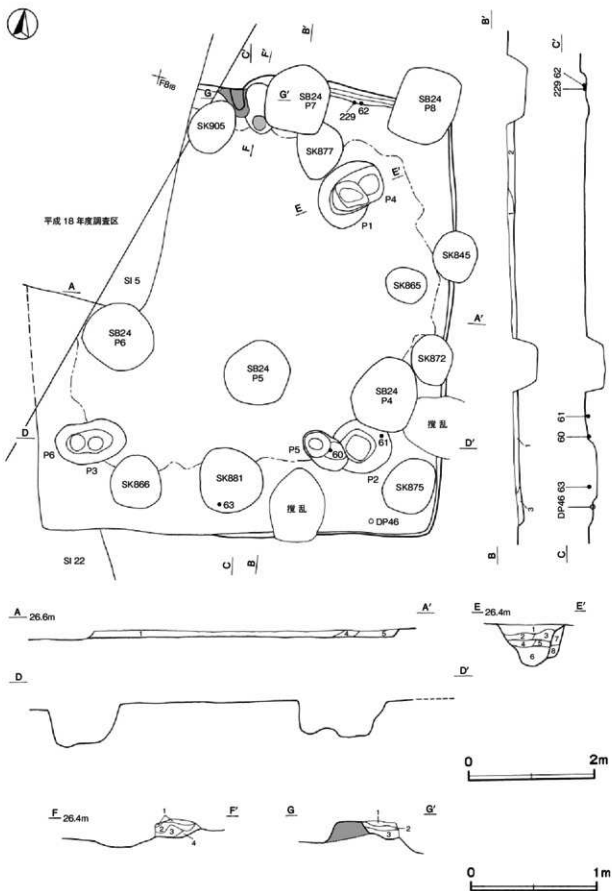
ピット土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|-------|----------------------|
| 1 褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・炭化物微量 | 6 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 3 褐色 | ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量 | 7 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量 | 8 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量 |

覆土 5 層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

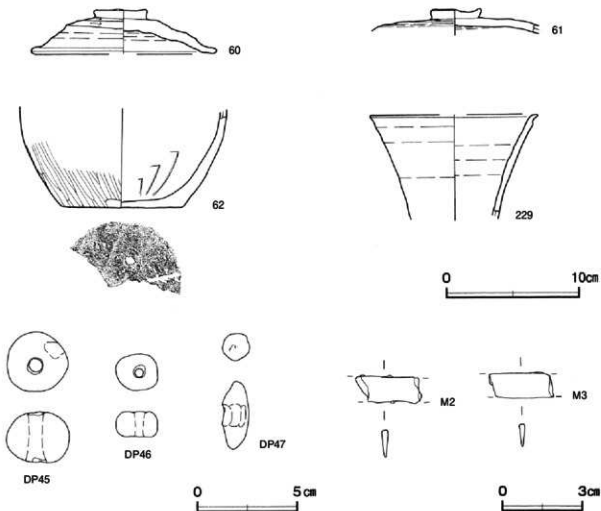
- | | | | |
|-------|------------------|-------|------------------|
| 1 灰褐色 | ロームブロック少量 | 4 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 |
| 3 褐色 | ロームブロック中量 | | |



第34図 第14号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片 199点 (坏42, 甕157), 須恵器片 31点 (坏19, 蓋2, 甕8, 平瓶2), 土製品3点 (土玉2, 不明1), 鉄製品2点 (刀子) が出土している。また, 混入した縄文土器片 28点 (深鉢), 土師器1点 (高坏) が出土している。61はP2, 60はP5の覆土上層, DP46は南東部の床面, 62・229は北東部, DP45・DP47, M2・M3は覆土中から, それぞれ出土している。

所見 時期は, 出土土器から8世紀前葉に比定できる。



第35図 第14号住居跡出土遺物実測図

第14号住居跡出土遺物観察表 (第35図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
60	須恵器	蓋	[140]	33	-	長石・石英・雲母・黒色粒子	黄灰	良好	天舟部回転ヘラケズリ後, つまみ貼り付け	床面	70% PL16
61	須恵器	蓋	-	(21)	-	長石・石英・雲母	灰白	良好	天舟部回転ヘラケズリ後, つまみ貼り付け	床面	30%
62	土師器	小形甕	-	(7.5)	[90]	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	外面ヘラミガキ 内面ヘラナデ	覆土下層	20%
229	須恵器	平瓶	[126]	(7.8)	-	長石・石英・黒色粒子	黄灰	良好	外面自然乾	覆土下層	10%
番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴			出土位置	備考
DP45	土玉	3.1	2.6	0.9	20.7	長石・石英	ナデ調整	一方向からの穿孔		覆土中	PL22
DP46	土玉	2.1	1.3	0.5	6.0	長石・石英	ナデ調整	上・下端部に凹み		床面	PL22
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴			出土位置	備考
DP47	不明土製品	3.4	1.4	1.4	6.1	長石・石英・黒色粒子	磨頭痕	未穿孔の管状土鏝*		覆土中	PL22

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M2	刀子	(25)	11	0.2	(1.9)	鉄	断面三角形	覆土中	PL24
M3	刀子	(24)	10	0.3	(2.0)	鉄	断面三角形	覆土中	PL24

第 192 号住居跡 (第 36 図)

位置 調査区東部の F 9 丘区、標高 26.2 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 205 号住居跡を掘り込み、第 217・219 号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 3.59 m、短軸 3.54 m の隅丸方形で、主軸方向は N-11°-W である。壁高は 29cm で、ほぼ直立している。

床 平坦で、大部分を第 217 号住居に掘り込まれていたため、硬化面は確認できなかった。

竈 北壁中央部に付設されている。大部分を第 217 号住居に掘り込まれているため、燃烧部幅 70cm しか確認できなかった。

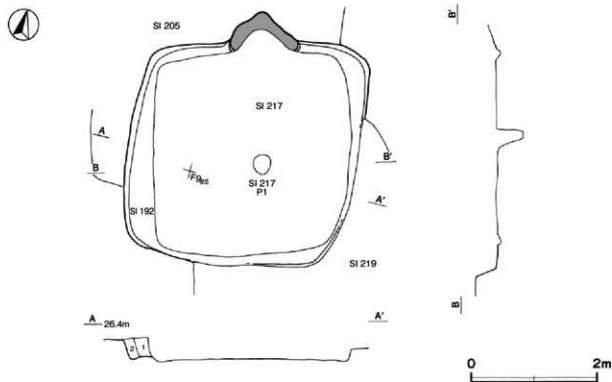
覆土 2層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 黒 褐色 焼土粒子・炭化粒子中量、ロームブロック微量 2 黒 褐色 炭化粒子少量、ロームブロック・焼土ブロック微量

遺物出土状況 土師器片 2 点 (甕)、須恵器片 2 点 (坏、甕) が出土しているが、いずれも細片のため図示できない。

所見 時期は、出土土器や重複関係から 8 世紀中葉と考えられる。



第 36 図 第 192 号住居跡実測図

第 194 号住居跡 (第 37・38 図)

位置 調査区中央部の F 9 区、標高 26.2 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 200A・216 号住居跡を掘り込み、第 212・213・214 号住居に掘り込まれている。

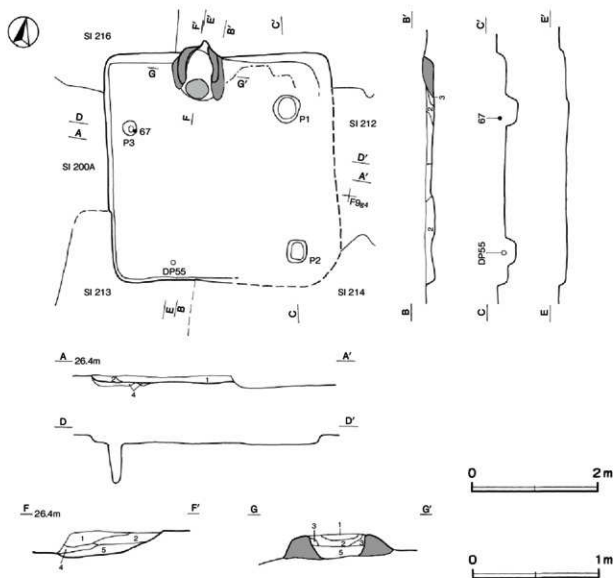
規模と形状 長軸 3.64 m、短軸 3.60 m の方形で、主軸方向は N-10°-W である。壁高は 6-18 cm で、ほぼ直立している。

床 平坦な貼床で、北東部を除き踏み固められている。貼床は、炭化物、ローム粒子、焼土粒子を含む第 4 層を埋土して構築されている。

竈 北壁中央部やや西寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 90 cm で、燃焼部幅は 44 cm である。袖部は砂質粘土を含む暗褐色土を積み上げて構築されている。火床部は床面と同じ高さを使用しており、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外に 22 cm 掘り込まれ、火床部から緩やかに傾斜して立ち上がっている。

埋土層解説

- | | |
|--------------------------------|------------------------------------|
| 1 黒褐色 焼土粒子多量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量 | 4 黒褐色 焼土ブロック多量、炭化粒子中量、ローム粒子・粘土粒子微量 |
| 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子・粘土粒子微量 | 5 黒褐色 炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 3 黒褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 | |



第 37 図 第 194 号住居跡実測図

ピット 3か所。P1～P3は深さ14～62cmで、配置から主柱穴である。

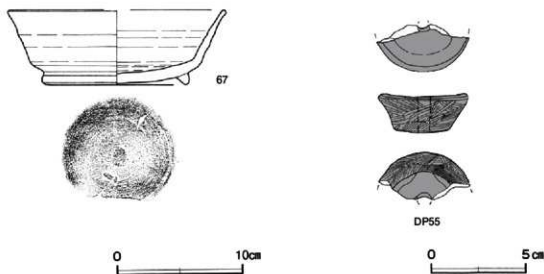
覆土 3層に分層できる。各層にロームブロックや焼土ブロックが含まれていることから、埋め戻されている。第4層は貼床の構築土である。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------|-------|---------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 黒褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 2 黒褐色 | 炭化物・ローム粒子少量、焼土ブロック微量 | 4 黒褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片413点(坏15, 甕396, 瓶2), 須恵器片47点(坏25, 高台付坏6, 甕16), 土製品4点(支脚3, 紡錘車1), 碗状洋1点(108g)が、覆土下層を中心に散在した状態で出土している。また、混入した縄文土器片77点(深鉢), 土師器片67点(坏60, 高台付皿7)も出土している。DP55は南西部の床面、67はP3上位の覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀中葉に比定できる。



第38図 第194号住居跡出土遺物実測図

第194号住居跡出土遺物観察表 (第38図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
67	須恵器	高台付坏	[17.1]	60	11.1	粘土・灰質 炭化物・黒色粒子	灰	良好	底部回転ヘラケズリ	覆土下層	60% PL15
番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴		出土位置	備考	
DP55	紡錘車	(25)	20	0.6	(18.1)	長石・石英・赤色 色粒子	ヘアミガキ		床面	PL23	

第195号住居跡(第39・40図)

位置 調査区南部のF8h0区、標高26.2mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第201号住居跡を掘り込み、第765号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.62m、短軸4.34mの方形で、主軸方向はN-6°-Eである。壁高は7～19cmで、ほぼ直立している。

床 平坦な貼床で、中央部が窪み固められている。貼床は、ロームブロック、焼土ブロック、炭化物などを含む第①・②層を埋土して構築されている。東壁下および西壁下で壁溝を確認した。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで121cmで、燃烧部幅は66cmである。袖部は地山を掘り残して基部とし、ロームブロックを含む第10～12層を積み上げて構築されている。火床部は袖部構築後に第13～18層を埋土して構築されており、床面と同じ高さで、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外に8cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

覆土層解説

1	褐	色	焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量	9	褐	色	ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量、焼土粒子微量	
2	灰	褐色	焼土粒子少量、炭化物・ローム粒子微量	10	にぶい	橙	色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
3	褐	色	粘土粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量	11	暗	褐色	粘土粒子少量、ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	
4	灰	褐色	焼土ブロック多量、炭化物・粘土粒子少量、ローム粒子微量	12	暗	褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量、粘土粒子微量	
5	灰	褐色	焼土ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子・粘土粒子微量	13	暗	褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	
6	灰	褐色	炭化粒子中量、焼土ブロック・粘土粒子少量、ローム粒子微量	14	暗	褐色	焼土粒子多量、炭化粒子少量、ローム粒子・粘土粒子微量	
7	灰	褐色	粘土粒子多量、ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量	15	暗	褐色	焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量	
8	灰	褐色	粘土粒子中量、焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量	16	暗	褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	
				17	暗	褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	
				18	暗	褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	

ピット 5か所。P1～P4は深さ34～57cmで、配置から主柱穴である。P5は深さ38cmで、南壁寄りの中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

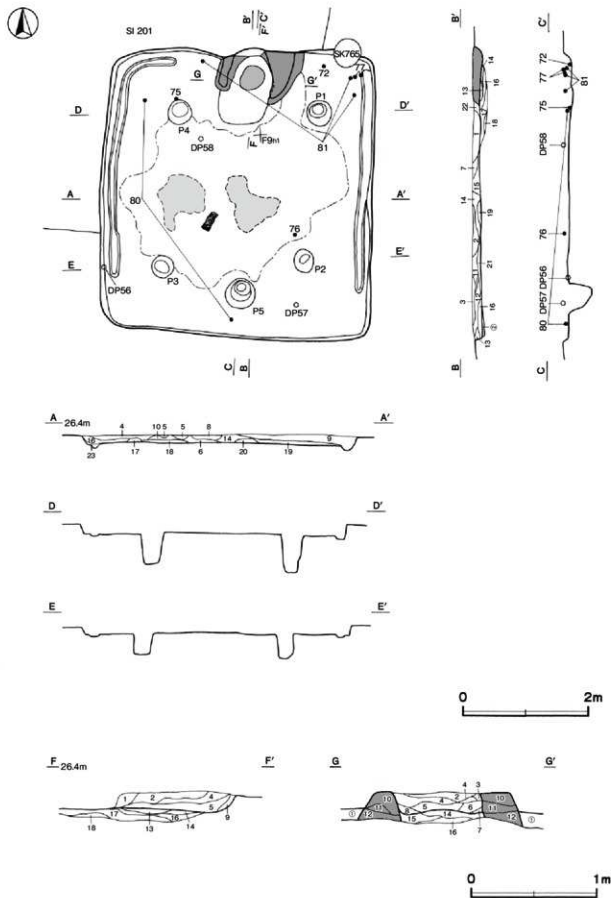
覆土 23層に分層できる。ブロック状の堆積状況から、埋め戻されている。第①・②層は貼床の構築土である。

土層解説

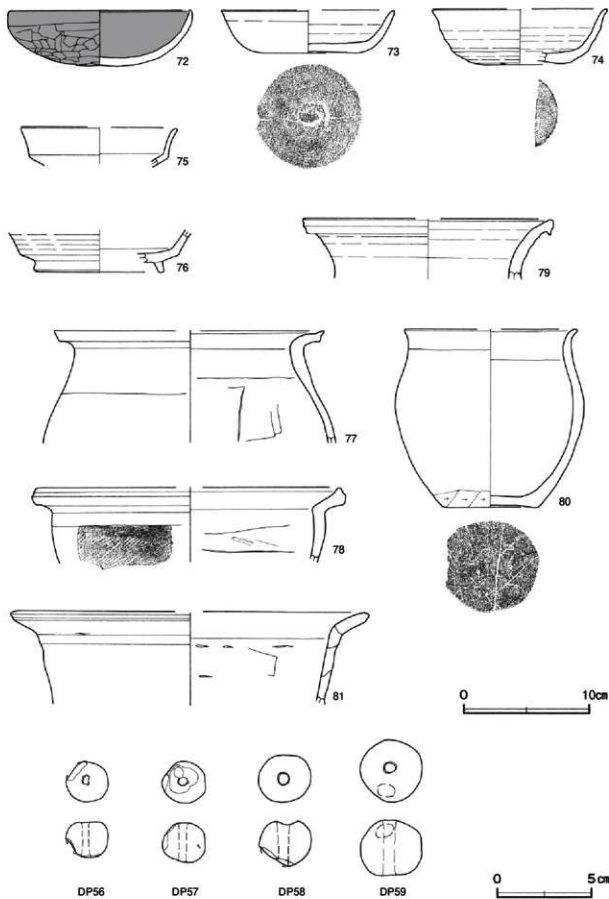
1	灰	褐色	焼土ブロック・ローム粒子少量、粘土粒子微量	14	暗	褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子少量
2	褐	色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	15	暗	褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、粘土粒子微量
3	褐	色	ローム粒子少量、焼土ブロック微量	16	褐	色	ローム粒子少量
4	褐	色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量	17	暗	褐色	ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量
5	灰	褐色	焼土ブロック・ローム粒子少量	18	灰	褐色	ローム粒子・焼土粒子少量
6	灰	褐色	ローム粒子・焼土粒子少量	19	褐	色	ロームブロック微量
7	灰	褐色	ローム粒子・粘土粒子少量、焼土粒子微量	20	褐	色	ローム粒子・粘土粒子少量
8	褐	色	ローム粒子少量、焼土粒子微量	21	暗	褐色	ローム粒子・粘土粒子少量、焼土粒子微量
9	暗	褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック微量	22	暗	褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量
10	暗	褐色	ローム粒子・焼土ブロック少量、炭化粒子微量	23	灰	褐色	ロームブロック少量
11	褐	色	ロームブロック少量	①	暗	褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・粘土粒子微量
12	灰	褐色	ロームブロック少量	②	褐	色	ローム粒子少量、焼土粒子微量
13	褐	色	ロームブロック中量				

遺物出土状況 土師器片406点(坏34、碗1、甕368、瓶3)、須恵器片63点(坏40、高台付坏6、蓋1、甕16)、土製品4点(土玉)、焼成粘土塊11点が、覆土下層から床面にかけて、散在した状態で出土している。また、混入した縄文土器片50点(深鉢)が出土している。73は竈火床部の構築土、72は北東部、75は北西部の床面から出土している。76、DP58は中央部、77は北東部、DP57は南部、DP56は南西部西壁際の覆土下層から出土している。81は北部壁際と北東部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。80は南部と北西部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。74・78・79、DP59は覆土中から出土している。80は、破片が3.8mの間隔をもって出土しており、破砕の後投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から8世紀前葉に比定できる。中央部の床面から焼土ブロックや少量の炭化材が出土したことから、廃絶の際に部材の一部を焼却した可能性がある。



第 39 图 第 195 号住居跡実測図



第40图 第195号住居跡出土遺物実測図

第 195 号住居跡出土遺物観察表 (第 40 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
72	土師器	坏	14.3	4.4	-	長石・石英・雲母	黒	普通	口縁部外・内面横ナデ ナデ 体部内面横ナデ	床面	55% PL15
73	須恵器	坏	[136]	3.4	8.2	長石・石英	に白い黄	良好	底部回転ヘラケズリ	遺構粘土	60% PL15
74	須恵器	坏	[138]	4.4	[58]	長石・石英・黒色 色粒子	灰	良好	体部下端回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ	覆土中	20% PL15
75	須恵器	高台付坏	[122]	(3.1)	-	長石・石英	灰	良好	体部下端回転ヘラケズリ	床面	5%
76	須恵器	高台付坏	-	(3.4)	[92]	長石・石英・新 状紙物	灰	良好	底部回転ヘラケズリ	覆土下層	5%
77	土師器	甕	[21.4]	(8.8)	-	長石・石英・雲母	に白い黄	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ナデ 体部内 面ヘラナデ	覆土下層	10%
78	須恵器	甕	[24.0]	(5.8)	-	長石・石英	灰	良好	口縁部外・内面横ナデ 体部斜位の平行押し成 ナデ 体部内面ヘラナデ	覆土中	5%
79	須恵器	甕	[19.5]	(4.8)	-	長石・石英	灰	良好	内面ヘラナデ	覆土中	5%
80	土師器	小形甕	[13.7]	14.1	7.5	長石・石英・赤 色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ナデ 体部外 面下層ヘラケズリ 外・内面・底部に二次火痕	覆土下層	60%
81	土師器	甕	[27.8]	(7.3)	-	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	に白い黄	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面ヘラナデ	覆土下層	5%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP56	土玉	2.3	1.9	0.4	(8.7)	長石・石英・赤 色粒子	ナデ調整 一方からの穿孔 一部欠損	覆土下層	PL22
DP57	土玉	2.3	2.2	0.6	10.1	長石・石英	ナデ調整 一方からの穿孔	覆土下層	PL22
DP58	土玉	2.3	2.4	0.6	(15.3)	長石・石英	ナデ調整 一部欠損	覆土下層	PL22
DP59	土玉	3.3	2.9	0.7	31.7	長石・石英	ナデ調整 一方からの穿孔	覆土中	PL22

第 196 号住居跡 (第 41・42 図)

位置 調査区中央部の F 9 目区、標高 26.2 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 208A 号住居跡を掘り込み、第 22・25 号据立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 3.77 m、短軸 3.33 m の長方形で、主軸方向は N-15°-W である。壁高は 28cm で、ほぼ直立している。

床 平坦で、壁際及び窓の前方を除いて踏み固められている。壁下には溝が巡っている。

竈 北壁中央部に付設されている。廃絶時に破壊されていたため、右袖部は確認できなかった。規模は焚口部から煙道部まで 145cm で、燃焼部幅は 50cm ほどと推定される。袖部は砂質粘土を含む暗褐色土を積み上げて構築されている。火床部は床面より 3cm ほど高まっており、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外に 90cm 掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。第 4 層は火床部の構築土である。

甕土層解説

- | | | | | | |
|-----|---|------------------------------|-----|---|------------------------------|
| 1 層 | 色 | 粘土粒子中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量 | 4 層 | 色 | 炭化粒子多量、焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 層 | 色 | 焼土粒子中量、粘土粒子少量、ロームブロック・炭化粒子微量 | 5 層 | 色 | 焼土粒子中量、炭化粒子少量、ローム粒子微量 |
| 3 層 | 色 | 焼土粒子少量、砂質粘土ブロック・炭化粒子微量 | | | |

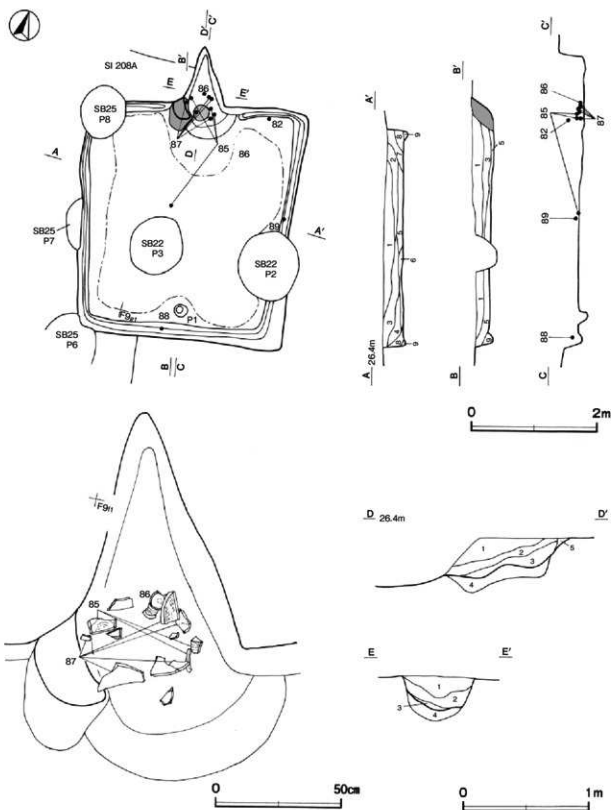
ピット P 1 は深さ 14cm で、南壁際の中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 9層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | | | |
|-----|---|----------------------------|-----|---|----------------------|
| 1 層 | 色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量 | 6 層 | 色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 2 層 | 色 | 焼土粒子・炭化粒子少量、ロームブロック微量 | 7 層 | 色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量 |
| 3 層 | 色 | 焼土粒子少量、ロームブロック・炭化粒子微量 | 8 層 | 色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 層 | 色 | 焼土ブロック・炭化物・ローム粒子少量 | 9 層 | 色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 5 層 | 色 | 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量、ロームブロック微量 | | | |

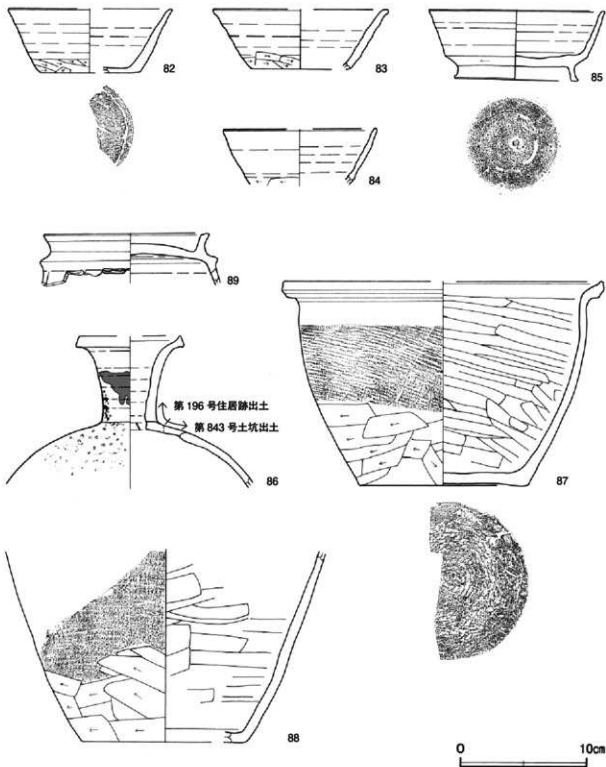
遺物出土状況 土師器片 295 点 (壺 295)、須恵器片 38 点 (坏 30、高台付坏 1、甕 5、長頸瓶 1、円面碗 1)、土製品 4 点 (土玉)、焼成粘土塊 26 点が、壁際及び竈周辺の覆土下層を中心に出土している。また、混入した縄文土器 71 点 (深鉢)、土師器 15 点 (坏 13、高台付碗 1、高台付皿 1) も出土している。86 の頭部は竈



第 41 図 第 196 号住居跡実測図

火床部から逆位で出土しており、支脚として転用された可能性がある。87は竈火床部から出土した破片が接合したものである。85は竈周辺と中央部、89は東壁際、88は南壁際の覆土下層、82は北東部の覆土中層から出土している。83・84は覆土上層から出土している。86は第843号土坑、87は第198号住居跡から出土した破片との接合関係が確認できた。

所見 時期は、出土土器から8世紀後葉に比定できる。



第42図 第196号住居跡出土遺物実測図

第196号住居跡出土遺物観察表 (第42図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
82	須恵部	坏	[130]	51	(70)	長石・石英・黒色粒子	灰	良好	体部下端手持ちヘラケズリ	底部一方のヘラケズリ	覆土中層	10%
83	須恵部	坏	[136]	(48)	[80]	長石・石英・黒色粒子	灰白	良好	体部下端手持ちヘラケズリ		覆土上層	10%
84	須恵部	坏	[122]	(44)	-	長石・石英・赤色粒子	灰黄	良好	体部下端手持ちヘラケズリ		覆土上層	20%
85	須恵部	高台付坏	138	55	98	長石・石英	灰	良好	体部下端手持ちヘラケズリ	底部回転ヘラケズリ	覆土下層	90% PL15
86	須恵部	長距離	[80]	(121)	-	長石・石英・黒色粒子	黒	良好	器底から肩部三枚構成	外面および口縁部付近内面自然釉	壺・火床部	20% S88Gの産片と整合 PL25
87	須恵部	甕	[250]	(161)	134	長石・石英・黒色粒子	黒	良好	口縁部より幅狭ナデ	体部斜(口付)内面	体部斜(口付)内面	16% S88Gの産片と整合 PL27
88	須恵部	瓶	-	(152)	[130]	長石・石英	灰	良好	体部精子叩き	体部下位ヘラケズリ	内面ヘラケズリ	10%
89	須恵部	円面碗	132	(41)	-	長石・石英・針状黒粒子	灰	良好	脚部に7歳以上の鋭い沈痾	通し孔4か所	覆土下層	50% PL16

第198号住居跡(第43・44図)

位置 調査区南部のF 9il区、標高26.1mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第170号住居跡、第904号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸4.00m、短軸3.75mの隅丸方形で、主軸方向はN-11°-Wである。壁高は15cmで、外傾している。

床 平坦な貼床で、北東コーナー部、南東コーナー部、北西コーナー部を除いて踏み固められている。貼床は、平坦に掘りくぼめた部分にローム粒子を含む第14層を埋土して構築されている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで122cmで、燃焼部幅は56cmである。袖部は砂質粘土を含む暗褐色土を積み上げて構築されている。火床部は床面と同じ高さを使用しており、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外に14cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

覆土層解説

- 1 暗褐色 焼土ブロック中量、炭化物・粘土粒子少量 2 暗褐色 焼土粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量

ピット 7か所。P1～P4は深さ32～47cmで、配置から主柱穴である。P5は深さ14cmで、南壁寄りの中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6・P7は深さ12cm・8cmで、配置から竈に係わるピットと考えられるが、明確な用途については不明である。

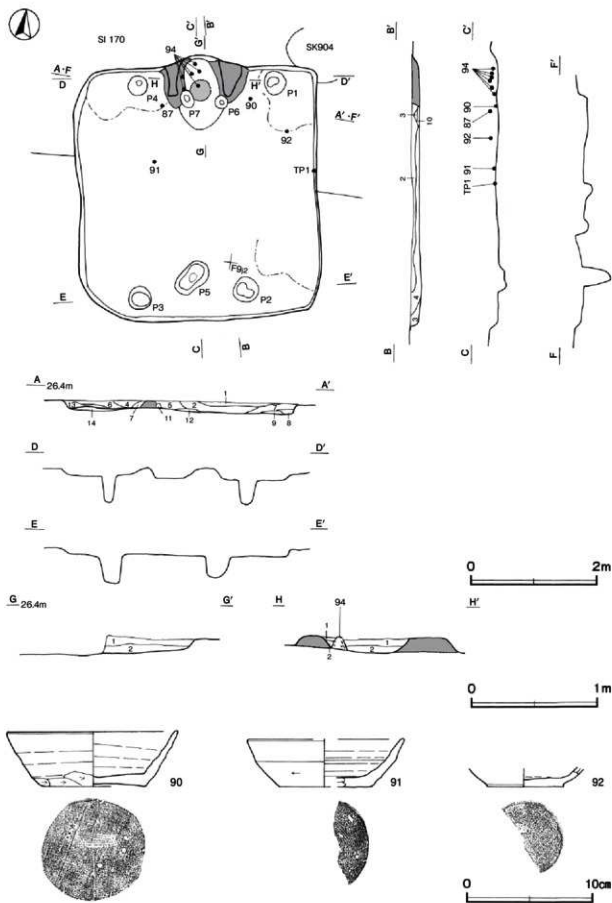
覆土 13層に分層できる。ブロック状の堆積状況から、埋め戻されている。第14層は貼床の構築土である。

土層解説

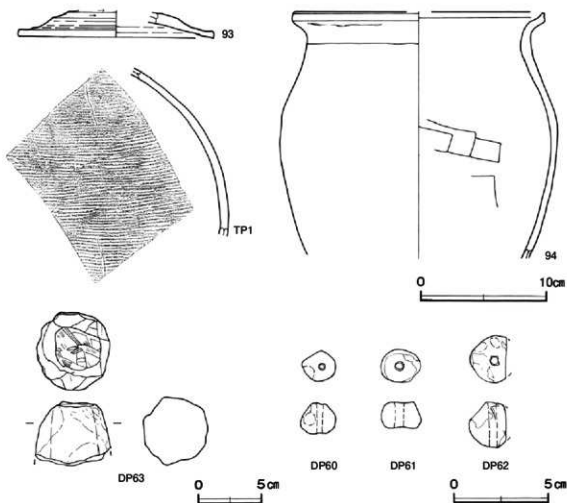
- 1 黒褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 8 黒褐色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量 9 褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
 3 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 10 黒褐色 炭化粒子少量、焼土粒子中量、ローム粒子少量
 4 黒褐色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量 11 に近い褐色 ローム粒子微量
 5 黒褐色 粘土粒子中量、焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量 12 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
 6 黒褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量 13 黒褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
 7 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 14 暗褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 土師器片115点(坏10、甕105)、須恵器片36点(坏14、高台付坏1、蓋4、甕15、瓶1、器種不明1)、土製品4点(土玉3、支脚1)、焼成粘土塊7点が出土している。また、混入した縄文土器16点(深鉢)も出土している。90は竈右袖付近の床面から正位の状態でも出土している。91は中央部、TP1は東壁際床の床面から出土している。94は竈火床面付近の覆土下層から出土した破片が接合したもので、遺棄されたものと考えられる。92は北東部、87は竈左袖付近の覆土下層、93・DP60・DP61・DP62・DP63は覆土中から、それぞれ出土している。87は第196号住居跡から出土した破片との接合関係が確認できた。

所見 時期は、出土土器から8世紀後葉に比定できる。



第 43 图 第 198 号住居跡・出土遺物実測図



第44図 第198号住居跡出土遺物実測図

第198号住居跡出土遺物観察表(第43・44図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
90	須恵器	坏	134	4.3	8.2	長石・石英・黒色粒子	褐灰	良好	体部下端手持ちヘラケズリ 底部へラ書き「ニ」	床面	90% PL15
91	須恵器	坏	[120]	3.8	[7.2]	長石・石英・細粒・黒色粒子	黄灰	良好	口縁部外・内面横ナデ 体部下端回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ	床面	20%
92	須恵器	坏	-	(1.5)	6.0	長石・石英・黒色粒子	灰	良好	底部一方向の手持ちヘラケズリ	覆土下層	20%
93	須恵器	蓋	[15.4]	(2.0)	-	長石・石英・黒色粒子	灰	良好	火舟部回転ヘラケズリ	覆土中	20%
94	土師器	甕	[19.8]	(19.4)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部内面ヘラナデ	覆土下層	30% PL17

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP1	須恵器	葉	長石・石英・雲母	黄灰	良好	外面横位の平行叩き痕ナデ 内面同心円文の当具痕	床面	

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP60	土玉	1.8	1.7	0.35	4.3	長石・石英	ナデ調整 一方向からの穿孔	覆土中	PL22
DP61	土玉	2.1	1.4	0.5	6.2	長石・石英	ナデ調整 上・下端部穿孔後ヘラ切り	覆土中	PL22
DP62	土玉	(2.0)	2.4	0.5	(10.8)	長石・石英・赤色粒子	ナデ調整 一方向からの穿孔	覆土中	PL22

番号	器種	最小径	最大径	高さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP63	支脚	3.8	5.9	(5.0)	(13.0)	長石・石英・細粒・赤色粒子	ナデ調整 頂部に工具痕 一部欠損	覆土中	

第 200A 号住居跡 (第 45・46 図)

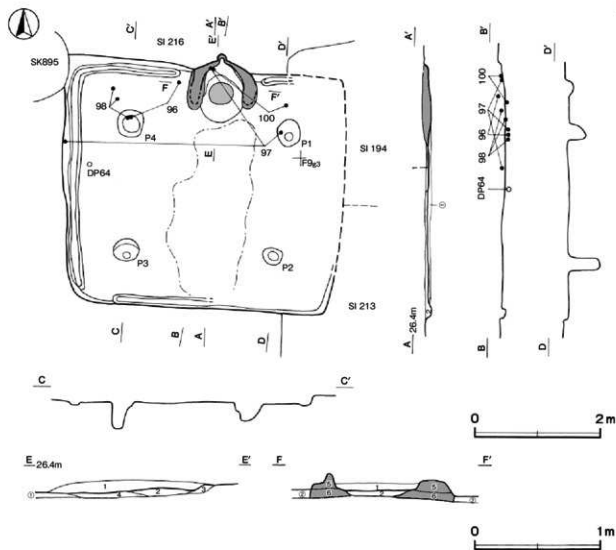
位置 調査区中央部の F 9g2 区、標高 26.2 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 200B・216 号住居跡を掘り込み、第 194・213 号住居、第 895 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 4.36 m、短軸 3.90 m の長方形で、主軸方向は N-3°-W である。壁高は 10cm で、ほぼ直立している。

床 平坦な貼床で、中央部が踏み固められている。貼床は、平坦に掘りくぼめた部分にロームブロック、焼土粒子、炭化粒子を含む第①・②層を埋土して構築されている。南東コーナー部、南西コーナー部を除いて壁下には壁溝が巡っている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 106cm で、燃烧部幅は 56cm である。袖部は、灰褐色砂粒、ロームブロック、焼土ブロック、炭化粒子を含む第 5・6 層を積み上げて構築されている。火床部及び煙道部は、袖部構築後に第 2～4 層を埋土して構築されており、床面と同じ高さで、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外に 24cm 掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。



第 45 図 第 200A 号住居跡実測図

電土層解説

- | | |
|-------------------------------------|--------------------------------------|
| 1 黒 褐色 焼土ブロック・炭化粒子中量、ローム粒子少量、粘土粒子微量 | 4 黒 褐色 焼土ブロック多量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 |
| 2 暗 褐色 焼土ブロック・粘土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子微量 | 5 灰 褐色 灰褐色砂粒多量、焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 3 暗 褐色 ローム粒子・炭化粒子少量 | 6 暗 褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量 |

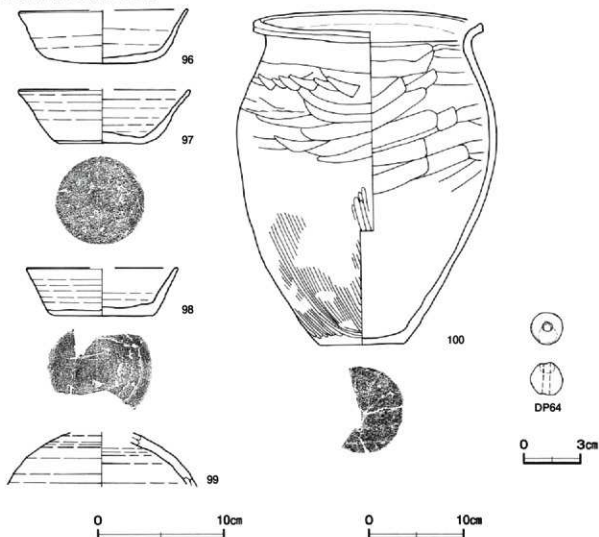
ピット 4か所。P1～P4は深さ28～50cmで、配置から支柱穴である。

覆土 2層に分層できる。層厚が薄く、堆積状況は不明である。第①・②層は貼床の構築土である。

土層解説

- | | |
|-------------------------------------|------------------------------|
| 1 黒 褐色 粘土粒子中量、炭化粒子少量、ロームブロック・焼土粒子微量 | ① 暗 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗 褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子・粘土粒子微量 | ② 暗 褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 |

遺物出土状況 土師器片274点(坏35, 甕類239), 須恵器片33点(坏23, 甕8, 瓶2), 土製品1点(土玉), 焼成粘土塊12点が出土している。また、混入した縄文土器22点(深鉢)も出土している。100は竈火床部の北部と北東部の床面から出土した遺物が接合したものである。DP64は西部の床面から出土している。96・98は北西部の覆土下層から床面にかけて、P4の覆土上層から出土した遺物が接合したものである。97は竈火床部北部の覆土下層、西壁と壁溝間で確認した平坦部、P1の覆土上層から出土した遺物が接合したものである。99は覆土中から出土している。100は、破片が最大35mの間隔をもって出土しており、破碎の後投棄されたものと考えられる。



第46図 第200A号住居跡出土遺物実測図

所見 時期は、出土土器から8世紀前葉に比定できる。本跡の掘方調査で第200B号住居跡が確認できた。長軸方向が近似しており、本跡の壁面が第200B号住居跡の外側にあることから第200B号住居跡から拡張されていると考えられ、北・東・南・西の4方に、0.2～0.6m拡張されている。

第200A号住居跡出土遺物観察表(第46図)

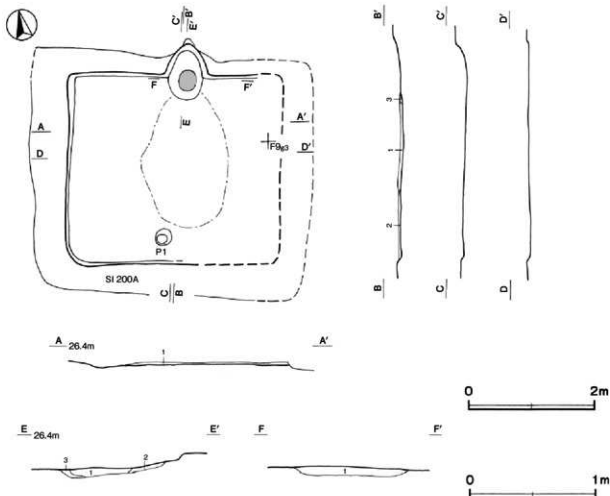
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
96	須恵器	坏	[13.4]	4.3	-	長石・石英・黒色粒子	灰	良好	底部多方向のヘラケズリ	履土下層～瓦面 P3履土上層	80% PL15
97	須恵器	坏	[13.5]	4.3	7.0	長石・石英・雲母	灰	良好	底部一方向の手持ちヘラケズリ	履土下層～瓦面 P1履土上層	60% PL15
98	須恵器	坏	[11.8]	3.9	7.8	長石・石英・雲母	黄灰	良好	底部一方向の手持ちヘラケズリ	履土下層～瓦面 P4履土上層	40%
99	須恵器	瓶	-	(4.2)	-	長石	暗黄灰	良好		履土中	10%
100	土師器	壺	23.8	34.5	8.8	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面磨ナデ 体部内面磨部・体部ヘラナデ 体部外面下位ヘラミガキ	履土床部・体面	90% PL17

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DFW4	土玉	1.7	1.7	0.4	4.7	長石・石英・赤色粒子	ナデ調整 一方向からの穿孔	履土中	PL22

第200B号住居跡(第47図)

位置 調査区中央部のF9g2区、標高26.3mの平坦な台地上に位置している。

確認状況 第200A号住居跡の掘方調査の際に確認した。



第47図 第200B号住居跡実測図

重複関係 第216号住居跡を掘り込み、第200A号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.40m、短軸3.06mの長方形で、主軸方向はN-5°-Eである。壁高は6～8cmで、ほぼ直立している。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。火床部と煙道部のみ確認できた。規模は焚口部から煙道部まで82cmで、燃焼部幅は54cmである。火床部は床面と同じ高さを使用しており、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外に42cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。第1層上面で火床面を確認した。第1～3層は、火床部及び煙道部の構築土である。

竈土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|-------|-----------------------|
| 1 灰褐色 | 焼土ブロック多量、炭化物中量、粘土粒子少量、 | 2 暗褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量 |
| | ローム粒子微量 | 3 灰褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |

ピット P1は深さ22cmで、硬化面の広がりから出入り口施設に伴うピットである可能性が高い。主柱穴は確認できなかったが、第200A号住居跡の主柱穴は、本跡の主柱穴が継続して使用されたものと考えられる。

覆土 3層に分層できる。各層とも締まりが非常に強いことから、第202A号住居へ拡張が行われた際の埋土と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|------|-------------------|
| 1 灰褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片24点(坏4、甕20)、須恵器片1点(甕)が出土しているが、いずれも細片のため図示できない。

所見 第200A号住居跡の壁面が本跡の外側にあることから、第200A号住居跡に拡張される以前の住居跡と考えられる。時期は、出土土器片や重複関係から8世紀初頭と考えられる。

第205号住居跡(第48・49図)

位置 調査区東部のF94区、標高26.2mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第192・212号住居に掘り込まれている。

規模と形状 南北軸3.88m、東西軸3.65mの方形で、主軸方向はN-22°-Wである。壁高は12～26cmで、ほぼ直立している。

床 平坦で、硬化面は確認できなかった。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで90cmで、燃焼部幅は39cmである。袖部は、粘土粒子を含む第8～13層を積み上げて構築されている。火床部は、袖部構築後に、第6・7層を埋土して構築されており、床面と同じ高さで、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外に20cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | | | |
|--------|------------------------------|--------|------------------------------|
| 1 黒褐色 | 焼土粒子少量、ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子微量 | 6 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、炭化物少量、ローム粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量、ロームブロック・粘土粒子微量 | 7 黒褐色 | 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量、粘土粒子微量 | 8 赤褐色 | 焼土ブロック多量、粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 4 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、炭化粒子少量、ロームブロック微量 | 9 褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 5 暗褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 10 黒褐色 | ロームブロック・粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| | | 11 赤褐色 | 焼土ブロック多量、ロームブロック少量、粘土粒子微量 |

12 暗 褐 色 焼土ブロック・粘土粒子中量、ロームブロック少 13 黒 褐 色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土量、炭化粒子微量

ピット 4か所。P1～P4は深さ44～57cmで、配置から主柱穴である。

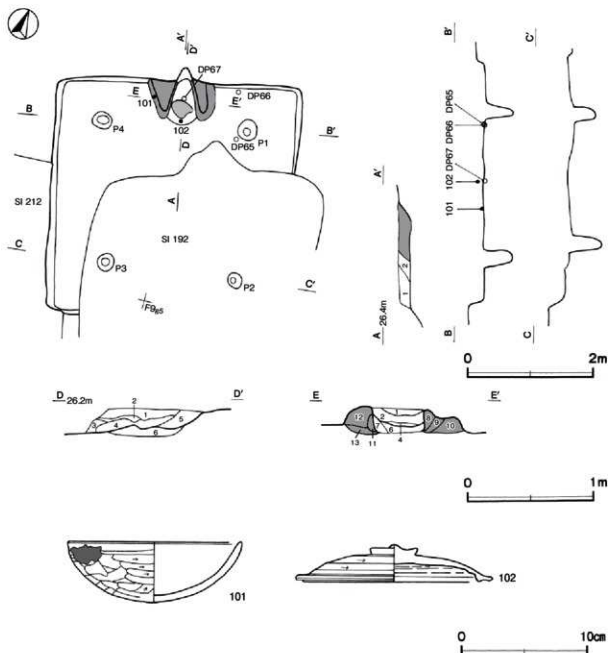
覆土 2層に分層できる。各層にロームブロック・焼土ブロック・炭化物などが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

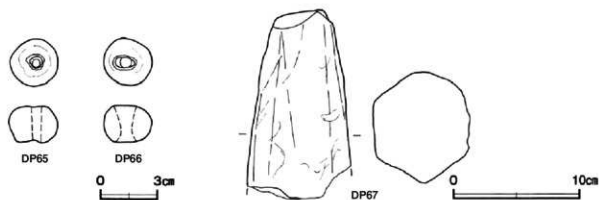
1 黒 褐 色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量 2 暗 褐 色 焼土ブロック・炭化物少量、粘土粒子微量

遺物出土状況 土師器片73点(坏10, 甕63), 須恵器片2点(坏, 蓋), 土製品3点(土玉2, 支脚1)が出土している。DP67は竈火床部から出土しており、遺棄されたものと考えられる。101は竈左袖付近の床面。DP65・DP66は北東部の覆土下層, 102は竈の覆土中層から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀前葉に比定できる。



第48図 第205号住居跡・出土遺物実測図



第49図 第205号住居跡出土遺物実測図

第205号住居跡出土遺物観察表(第48・49図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
101	土脚形	坪	136	47	-	長石・石英・赤色粘土	明赤陶	普通	口縁部外・内面噴ナデ 体部外面ヘラクスリ 体部内面噴ナデ	床面	80% PL15
102	坩堝形	壺	15.3	3.0	-	長石・石英・雲母	灰白	良好	天井部回転ヘラクスリ後, つまみ貼り付け	覆土中層	90% PL16
番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴			出土位置	備考
DP65	土玉	26	20	0.6	12.4	長石・石英	ナデ調整			覆土下層	PL22
DP66	土玉	26	20	1.2	(11.8)	長石・石英	ナデ調整 二方向からの穿孔 一部欠損			覆土下層	PL22
番号	器種	最大径	最大径	高さ	重量	胎土	特徴			出土位置	備考
DP67	支脚	40	(8.2)	(4.0)	(7.49)	長石・石英・雲母・磁礫・赤色粘土	ヘラクスリ後ナデ			竈火床部	PL23

第217号住居跡(第50～52図)

位置 調査区東部のF9区, 標高26.2mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第192号住居跡を掘り込み, 第219号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.20m, 短軸3.14mの隅丸方形で, 主軸方向はN-15°-Wである。壁高は27～36cmで, ほぼ直立している。

床 平坦で, 壁際を除いて踏み固められている。壁下には壁溝が巡っている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで108cmで, 燃烧部幅は51cmである。火床部は, 皿状に掘りくぼめた部分に第16・17層を埋土して構築されている。袖部は, 火床部構築後に第7～15層を積み上げて構築されている。火床部は床面から7cmほどくぼんでおり, 火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外に45cm掘り込まれ, 火床部から外傾して立ち上がっている。

覆土層解説

1 暗褐色	粘土粒子多量, 焼土粒子少量, ローム粒子・炭化粒子微量	10 褐色	粘土粒子多量, 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色	焼土粒子・炭化粒子少量, ローム粒子微量	11 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
3 褐色	焼土粒子・ローム粒子少量, 炭化粒子微量	12 褐色	粘土粒子中量, ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
4 褐色	粘土粒子中量, ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化粒子微量	13 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量, 粘土粒子微量
5 褐色	焼土ブロック多量, 粘土粒子中量, 炭化粒子微量	14 暗赤褐色	焼土ブロック多量, ローム粒子・炭化粒子少量
6 黒褐色	焼土粒子・炭化粒子多量, 粘土粒子少量, ローム粒子微量	15 にい・黄褐色	粘土粒子中量, ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化粒子微量
7 暗赤褐色	焼土ブロック多量, ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	16 暗赤褐色	焼土ブロック多量, 炭化粒子中量, ローム粒子少量, 粘土粒子微量
8 褐色	粘土粒子多量, ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	17 暗赤褐色	焼土ブロック・ローム粒子中量, 炭化物少量
9 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量, 焼土粒子・粘土粒子微量		

ピット P1は深さ40cmで、配置から主柱穴である。

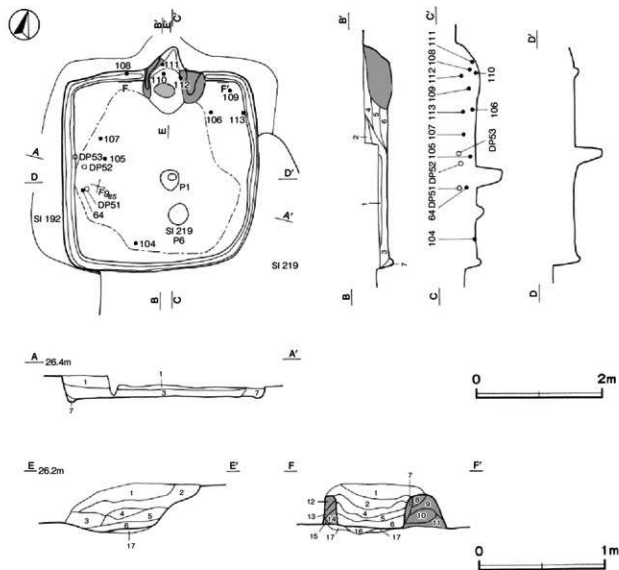
覆土 7層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

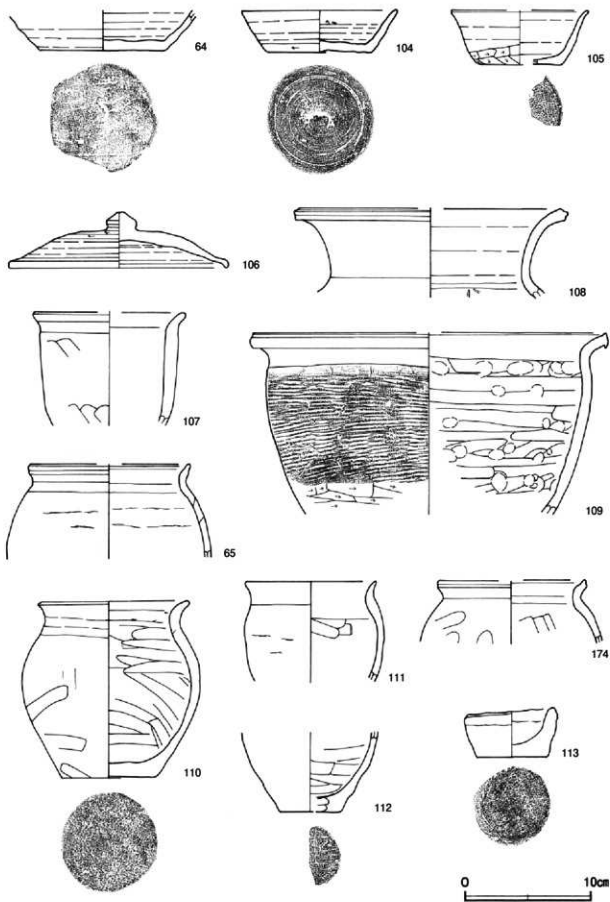
- | | |
|-----------------------------------|-------------------------------------|
| 1 黒 褐色 焼土粒子中量、ロームブロック・炭化物少量 | 5 暗 褐色 粘土粒子中量、ロームブロック・炭化物・焼土粒子少量 |
| 2 暗 褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量 | 6 黒 褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量、粘土粒子微量 |
| 3 黒 褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 | 7 黒 褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 4 黒 褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子・粘土粒子微量 | |

遺物出土状況 土師器片480点(坏41, 鉢1, 甕435, 手捏土器3), 須恵器片53点(坏44, 高台付坏1, 蓋4, 甕2, 瓶2), 土製品2点(支脚), 焼成粘土塊13点が、覆土中層から下層にかけて散在した状態で出土している。また、混入した縄文土器125点(深鉢)も出土している。110・111は竈火床部の北部, 104は南部の床面と覆土上層, 108は北部, 105は西部, 106・109は北東部の覆土下層, 64・107は西部, 113は北東部の覆土中層, 112は竈右袖付近, DP51～DP53は西部の覆土上層, 65, 114・115・116・174・DP50は覆土中から、それぞれ出土している。

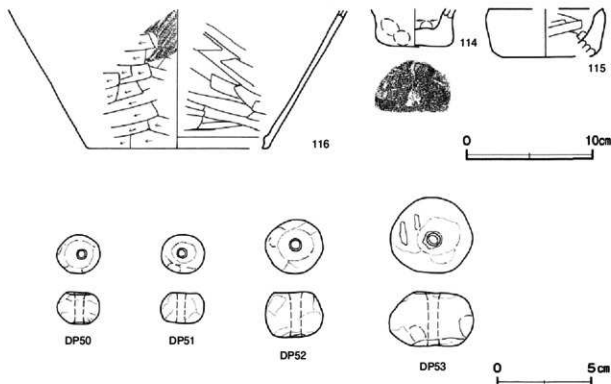
所見 時期は、出土土器から8世紀中葉に比定できる。



第50図 第217号住居跡実測図



第51图 第217号住居跡出土遺物実測図(1)



第52図 第217号住居跡出土遺物実測図(2)

第217号住居跡出土遺物観察表(第51・52図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
64	須恵器	坏	-	[32]	[9.6]	長石・石英・雲母・黒色粒子	灰黄	良好	底部一方向の手持ちヘラケズリ	覆土中層	30%
104	須恵器	坏	12.2	3.4	8.4	長石・石英・針状鉱物	灰	良好	体部下端回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ 朱墨痕	床面・覆土上層	95% PL15
105	須恵器	坏	[10.8]	4.3	[6.7]	長石・石英	灰	良好	体部下端手持ちヘラケズリ 底部一方向の手持ちヘラケズリ	覆土下層	10%
106	須恵器	蓋	17.0	4.4	-	長石・石英・黒色粒子	黄灰	良好	火舟部回転ヘラケズリ後 つまみ貼り付け	覆土下層	90%
107	土師器	鉢	[11.3]	8.9	-	長石・石英	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ナデ	覆土中層	20%
108	須恵器	甕	[24.5]	(7.0)	-	長石・石英・黒色粒子	灰	良好		覆土下層	10% PL17
109	須恵器	甕	[28.0]	(14.3)	-	長石・石英・黒色粒子	灰	良好	口縁部外・内面横ナデ 体部横位の平行叩き 体部内面ヘラケナデ・滑面痕 体部下段ヘラケズリ	覆土下層	10%
65	土師器	小形甕	[11.6]	(5.0)	-	長石・石英・針状鉱物	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ	覆土中	20%
110	土師器	小形甕	11.7	14.0	7.2	長石・石英・細砂	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ヘラケナデ	壺火灰部 北部	95% PL17
111	土師器	小形甕	10.4	(7.9)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ナデ 体部内面ヘラケナデ	壺火灰部	30%
112	土師器	小形甕	-	(6.3)	[5.0]	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	外面ナデ 内面ヘラケナデ	覆土上層	30%
174	土師器	小形甕	[11.6]	(5.0)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部内面ヘラケナデ	覆土中	20%
116	須恵器	甕	-	(10.9)	[14.4]	長石・石英・黒色粒子	灰	良好	斜位の平行叩き後ヘラケズリ 内面ヘラケナデ	覆土中	10%
113	土師器	手捏土器	[6.8]	3.9	5.6	長石・石英・雲母	橙	普通	外・内面ナデ	覆土中層	50% PL16
114	土師器	手捏土器	-	(3.0)	5.8	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	外・内面滑面痕	覆土中	50% PL16
115	土師器	手捏土器	[9.0]	3.8	[7.6]	長石・石英	灰黄褐	普通	外面ナデ 内面ヘラケナデ	覆土中	10%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP50	土玉	2.3	1.7	0.5	8.5	長石・石英	ナデ調整 上・下端部穿孔後ヘラ切り	覆土中	PL23
DP51	土玉	2.3	1.6	0.5	9.1	長石・石英	ナデ調整 上・下端部穿孔後ヘラ切り	覆土上層	PL23
DP52	土玉	3.1	2.4	0.6	21.4	長石・石英	ナデ調整 上・下端部穿孔後ヘラ切り	覆土上層	PL23
DP53	土玉	4.4	2.9	0.7	52.3	長石・石英	ナデ調整 工具痕 上・下端部ヘラ切り後穿孔	覆土上層	PL23

第 221 号住居跡 (第 53 ~ 55 図)

位置 調査区北部の F 9 d 2 区、標高 26.3 m の平坦な台地上に位置している。

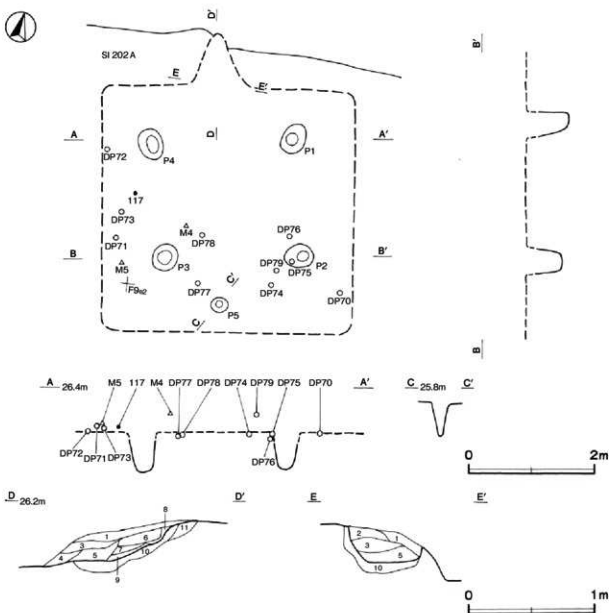
確認状況 第 202A 号住居跡の調査時に、これを掘り込んでみるとみられる竈の一部と柱穴を確認した。第 202A 号住居跡からの出土遺物にも明らかな時期差が認められたため、それらの出土状況を検討した結果から、第 202A 号住居跡よりも新しい時期の住居が存在したものと判断した。

重複関係 第 202A・202B 号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 壁面を掘り込んでしまったため明確な規模は不明であるが、柱穴と竈の位置、遺物の出土状況から、一辺 4 m ほどの方形と推定され、主軸方向は N - 7° - W である。

床 竈の火床面から、標高 25.7 m 付近に床面が存在したものと推定される。硬化面・壁溝は確認できなかった。

竈 北壁中央部に付設されていたと推定される。火床部は床面と推定される高さから 8 cm ほど高まっており、



第 53 図 第 221 号住居跡実測図

煙道部は壁外に80cmほど掘り込まれ、火床部から緩やかに傾斜して立ち上がっている。第10・11層は、火床部及び煙道部の構築土である。

覆土層解説

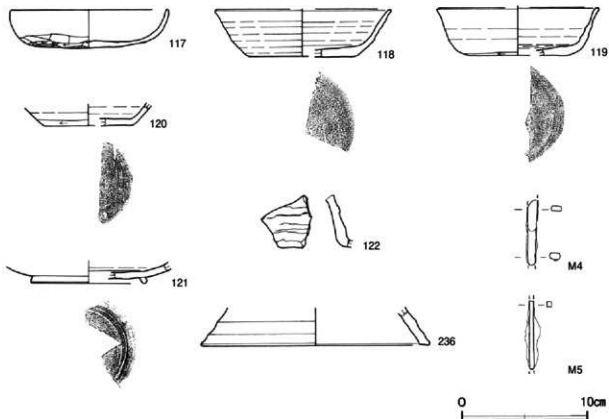
- | | |
|--|--------------------------------------|
| 1 暗 褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・粘土粒子微量 | 7 にぶい暗褐色 焼土粒子・粘土粒子多量、炭化粒子中量、ローム粒子微量 |
| 2 にぶい黄褐色 砂質粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 8 灰 褐色 炭化材・焼土粒子・粘土粒子中量、ローム粒子微量 |
| 3 にぶい褐色 砂質粘土ブロック多量、焼土ブロック中量、炭化粒子少量、ロームブロック微量 | 9 灰 褐色 粘土粒子多量、焼土ブロック・炭化物中量、ローム粒子微量 |
| 4 黒 褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・砂質粘土ブロック・炭化粒子少量 | 10 黒 褐色 ロームブロック・炭化物・焼土粒子少量 |
| 5 暗 褐色 焼土ブロック多量、ロームブロック・炭化粒子少量、粘土粒子微量 | 11 暗 褐色 粘土粒子中量、ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 6 黒 褐色 粘土粒子多量、炭化材・焼土粒子少量、ロームブロック微量 | |

ピット 5か所。P1～P4は深さ60～70cmほどと推定され、配置から主柱穴である。P5は深さ50cmほどと推定され、主柱穴との位置関係から出入口施設に伴うピットと考えられる。

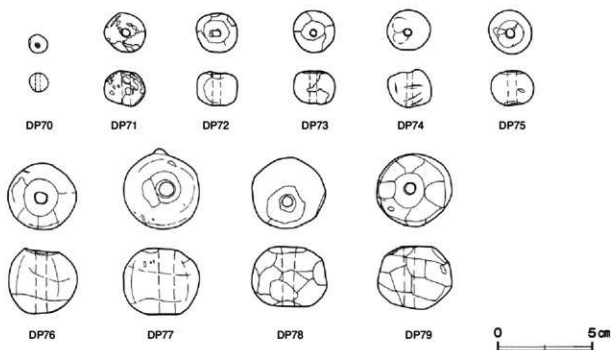
覆土 上層は均質な暗褐色土が堆積していたことから自然堆積、中層以下はロームブロックを含んでいたことから埋め戻されたと考えられる。

遺物出土状況 土師器片4点(坏1、甕3)、須恵器片6点(坏3、高台付坏1、円面硯1、不明1)、土製品10点(土玉)、鉄製品2点(鎌、不明)が出土している。DP75はP2の覆土上層、DP78は中央部、DP76は東部、DP70は南東部、DP74・DP77は南部、DP71は西部の床面から、それぞれ出土している。M5は南西部、DP73・117は西部、DP72は北西部の覆土下層、M4は中央部、DP79は南東部の覆土上層、118・119・120・121・122・236は覆土中から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀前葉に比定できる。



第54図 第221号住居跡出土遺物実測図(1)



第55図 第221号住居跡出土遺物実測図(2)

第221号住居跡出土遺物観察表(第54・55図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
117	土師器	坏	123	3.0	-	長石・石英・赤色砂子	明赤褐色	普通	体部下端から底部手持ちヘラケズリ	覆土下層	70% PL15
118	須恵器	坏	[140]	3.8	[8.0]	長石・石英・雲母・黒色砂子	黄灰	良好	底部手持ちヘラケズリ	覆土中	30%
119	須恵器	坏	[128]	3.8	[7.6]	長石・石英・黒色砂子	黄灰	良好	体部下端回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ	覆土中	10%
120	須恵器	坏	-	(1.9)	[7.0]	長石・石英	灰	良好	体部下端回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ後ナデ	覆土中	10%
121	須恵器	盤*	-	(1.7)	[8.9]	長石・石英・黒色砂子	灰	良好	底部回転ヘラケズリ	覆土中	20%
122	須恵器	門面鏡	-	(4.2)	-	長石・石英	褐灰	良好	脚部 透し孔一部残存	覆土中	5% PL16
236	須恵器	不明	-	(3.0)	[18.0]	長石・石英・黒色砂子	灰	良好		覆土中	5% PL16

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP70	土玉	1.1	1.0	0.3	1.0	長石・石英・赤色砂子	ナデ調整 一方からの穿孔	床面	PL23
DP71	土玉	2.2	1.9	0.5	7.8	長石・石英	ナデ調整 一方からの穿孔	床面	PL23
DP72	土玉	2.1	1.8	0.4	8.9	長石・石英	ナデ調整 上・下端部ヘラ切り後穿孔	覆土下層	PL23
DP73	土玉	2.1	1.8	0.4	9.0	長石・石英・赤色砂子	ナデ調整 一方からの穿孔	覆土下層	PL23
DP74	土玉	2.3	2.0	0.3	10.4	長石・石英	ナデ調整 上・下端部ヘラ切り後穿孔 擦痕	床面	PL23
DP75	土玉	2.3	1.9	0.5	9.9	長石・石英	ナデ調整 上・下端部穿孔後ヘラ切り	P2覆土上層	PL23
DP76	土玉	3.6	3.5	0.6	41.6	長石・石英・赤色砂子	ケズリ後ナデ調整 上部穿孔後ヘラ切り 一方からの穿孔	床面	PL23
DP77	土玉	4.0	3.5	0.8	(56.6)	長石・石英・赤色砂子	ケズリ後ナデ調整 上・下端部穿孔後ヘラ切り 一方からの穿孔 一部欠損	床面	PL23
DP78	土玉	3.9	3.2	0.8	49.6	長石・石英・赤色砂子	ケズリ後ナデ調整 上・下端部穿孔後ヘラ切り 一方からの穿孔	床面	PL23
DP79	土玉	4.0	3.4	0.7	51.3	長石・石英・赤色砂子	ケズリ後ナデ調整 指頭痕 上・下端部穿孔後ヘラ切り 一方からの穿孔	覆土上層	PL23

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M4	不明鉄製品	(52)	1.1	0.4~0.7	(9.0)	鉄	断面楕円形	覆土上層	PL24
M5	鎌*	(55)	0.4	0.4	(7.0)	鉄	断面方形	覆土下層	PL24

表4 奈良時代堅穴住居跡一覽表

番号	位置	平面形	主軸方向	規模 長軸×短軸(m)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設				覆土	主な出土遺物	時期	備考 重複関係(内→新)	
								注煙穴	出入口	ゴト	伊・重 新設穴					
14	F 8 18	長方形	N-12°-W	7.12 × 6.40	14	平坦	一部	3	-	3	覆1	-	入為	土師器片、須恵器片、 刀子	8世紀前半	SI22 → 本跡 → SI5、SI24、 SK945・865、 866・872・873、 877・881・905
192	F 9 05	隅丸方形	N-11°-W	3.59 × 3.54	29	平坦	-	-	-	覆1	-	入為	須恵器片	8世紀中葉	SI205 → 本跡 → SI217・219	
194	F 9 03	方形	N-10°-W	3.64 × 3.60	6-18	平坦	-	3	1	覆1	-	入為	土師器片、須恵器片、 土師 粘土、高野	8世紀中葉	SI200A・216 → 本跡 → SI212・ 213・214	
195	F 8 10	方形	N-6°-E	4.62 × 4.34	7-19	平坦	一部	4	1	覆1	-	入為	土師器片、須恵器片、 土師 粘土	8世紀前半	SI201 → 本跡 → SK765	
196	F 9 01	長方形	N-15°-W	3.77 × 3.33	28	平坦	全周	-	1	覆1	-	入為	土師器片、須恵器片、 土師 粘土	8世紀後半	SI208A → 本跡 → SI222・25	
198	F 9 11	隅丸方形	N-11°-W	4.00 × 3.75	15	平坦	-	4	1	2	覆1	-	入為	土師器片、須恵器片、 土師 粘土、土師	8世紀後半	SI170、SK904 → 本跡
200A	F 9 02	長方形	N-3°-W	4.36 × 3.90	10	平坦	ほぼ 全周	4	-	覆1	-	不明	土師器片、須恵器片、 土師 粘土	8世紀前半	SI216 → 本跡 → SI194・213、 SI285	
200B	F 9 02	長方形	N-5°-E	3.40 × 3.06	6-8	平坦	-	-	1	覆1	-	入為	土師器片、須恵器片、 土師 粘土	8世紀前半	SI216 → 本跡	
205	F 9 04	方形	N-22°-W	3.88 × 3.65	12-26	平坦	-	4	-	覆1	-	入為	土師器片、須恵器片、 土師 粘土	8世紀前半	本跡 → SI192、 212・217	
217	F 9 05	隅丸方形	N-15°-W	3.20 × 3.14	27-36	平坦	全周	1	-	覆1	-	入為	土師器片、須恵器片、 土師 粘土	8世紀中葉	SI192・205 → 本跡 → SI219	
221	F 9 02	[方形]	N-7°-W	[4.00] × [4.00]	-	-	-	4	1	覆1	-	不明	土師器片、須恵器片、 土師 粘土、土師、 入為	8世紀前半	SI200A → 本跡	

(2) 土坑

第 843 号土坑 (第 56 図)

位置 調査区西部の F 8e9 区、標高 26.3 m の平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長径 0.83 m、短径 0.72 m の楕円形で、長径方向は N-37°-W である。深さ 28 cm で、底面は平坦であり、壁は外傾して立ち上がっている。

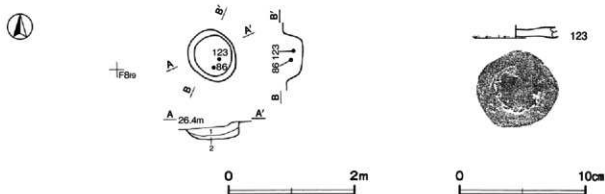
覆土 2層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 2 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量

遺物出土状況 須恵器片 2 点 (坏、長頸瓶)、焼成粘土塊 7 点が出土している。また、混入した縄文土器片 2 点 (深鉢) も出土している。123 は中央部、86 は南部の覆土中層、焼成粘土塊は覆土上層から中層にかけて、それぞれ出土している。86 は、第 196 号住居跡から出土した遺物との接合関係を確認できた。

所見 時期は、出土土器から 8 世紀後半に比定できる。



第 56 図 第 843 号土坑・出土遺物実測図

第843号土坑出土遺物観察表 (第56図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
123	須恵器	坏	-	(0)8	6.4	灰石・石灰・赤色粘土・黒色粘土	灰褐色	良好	体部下端手持ちへラケズリ 底部多方向の手持ちへラケズリ残ナデ	覆土中層	10%

第877号土坑 (第57図)

位置 調査区西部のF8B区、標高26.0mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第14号住居跡を掘り込み、第24号据立柱建物跡に掘り込まれている。

規模と形状 長径0.98m、短径0.72mの楕円形で、長径方向はN-15°-Wである。深さ18cmで、底面は凹凸があり、壁は外傾して立ち上がっている。

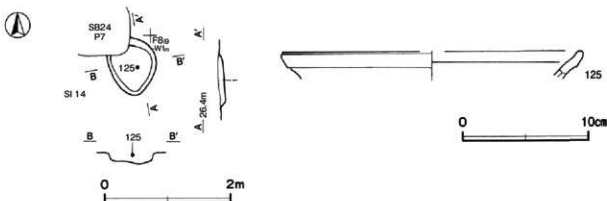
覆土 単一層である。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片9点(甕)、須恵器片3点(坏2、甕1)、焼成粘土塊1点が出土している。また、混入した古墳時代の土師器片1点(坏)も出土している。125は中央部の覆土上層から出土している。

所見 時期は、出土土器や重複関係から、8世紀後半と考えられる。



第57図 第877号土坑・出土遺物実測図

第877号土坑出土遺物観察表 (第57図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
125	須恵器	甕	(2)40	(2)3	-	灰石・石灰	灰白	良好		覆土上層	5%

表5 奈良時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
843	F8e9	N-37°-W	楕円形	0.83×0.72	28	平坦	外傾	人為	須恵器片	-
877	F8B	N-15°-W	楕円形	0.98×0.72	18	凹凸	外傾	人為	土師器片、須恵器片	SI14 → 本跡 → SB24

3 平安時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴住居跡7軒、掘立柱建物跡5棟、土坑3基を確認した。継続調査の遺構に関しては、本報告に伴い、年代の再考や、一部の遺構番号の付け替えを行った。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第4号住居跡(第58図)

位置 調査区西部のF8c8区、標高26.2mの平坦な台地上に位置している。

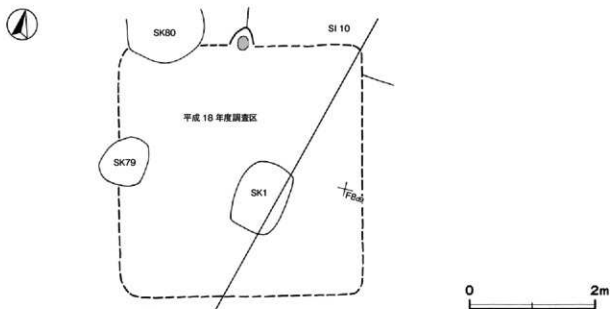
確認状況 西部については平成18年度に調査し、『第308集』において報告している。東部については平成21年度に調査したが、削平を受けていたため掘り込みや床面は確認できず、遺物も出土していない。

重複関係 第10号住居跡を掘り込み、第1・79・80号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 前回の報告結果から、一辺が4mの方形で、主軸方向はN-14°-Wと推定できる。

遺物出土状況 遺物は出土していない。

所見 時期は、『第308集』において10世紀中葉に比定されている。



第58図 第4号住居跡実測図

第5号住居跡(第59図)

位置 調査区西部のF8f7区、標高26.4mの平坦な台地上に位置している。

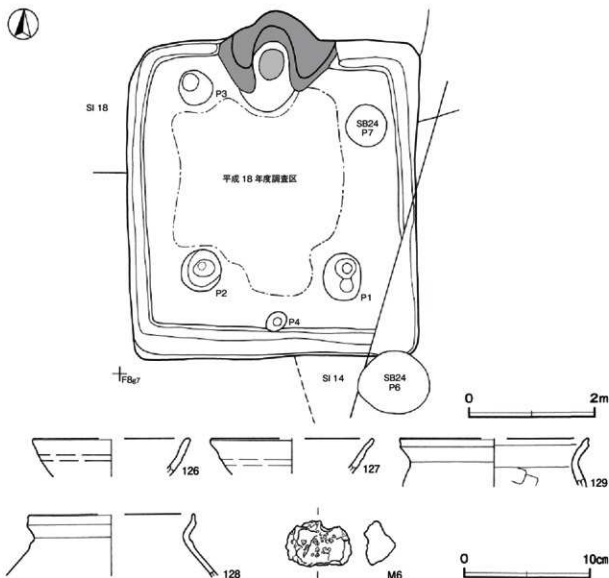
確認状況 大部分は平成18年度に調査し、『第308集』において報告されている。南東コーナー部の調査を平成21年度に実施した。

重複関係 第14・18号住居跡を掘り込み、第24号掘立柱建物跡に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.04m、短軸4.54mの長方形で、主軸方向はN-1°-Wで、壁高は22~32cmである。

遺物出土状況 土師器片37点(坏11, 皿1, 甕24, 不明1), 須恵器片2点(坏, 甕), 土製品1点(土玉), 椀状滓1点が出土している。また、混入した縄文土器片2点(深鉢)も出土している。遺物は、すべて覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀中葉に比定できる。



第59図 第5号住居跡・出土遺物実測図

第5号住居跡出土遺物観察表 (第59図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
126	須恵器	坏	[122]	(3.0)	-	長石・石英・赤色粒子	浅黄橙	良好	内面摩耗	覆土中	5%
127	須恵器	坏	[128]	(2.8)	-	長石・石英・雲母	灰白	良好		覆土中	5%
128	土師器	小形壺	[130]	(5.9)	-	長石・石英・雲母	にぶい	間	普通 口縁部外・内面機ナデ	覆土中	5%
129	土師器	小形壺	[148]	(3.9)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい	普通	普通 口縁部外・内面機ナデ 内面ヘウナデ	覆土中	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M6	輪状片	3.6	5.3	2.5	75.7	鉄		覆土中	PL24

第10号住居跡 (第60図)

位置 調査区西部の F8c8 区、標高 26.1 m の平坦な台地上に位置している。

確認状況 西部は平成 18 年度に調査し、『第 308 集』において報告されている。東部については平成 21 年度

に調査を実施したが、削平を受けていたため、一部の掘り込みや床面が確認できなかった。

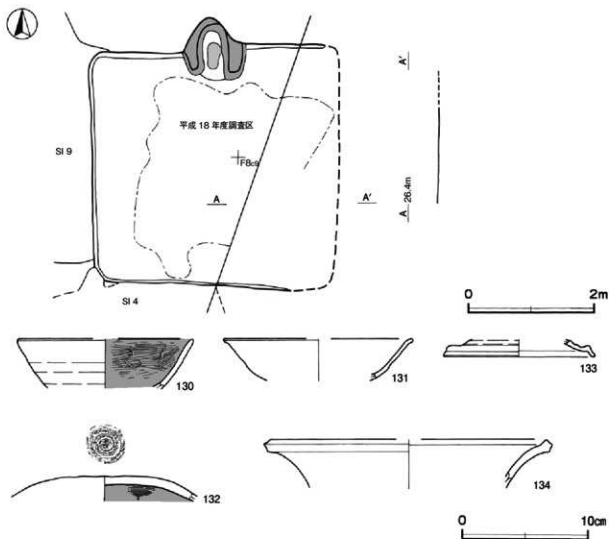
重複関係 第9号住居跡を掘り込み、第4号住居に掘り込まれている。

規模と形状 踏み固められた床面の広がりから一辺4mほどの方形と推定される。主軸方向はN-2'-Wで、壁高は1cmである。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。

遺物出土状況 土師器片41点（坏17、甕24）、須恵器片11点（蓋1、甕10）、灰釉陶器片2点（碗、長頸瓶）が出土している。また、混入した縄文土器片2点（深鉢）も出土している。遺物はすべて覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀後葉に比定できる。



第60図 第10号住居跡・出土遺物実測図

第10号住居跡出土遺物観察表（第60図）

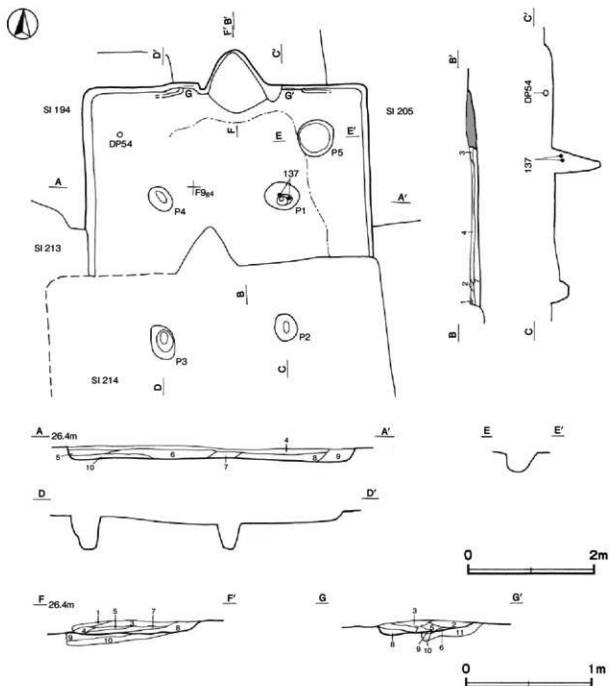
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
130	土師器	坏	[138]	(39)	-	長石・石英・斜状 炭物・赤色粒子	橙	普通	内面ヘラミガキ	覆土中	5%
131	土師器	碗*	[148]	(33)	-	長石・石英・斜状 炭物・赤色粒子	橙	普通	外・内面摩耗	覆土中	5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
132	土師器	壺	-	(20)	-	長石・石英・貝殻 灰質・赤色粒子	橙	普通	内面ヘラミガキ つまみ部剥落	覆土中	10%
133	須恵器	高盤*	-	(14)	[120]	長石・石英	灰	良好		覆土中	5%
134	須恵器	壺	[220]	(38)	-	長石・石英・雲母	黄灰	良好		覆土中	5%

第 212 号住居跡 (第 61・62 図)

位置 調査区中央部の F 9 4 区、標高 26.2 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 194・205 号住居跡を掘り込み、第 213・214 号住居に掘り込まれている。



第 61 図 第 212 号住居跡実測図

規模と形状 南部を第214号住居に掘り込まれているため、東西軸は4.56mで、南北軸は4.36mしか確認できなかった。主軸方向はN-6°-Eである。壁高は20cmで、ほぼ直立している。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。竈両脇の壁下で壁溝を確認した。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで100cmで、燃焼部幅は80cmである。袖部は破壊されており、遺存していなかった。火床部は床面と同じ高さを使用している。煙道部は壁外に50cm掘り込まれ、火床部から緩やかに外傾して立ち上がっている。第9～11層は、火床部の構築土である。

覆土層解説

1 灰褐色 粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子少量	7 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
2 灰褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子少量	8 黒褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量
3 灰褐色 粘土粒子中量、焼土ブロック少量	9 暗褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量
4 灰褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量	10 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
5 暗褐色 ローム粒子少量	11 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
6 暗褐色 ローム粒子少量・焼土粒子微量	

ピット 5か所。P1～P4は深さ28～80cmで、配置から支柱穴である。P5は深さ26cmで、性格不明である。

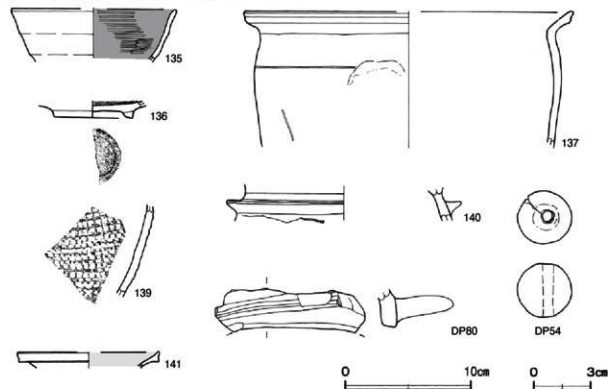
覆土 10層に分層できる。ブロック状の堆積状況を示していることから、埋め戻されている。

土層解説

1 黒褐色 焼土粒子中量、ロームブロック少量	6 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
2 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量	7 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
3 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	8 暗褐色 ロームブロック中量
4 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量	9 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量
5 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量	10 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片343点（坏163、高台付坏7、高台付皿13、甕160）、須恵器片68点（坏18、蓋3、甕46、円面硯1）、灰釉陶器片1点（長頸瓶）、土製品3点（置き竈2、土玉1）が、覆土下層を中心に散在した状態で出土している。また、混入した縄文土器片9点（深鉢）、土師器片29点（坏）も出土している。137はP1の覆土上層、DP54は北西部の覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土遺物から9世紀後半に比定できる。



第62図 第212号住居跡出土遺物実測図

第212号住居跡出土遺物観察表 (第62図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
135	土師器	坏	[13.0]	(42)	-	長石・石英・珪灰 微塵・赤色粒子	橙	普通	内面ヘラミガキ	覆土中	5%
136	土師器	高台付皿	-	(14)	(62)	長石・石英・赤 色粒子	にぶい橙	普通	底部内面一方向のヘラミガキ 底部ヘラタズリ 後、高台船り付け	覆土中	10%
137	土師器	甕	[25.8]	(107)	-	長石・石英・珪母・ 珪塵・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 肩部外面に沈澱 網罟 痕あり(把手カ)	P1 覆土上層	20%
139	須恵器	甕	-	(72)	-	長石・石英・赤 色粒子	にぶい橙	良好	格子叩き 内面ナデ	覆土中	5%
140	須恵器	円面碗	-	(27)	-	長石・石英・赤 色粒子	にぶい橙	良好	透し孔1か所	覆土中	5% PL19
141	灰陶陶器	長頸瓶	[11.2]	(13)	-	長石・石英	黒・暗黒 赤・黒	良好	内面輪軸	覆土中	5% K90号 蓋式器 PL25

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP54	土玉	29	29	06	206	長石・石英	ナデ調整 工具痕 上・下縁部穿孔後ヘラ切り	覆土下層	PL22

番号	器種	径	高さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP80	置き籠	(119)	(30)	(185.6)	長石・石英・赤 色粒子	ナデ調整	覆土下層	PL23

第213号住居跡(第63-64図)

位置 調査区中央部のF9g3区、標高26.2mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第194・200A・209・212号住居跡、第900・909号土坑を掘り込み、第214号住居に掘り込まれている。

規模と形状 東部を第214号住居に掘り込まれているため、南北軸は4.40mで、東西軸は3.98mしか確認できなかった。平面形は長方形と推定でき、南北軸方向はN-0°である。壁高は8cmで、ほぼ直立している。

床 平坦で、北半部が踏み固められているが、北部については床面を掘り込んでしまったため詳細は不明であるが、壁下には壁溝が巡っている。

竈 北壁中央部で、火床部のみ確認した。火床部は床面から4cmほどくぼんでおり、火床面は赤変硬化している。

ピット 7か所。P1~P3は深さ33~54cmで、配置から主柱穴である。P4・P5は深さ8cm・32cmで、南壁寄りの中央部周辺に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6・P7は深さ42cm・35cmで、性格不明である。

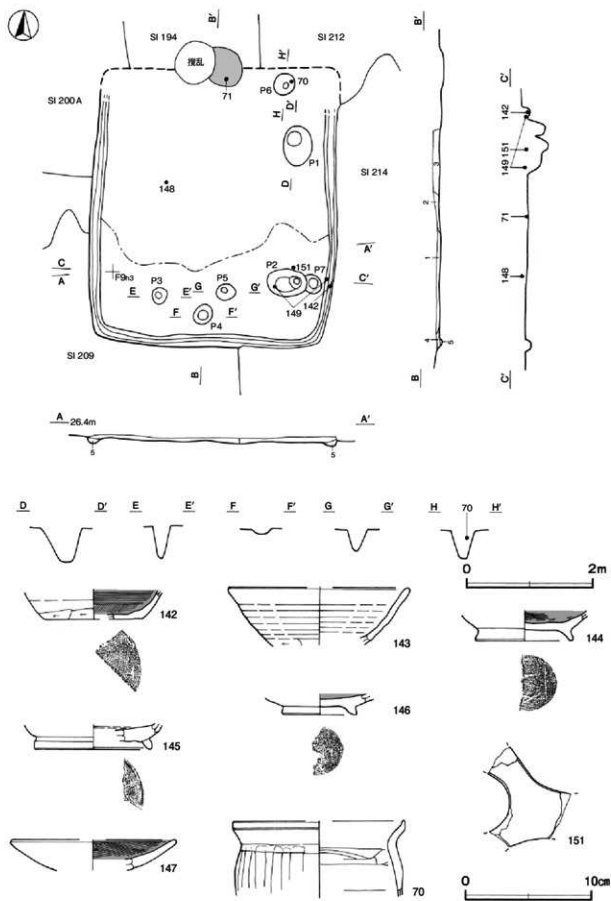
覆土 5層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

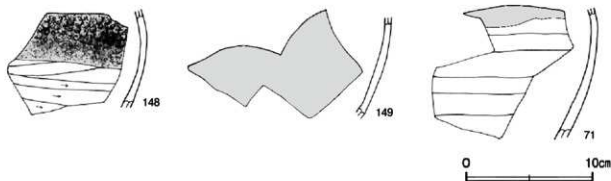
1 灰 褐色	色	ロームブロック・炭化粒子微量	4 褐 色	ロームブロック微量
2 灰 褐色	色	ローム粒子・炭化粒子少量	5 暗 褐色	ロームブロック少量
3 灰 褐色	色	ロームブロック・焼土粒子少量		

遺物出土状況 土師器片430点(坏153, 高台付坏9, 高台付皿13, 甕252, 瓶3), 須恵器片62点(坏20, 高台付坏2, 蓋1, 長頸瓶1, 甕36, 瓶1, 器種不明1), 灰陶陶器片6点(長頸瓶), 焼成粘土塊7点が、覆土下層から床面を中心に散在した状態で出土している。また、混入した縄文土器片22点(深鉢)も出土している。71は竈の火床面, 70はP6の覆土中層, 151はP2付近, 142は南東部の壁溝内, 149は南東部, 148は西部の覆土下層, 143~147は覆土下層から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀後葉に比定できる。



第63图 第213号住居跡・出土遺物実測図



第64図 第213号住居跡出土遺物実測図

第213号住居跡出土遺物観察表(第63・64図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
142	土師器	坏	-	(2.3)	[7.8]	長石・石英・針状炭素	にぶい橙	普通	体部下端を持ちヘラケズリ 底部回転糸切り後、ナデ 内面ヘラミガキ	壁溝内	10%
143	須恵器	坏	[12.6]	(5.0)	-	長石・石英・針状炭素	灰黄	良好	体部下端を持ちヘラケズリ	覆土下層	5%
144	土師器	高台付甕	-	(2.3)	[7.4]	長石・石英・黒色砂粒	にぶい橙	普通	内面ヘラミガキ 底部を持ちヘラケズリ後高台貼り付け	覆土下層	10%
145	須恵器	高台付甕	-	(2.2)	[9.0]	長石・石英・黒色砂粒	灰	良好	高台貼り付け	覆土下層	5%
146	土師器	高台付甕	-	(1.6)	[5.8]	長石・石英・針状炭素	にぶい橙	普通	内面ヘラミガキ 高台貼り付け	覆土下層	10%
147	土師器	甕	[12.7]	(2.4)	-	長石・石英・針状炭素・赤色砂粒	にぶい橙	普通	内面ヘラミガキ	覆土下層	20%
148	灰釉陶器	瓶	-	(7.7)	-	長石・石英・黒色砂粒	黒灰ナール 黒土少量	良好	外面回転ヘラケズリ後、捺輪	覆土下層	10% PL26
149	灰釉陶器	瓶	-	(8.0)	-	長石・石英・黒色砂粒	黒灰ナール 黒土少量	良好	外面回転ヘラケズリ後、捺輪	覆土下層	10% PL26
151	須恵器	瓶	-	-	-	長石・石英・黒色砂粒	灰	良好	五孔式	床面	5%
71	灰釉陶器	長頸瓶	-	(10.3)	-	長石・石英・黒色砂粒	黒ナール 黒土少量	良好	外面回転ヘラケズリ後、捺輪	竈火床面	10% PL26
70	土師器	小形甕	[13.6]	(6.1)	-	長石・石英	橙	普通	口縁部外・内面ナデ 体部下端を持ちヘラケズリ後、ナデ 体部内面ヘラナデ	P5 覆土中層	10% PL19

第214号住居跡(第65～68図)

位置 調査区中央部のF9g4区、標高263mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第193・204・209・212・213号住居跡、第898・899・900・901・902・909号土坑を掘り込み、第892号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸6.34m、短軸5.46mの長方形で、主軸方向はN-5°-Wである。壁高は6～8cmで、ほぼ直立している。

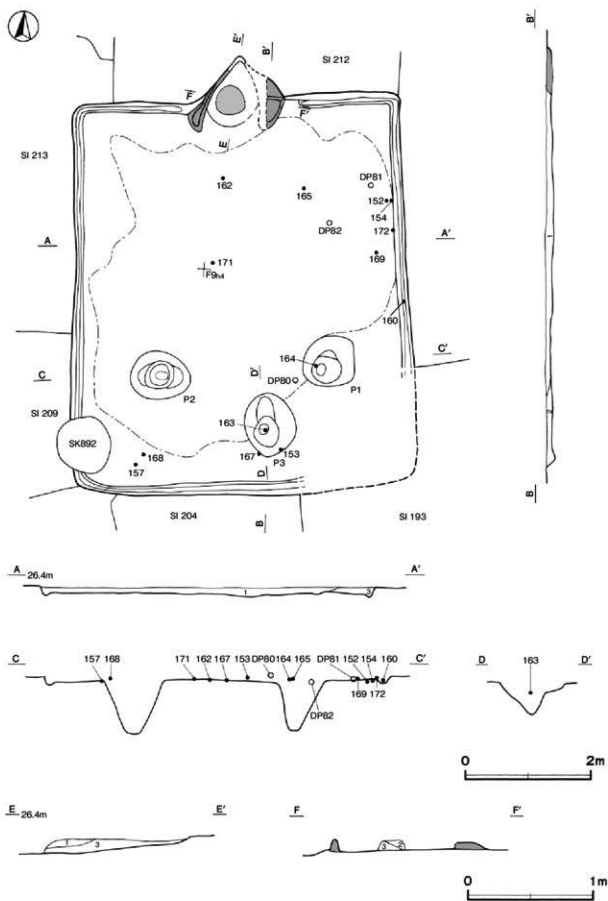
床 平坦で、中央部が踏み固められている。南東部については、床面を掘り込んでしまったため不明であるが、壁下には壁溝が巡っている。

竈 北壁中央部に付設されている。右袖部は一部を残し掘り込んでしまったため、規模は焚口部から煙道部までが100cmで、燃焼部幅は60cmしか確認できなかった。袖部は、白色砂粒を含む暗褐色土を積み上げて構築されている。火床部は床面と同じ高さを使用しており、火床面は亦変硬化している。煙道部は壁外に36cm掘り込まれ、火床部から緩やかに傾斜して立ち上がっている。

甕土層解説

- 1 黒 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・白色砂粒 3 黒 褐色 焼土ブロック・ローム粒子・白色砂粒少量、炭化粒子微量
- 2 暗 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・白色砂粒微量

ピット 3か所。P1・P2は深さ85cm・90cmで、配置から主柱穴である。P3は深さ52cmで、主柱穴



第 65 图 第 214 号住居跡実測図

との位置関係から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

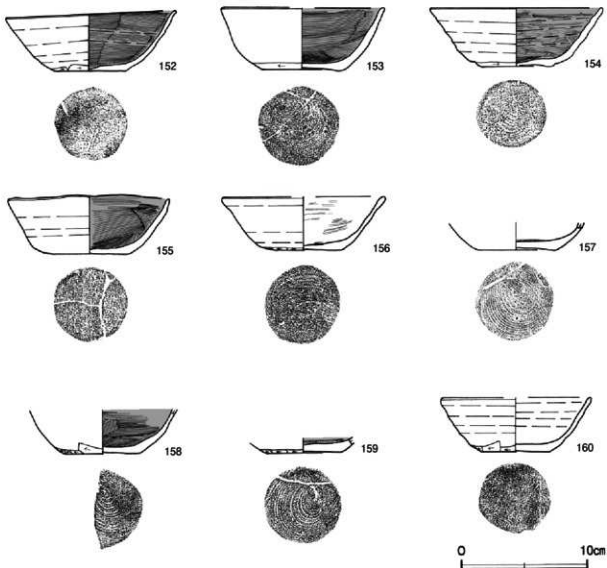
覆土 3層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

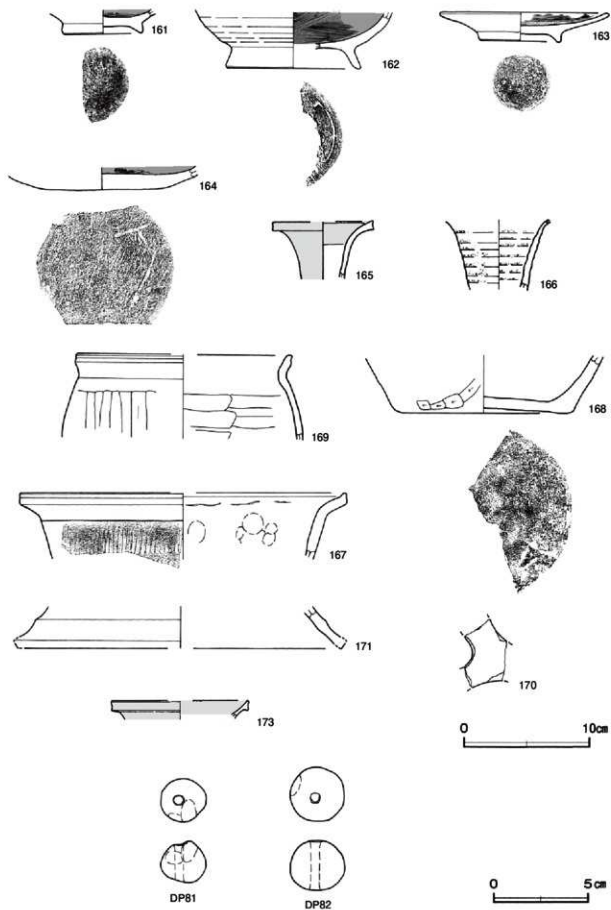
- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 3 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
 2 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片 964点（坏581、高台付椀10、盤1、甕348、器種不明1）、須恵器片 158点（坏33、蓋1、長頸瓶4、甕116、甌3、硯1）、灰釉陶器片8点（長頸瓶）、土製品3点（土玉）、焼成粘土塊11点。覆土下層から床面を中心に散在した状態で出土している。また、混入した縄文土器片32点（深鉢）、古墳時代の土師器片22点（坏19、高坏1、鉢1、甕1）も出土している。164はP1、163はP3の覆土上層、160は東部の壁溝内から出土している。171は中央部、162は北部、152・154・165・DP81は北東部、169・DP82は東部、167は南部、157は南西部の床面から出土している。172は東部、153は南部、168は南西部の覆土下層から出土している。155・156・158・159・161・166・170・173は覆土中から、それぞれ出土している。

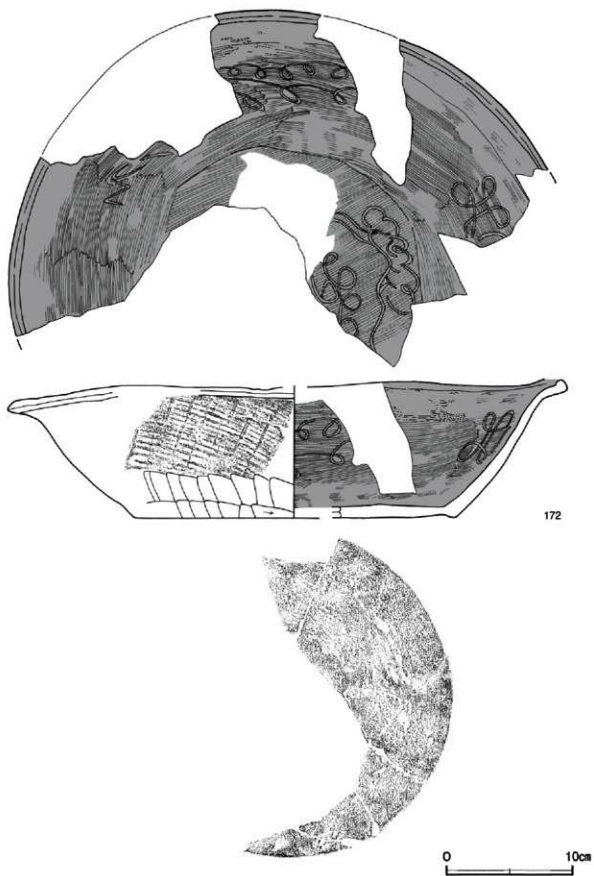
所見 時期は、出土土器から9世紀後葉に比定できる。



第66図 第214号住居跡出土遺物実測図（1）



第 67 图 第 214 号住居跡出土遺物実測図 (2)



172

第68图 第214号住居跡出土物実測図(3)

第214号住居跡出土遺物観察表(第66～68図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
152	土師器	坏	135	48	5.8	長石・石美・雲母・赤色粒子	橙	普通	内面ヘラミガキ 体部下端手持ヘラケズリ 底面多方向の手持ヘラケズリ	床面	100% PL18
153	土師器	坏	[126]	50	6.4	長石・石美・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	内面ヘラミガキ 体部下端回転ヘラケズリ 底部回転糸切り後 周縁部手持ヘラケズリ	覆土下層	80% PL18
154	土師器	坏	136	48	5.4	長石・石美・雲母・赤色粒子	橙	普通	内面ヘラミガキ 体部下端回転ヘラケズリ 底部回転糸切り後 一方方向の手持ヘラケズリ	床面	70% PL18
155	土師器	坏	126	47	6.0	長石・石美・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	内面ヘラミガキ 体部下端回転ヘラケズリ 底部一方方向の手持ヘラケズリ	覆土中	60% PL18
156	土師器	坏	[126]	43	6.4	長石・石美・雲母・赤色粒子	橙	普通	内面ヘラミガキ 体部下端手持ヘラケズリ 底部回転糸切り後 多方向の手持ヘラケズリ	覆土中	45%
157	土師器	坏	-	(22)	6.4	長石・石美・赤色粒子	橙	普通	内面ヘラミガキ 底部回転糸切り	床面	30%
158	土師器	坏	-	(35)	6.0	長石・石美・雲母・赤色粒子・黒色粒子	橙	普通	内面ヘラミガキ 体部下端手持ヘラケズリ 底部回転糸切り後 多方向の手持ヘラケズリ	覆土中	25%
159	土師器	坏	-	(12)	6.0	長石・石美・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	内面ヘラミガキ 体部下端手持ヘラケズリ 底部回転糸切り後 周縁部手持ヘラケズリ	覆土中	20%
160	須恵器	坏	[118]	43	5.6	長石・石美・赤色粒子	にぶい黄橙	良好	体部下端手持ヘラケズリ 底部多方向の手持ヘラケズリ	埋溝内	35%
161	土師器	高台付皿	-	(18)	6.2	長石・石美・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	内面ヘラミガキ 底部回転糸切り後 高台貼り付け	覆土中	10%
162	土師器	高台付皿	-	(46)	[106]	長石・石美・赤色粒子	橙	普通	内面ヘラミガキ 底部回転ヘラケズリ後 高台貼り付け	床面	20% PL18
163	土師器	高台付皿	130	24	6.4	長石・石美・赤色粒子	赤橙	普通	内面ヘラミガキ 底部回転ヘラケズリ後 高台貼り付け	P3 覆土上層	85% PL18
164	土師器	無台盤	-	(18)	100	長石・石美・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	内面ヘラミガキ 底部多方向のヘラケズリ	P1 覆土上層	10%
165	灰釉陶器	長煎瓶	[79]	(45)	-	長石・石美	黄灰	良好	肩ナリ・内面施釉	5% K90号 表層 PL25	
166	須恵器	長煎瓶	-	(56)	-	長石・石美・黒色粒子	黄灰	良好	肩部 外・内面降灰による自然熱	覆土中	5%
167	須恵器	壺	[258]	(53)	-	長石・石美	黄灰	良好	縦位の平行明き 内面施釉痕	床面	5% PL19
168	須恵器	壺	-	(46)	130	長石・石美	黄灰	良好	体部外面下位ヘラケズリ 内面ナデ	覆土下層	10%
169	土師器	小形甕	[170]	(67)	170	長石・石美・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面微ナデ 体部外面縦位のヘラケズリ 内面ヘラナデ	床面	10%
170	須恵器	瓶	-	-	-	長石・石美・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	良好	五孔式	覆土中	5%
171	須恵器	円面碗	-	[33]	[254]	長石・石美	黄灰	良好		床面	5% PL19
172	土師器	鉢	[434]	109	[265]	長石・石美・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	外面長方形の格子明き 内面ヘラミガキ後 硝文	覆土下層	45% PL19
173	灰釉陶器	長煎瓶	[108]	(15)	-	長石	黄灰	良好	肩ナリ・内面施釉	覆土中	5% PL25

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP81	土玉	24	22	0.5	9.9	長石・石美・赤色粒子	ナデ調整 微細孔 一方からの穿孔	床面	PL22
DP82	土玉	29	24	0.5	19.9	長石・石美・赤色粒子	ナデ調整 一方からの穿孔	床面	PL22

第219号住居跡(第69～72図)

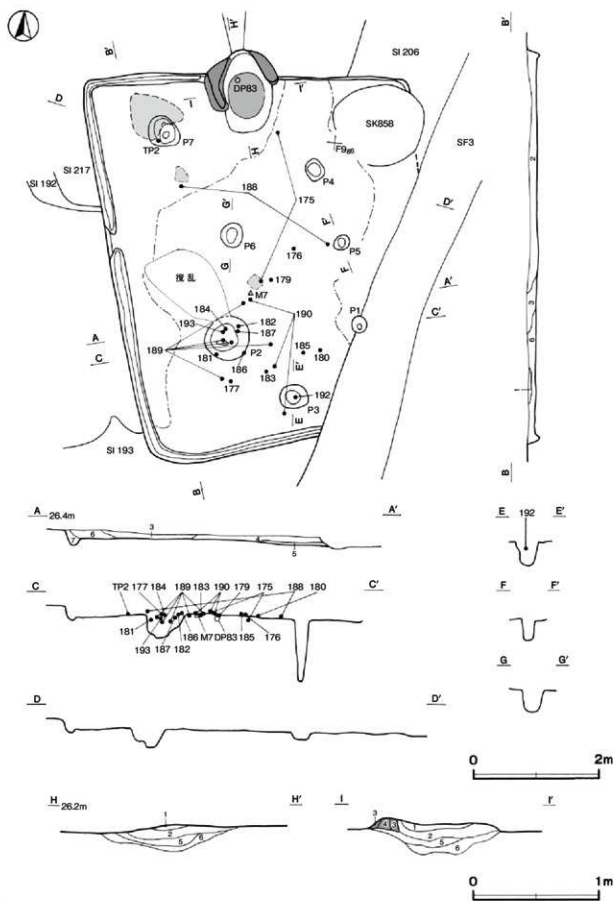
位置 調査区東部のF9g5区、標高26.2mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第192・193・206・217号住居跡、第768号土坑を掘り込み、第3号道路、第858号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸6.15m、短軸5.15mの不整形長方形で、主軸方向はN-6°-Wである。壁高は16cmで、ほぼ直立している。

床 平坦で、中央部から南西部にかけて踏み固められている。西半部には、一部を除いて壁下に壁溝が巡っている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部までが145cmで、燃焼部幅は74cmである。火床部は、不定形に掘りくぼめた部分に第1・2・5・6層を埋土して構築されている。袖部は、火床部構築中、第5・6層埋土後にローム粒子や粘土粒子を含む第3・4層を積み上げて構築されている。火床部は床面から4cmほど高まっており、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外に55cm掘り込まれ、火床部から緩やかに傾斜して立ち上がっている。



第 69 图 第 219 号住居跡実測図

覆土層解説

- | | |
|------------------------------------|-----------------------------------|
| 1 暗褐色 焼土ブロック多量、炭化粒子中量、ローム粒子・粘土粒子微量 | 4 暗褐色 焼土粒子多量、粘土粒子中量、ローム粒子少量、炭化物微量 |
| 2 暗褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子・粘土粒子微量 | 5 灰褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 3 に近い褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 灰褐色 ローム粒子・焼土粒子微量 |

ピット 7か所。P1・P2は深さ97cm・39cmで、配置から主柱穴である。P3は深さ36cmで、南壁寄りの中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。P4～P7は深さ9～34cmで、性格不明である。

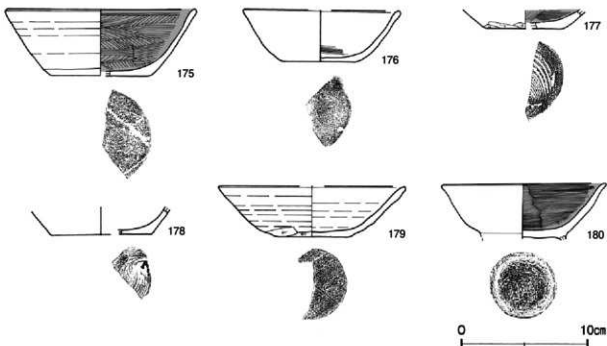
覆土 7層に分層できる。多くの層にロームブロックや焼土ブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

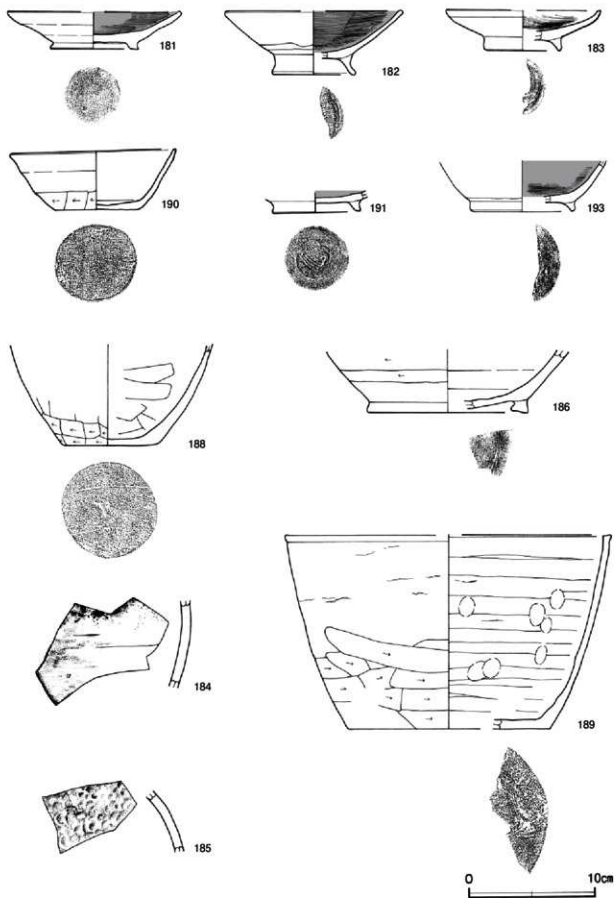
- | | |
|-----------------------------|-------------------------|
| 1 暗褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量、炭化物微量 | 5 に近い黄褐色 ロームブロック多量 |
| 2 暗褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子少量 | 6 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 3 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量 | 7 暗褐色 ロームブロック少量 |
| 4 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量 | |

遺物出土状況 土師器片1297点（坏453、高台付碗6、高台付皿5、盤1、甕832）、須恵器片152点（坏55、高台付坏1、蓋1、瓶1、甕93、瓶1）、灰輪陶器片8点（碗1、長頸瓶7）、土製品2点（支脚）、焼成粘土塊18点、鉄製品1点（不明鉄製品）が、中央部の覆土下層から床面を中心に出土している。また、混入した縄文土器片34点（深鉢）も出土している。DP83は竈火床面から出土しており、遺棄されたものとみられる。181・187・193はP2、192はP3の覆土上層から出土している。189はP2の覆土上層と南西部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。179、M7は中央部、180は南部の床面から出土している。176は中央部、TP2は北西部、177・182～186は南西部の覆土下層から出土している。190は南西部の覆土下層から散在して出土した破片が接合したものである。175は北部の床面と中央部の覆土下層、188は中央部の床面と北西部の覆土下層から出土した破片が接合したものであり、いずれも離れた地点から破片の状態で出土していることから、破砕の後投棄された可能性がある。178・191・194は覆土中から出土している。186は第24号掘立柱建物跡・第909号土坑から出土した破片との接合関係を確認できた。

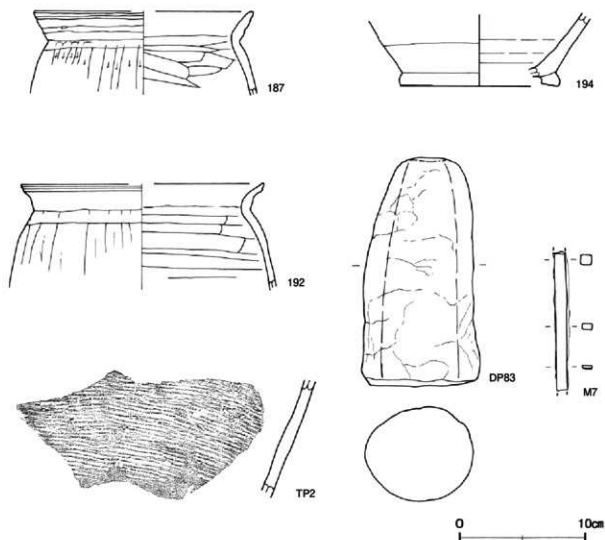
所見 時期は、出土土器から9世紀後葉に比定できる。



第70図 第219号住居跡出土遺物実測図（1）



第71图 第219号住居跡出土遺物実測図(2)



第72図 第219号住居跡出土遺物実測図(3)

第219号住居跡出土遺物観察表(第70~72図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	動土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
175	土師器	坏	15.0	5.3	[7.8]	長石・石英・片状 灰質・赤色粒子	灰黄褐色	普通	内面ヘラミガキ 底部下縁回転ヘラケズリ 底部手持ちヘラケズリ	床面・覆土下層	70% PL18
176	土師器	坏	[12.4]	4.1	[6.0]	長石・石英・赤 色粒子	灰黄褐色	普通	内面ヘラミガキ 底部下縁手持ちヘラケズリ	覆土下層	20%
177	土師器	坏	-	(1.5)	[6.2]	長石・石英・赤 色粒子	灰黄褐色	普通	内面ヘラミガキ 底部下縁手持ちヘラケズリ 底部回転糸切り後 周縁部手持ちヘラケズリ	覆土下層	20%
178	土師器	坏	-	(2.2)	[8.0]	長石・石英・赤 色粒子	灰黄褐色	普通	底部回転糸切り	覆土中	10%
179	須恵器	坏	[14.8]	4.0	5.5	長石・石英・黒 色粒子	灰	良好	底部下縁手持ちヘラケズリ 底部一方の手持ちヘラケズリ	床面	30% PL18
180	土師器	高台付瓶	13.0	(4.6)	-	長石・石英・赤色 粒子・黒色粒子	橙	普通	内面ヘラミガキ 底部回転ヘラケズリ後 高台貼り付け	床面	70%
181	土師器	高台外瓶	[13.6]	3.0	7.0	長石・石英・細 砂・赤色粒子	灰黄褐色	普通	内面ヘラミガキ 底部回転ヘラケズリ後 高台貼り付け	P2 覆土上層	45% PL18
182	土師器	高台外瓶	[14.0]	5.1	[6.3]	長石・石英・赤 色粒子	明赤褐色	普通	内面ヘラミガキ 底部回転ヘラケズリ後 高台貼り付け	覆土下層	30%
183	土師器	高台外瓶	[12.2]	3.2	[6.0]	長石・石英・片状 灰質・赤色粒子	明赤褐色	普通	内面ヘラミガキ 底部回転ヘラケズリ後 高台貼り付け	覆土下層	30%
184	灰輪陶器	瓶	-	(6.8)	-	長石	黒灰(フー 粉土質)	良好	外面回転ヘラケズリ後 抽輪	覆土下層	5% PL26
185	灰輪陶器	瓶	-	(4.9)	-	長石	黒灰(フ 粉土質)	良好	外面抽輪	覆土下層	5% PL26
186	灰輪陶器	短直器	-	(4.9)	[12.6]	長石・石英	灰黄	良好	外面回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ後 高台貼り付け 底部内面障灰による自然釉少量	覆土下層	5% PL25
187	土師器	小形甕	[17.4]	(6.6)	-	長石・石英	灰黄褐色	普通	口縁部外・内面ナデ 体部外面回転位のヘラケズリ 内面ヘラミガキ	P2 覆土上層	5%
188	土師器	小形甕	-	(8.0)	7.6	長石・石英・葉 砂・赤色粒子	灰黄褐色	普通	体部外面下位ヘラケズリ 内面ヘラミガキ 底部ヘラケズリ	覆土下層	20% PL19
189	須恵器	鉢	[26.0]	15.3	[16.0]	長石・石英・黒 色粒子	灰	良好	体部外面下位ヘラケズリ 内面ヘラミガキ 指内面	P2覆土上層 P3覆土下層	60% PL19

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
190	須恵器	環	131	4.8	6.5	長石・石英・貝殻 灰質・赤色粒子	黄灰	良好	体部下縁手持りヘラケズリ 底部多方向の手持りヘラケズリ	覆土下層	60% PL18
191	土師器	高台皿*	-	(1.6)	7.0	長石・石英・葉 母・赤色粒子	にぶい黄緑	普通	内面ヘラミガキ 底部回転糸切り・回転ヘラケズリ後、高台貼り付け	覆土中	10%
192	土師器	壺	[190]	(8.4)	-	長石・石英・葉 母・赤色粒子	にぶい黄	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦位のヘラケズリ 内面ヘラケズリ	P 3 覆土上層	10%
193	土師器	高台杯類	-	(4.0)	[8.0]	長石・石英・赤 色粒子	橙	普通	内面ヘラミガキ 底部高台貼り付け	覆土上層	10%
194	灰陶器類	短頸壺	-	(5.7)	[12.6]	長石・石英・細 礫	黄灰	良好	外面回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ後、高台貼り付け 内面降灰による自然釉少量	覆土中	5% PL25

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP 2	須恵器	壺	長石・石英・細礫	灰黄陶	良好	外面横位の平行叩き後ヘラケズリ 内面ヘラケズリ	覆土下層	

番号	器種	最小径	最大径	高さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DF93	支脚	3.8	9.4	18.0	1270	長石・石英・細礫 赤色粒子	ヘラケズリ後ナデ	竈火床面	PL23

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 7	不明 鉄製品	(11.0)	0.7~ 0.8	0.2~ 0.7	(26.9)	鉄	断面長方形 上・下端欠損	床面	PL24

表6 平安時代竈穴住居跡一覧表

番号	位置	平面形状	主軸方向	規模		床面	構造	内部施設				覆土	主な出土遺物	時期	備考	
				長径・短径(m)	面積(m ²)			土階穴	出入口(ドット)	炉	竈					貯蔵穴
4	F 8 c8	[方形]	[N-14°-W]	(4.0) × (4.0)	-	平坦	-	-	-	-	礎1	-	不明	-	重複関係(内→新) S110 → 本跡 → SK 79・80	
5	F 8 f7	長方形	N-1°-W	5.04 × 4.54	22~32	平坦	全面	4	1	-	礎1	-	人為	土師器片、須恵器片、土師、陶炊器	9世紀中葉	SI14・18 → 本跡 → SB24
10	F 8 c8	方形	N-2°-W	-	22.397m	1	平坦	-	-	-	礎1	-	人為	土師器片、須恵器片、灰陶陶器片	9世紀後半	SI 9 → 本跡 → SI 3
212	F 9 f4	[方形・長方形]	N-6°-E	4.56 × (4.26)	20	平坦	一部	4	1	-	礎1	-	人為	土師器片、須恵器片、土師、土瓦	9世紀中葉	SI194・205 → 本跡 → SI213・214
213	F 9 g5	[長方形]	N-0°	[4.40] × [3.98]	8	平坦	一部	3	2	2	礎1	-	人為	土師器片、須恵器片、灰陶陶器片	9世紀後半	SI194・200A・200B・212・213・SK898・900 → 本跡 → SK900・909 → 本跡 → SI214
214	F 9 g1	長方形	N-5°-W	6.34 × 5.86	6~8	平坦	ほぼ 完全	2	1	-	礎1	-	人為	土師器片、須恵器片、灰陶陶器片、土瓦、陶炊器	9世紀後半	SI193・204・209・212・213・SK898・900 → 本跡 → SK902・909 → 本跡 → SK902
219	F 9 g5	不整 長方形	N-6°-W	6.15 × 5.15	16	平坦	一部	2	1	4	礎1	-	人為	土師器片、須恵器片、灰陶陶器片、支脚、蓋	9世紀後半	SI192・193・206・217・SK 768 → 本跡 → SF 3、SK858

(2) 掘立柱建物跡

第 21 号掘立柱建物跡 (第 73 図)

位置 調査区南東部の F 9 j4 区、標高 26.1 m の平坦な台地上に位置している。

確認状況 P 2 ~ P 9 については平成 19 年度に調査し、『第 308 集』において報告されている。P 1 の調査を平成 21 年度に実施した。

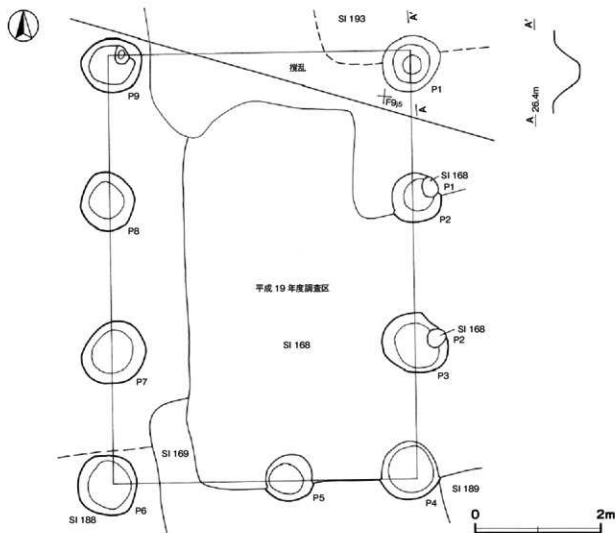
重複関係 第 169・188・189・193 号住居跡を掘り込み、第 168 号住居に掘り込まれている。

規模と構造 桁行 3 間、梁行 2 間の側柱建物跡で、桁行方向 N-5°-W の南北棟である。規模は桁行 6.80 m、梁行 4.80 m で、面積は 32.64 m² である。柱間寸法は桁行が 2.25 m (7 尺 5 寸)、梁行は東から 1.80 m (6 尺)、2.70 m (9 尺) で均等に配置されている。柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 9 か所。平面形は円形または楕円形で、P 1 の長径は 96 cm、短径 84 cm で、深さは 42 cm である。掘方の断面形は U 字状である。

遺物出土状況 P 1 からは遺物は出土していない。

所見 時期は、『第 308 集』において 9 世紀代と推定されている。



第73図 第21号掘立柱建物跡実測図

第22号掘立柱建物跡（第74・75図）

位置 調査区中央部のF 8和区、標高26.2mの平坦な台地上に位置している。

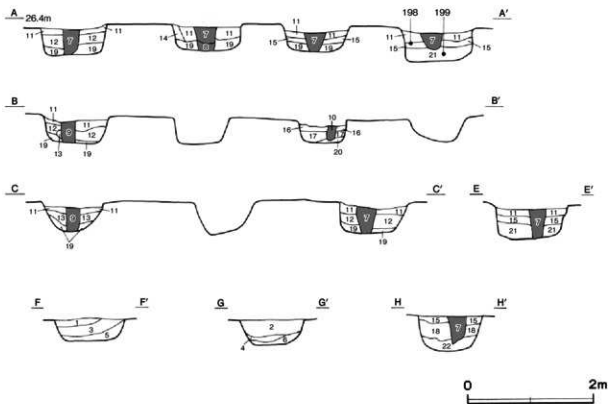
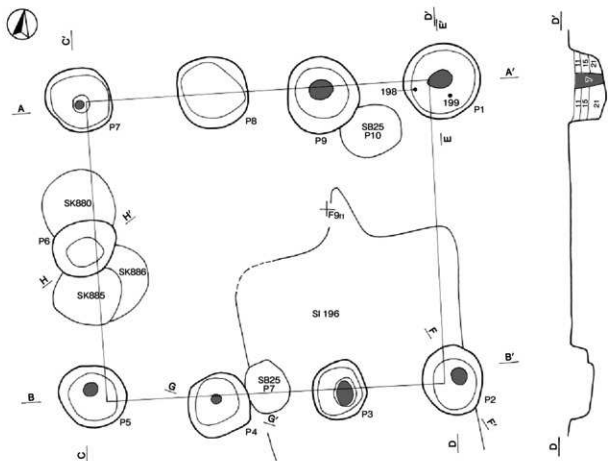
重複関係 第196号住居跡、第25号掘立柱建物跡、第880・885・886号土坑を掘り込んでいる。

規模と構造 桁行3間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向N-85°-Eの東西棟である。規模は桁行5.40m、梁行4.83mで、面積は26.08㎡である。柱間寸法は桁行が1.80m（6尺）、梁行が2.42m（8尺）で均等に配置されている。柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 9か所。平面形は楕円形または隅丸方形で、長径96～122cm、短径86～118cmである。深さは40～53cmで、掘方の断面形はU字状または箱形である。第1～6層は柱抜き取り後の覆土。第7～10層は柱痕跡、第11～22層は掘方への埋土である。

柱穴土層解説（各柱穴共通）

1 暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量	5 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 灰褐色	ローム粒子多量、炭化物・焼土粒子微量	6 灰褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
3 暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子微量	7 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
4 灰褐色	ロームブロック少量・焼土粒子・炭化粒子微量	8 暗褐色	焼土粒子微量

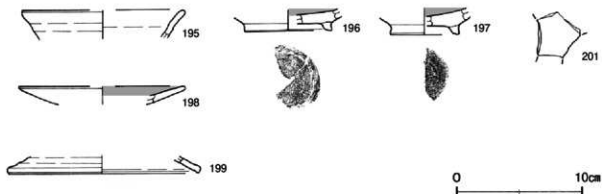


第74图 第22号掘立柱建物跡実測图

9	暗褐色	ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量	16	暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量
10	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量	17	暗褐色	焼土粒子中量、ロームブロック少量
11	暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	18	褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量
12	暗褐色	ローム粒子多量、焼土粒子微量	19	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
13	暗褐色	ロームブロック・炭化物微量	20	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子微量
14	暗褐色	ロームブロック微量	21	暗褐色	ロームブロック少量
15	暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	22	暗褐色	ローム粒子微量

遺物出土状況 土師器片 208 点（坏 43、高台付碗 3、皿 1、甕 161）、須恵器片 19 点（坏 4、蓋 1、甕 13、瓶 1）、焼成粘土塊 11 点が各柱穴から出土している。また、混入した縄文土器片 42 点（深鉢）、古墳時代の土師器片 17 点（坏）も出土している。198・199 は P 1、201 は P 2、197 は P 8 の埋土からそれぞれ出土している。196 は P 1 と P 8 の埋土から出土した破片が接合したものである。195 は P 2 の柱抜き取り後の覆土から出土している。

所見 時期は、出土土器や重複関係、近似した軸方向の掘立柱建物跡が存在することから、9 世紀後葉と考えられる。



第 75 図 第 22 号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第 22 号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第 75 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
195	須恵器	坏	[126]	(22)	-	長石・石英	灰	良好		P 2	5%
196	土師器	高台付皿	-	(15)	[6.8]	長石・石英・貝殻 炭物・赤色粒子	橙	普通	内面ヘラミガキ 高台貼り付け	P 1・P 8	20%
197	土師器	高台付皿	-	(21)	[5.5]	長石・石英・貝殻 炭物・赤色粒子	にぶい橙	普通	内面ヘラミガキ 底部割削ヘラクスリ後、高台 貼り付け	P 8	10%
198	土師器	皿	[129]	(14)	-	長石・石英・細 織	にぶい黄橙	普通	内面ヘラミガキ	P 1	5%
199	須恵器	蓋	[150]	(14)	-	長石・石英	灰	良好		P 1	5%
201	須恵器	瓶	-	-	-	長石・石英	灰	良好	五孔式	P 2	5%

第 23 号掘立柱建物跡（第 76・77 図）

位置 調査区中央部の F 9 e3 区、標高 26.2 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 202A・216 号住居跡、第 789・792・797・804・816・854 号土坑を掘り込み、第 857 号土坑に掘り込まれている。第 813 号土坑との重複関係は不明である。

規模と構造 桁行 3 間、梁行 2 間の身舎に、東面に庇が付く総柱建物跡で、桁行方向 N-84°-W の東西棟である。規模は身舎が桁行 6.30 m、梁行 4.20 m で、面積は 26.46 m² である。庇の出は 1.20 m（4 尺）で、庇を含めた桁行は 7.50 m で、面積は 31.50 m² である。身舎の柱間寸法は桁行・梁行ともに 2.10 m（7 尺）で均

等に配置されている。北平西部の柱穴は確認できなかったが、柱筋はほぼ揃っている。

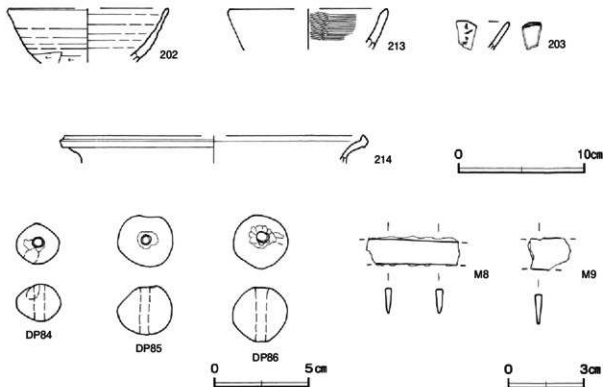
柱穴 14か所。P 1～P 11は身舎の柱穴で、平面形は円形または楕円形で、長径74～130cm、短径68～117cmである。深さは24～55cmで、掘方の断面形はU字状または逆台形である。P10・P11は、規模から東柱の可能性がある。P 12～P 14は庇の柱穴で、平面形は楕円形で、長径45～72cm、短径36～50cmである。深さは25～40cmで、掘方の断面形はU字状である。第1層は柱抜き取り後の覆土、2～5層は柱痕跡、第6～20層は掘方への埋土である。

柱穴土層解説 (各柱穴共通)

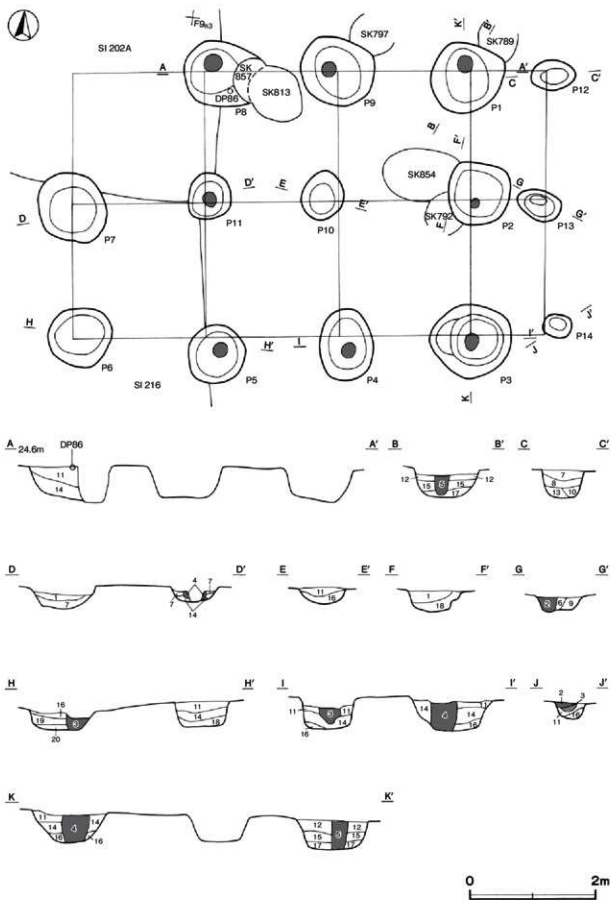
1 暗 褐色	焼土粒子少量、ロームブロック・炭化材微量	12 灰 褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
2 褐 色	ロームブロック・焼土ブロック微量	13 灰 褐色	ローム粒子微量
3 暗 褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	14 暗 褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
4 黒 褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量	15 灰 褐色	ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量
5 灰 褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	16 暗 褐色	ロームブロック・焼土粒子微量
6 褐 色	ローム粒子少量	17 灰 褐色	ロームブロック・炭化物・焼土ブロック微量
7 褐 色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	18 暗 褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
8 褐 色	ローム粒子・焼土粒子微量	19 褐 色	ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
9 褐 色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	20 褐 色	ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子微量
10 褐 色	ローム粒子中量、炭化材・焼土粒子微量		
11 暗 褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量		

遺物出土状況 土師器片424点(坏195, 高台付碗2, 皿3, 甕224), 須惠器片48点(坏13, 高台付坏1, 瓶1, 甕33), 灰釉陶器片1点(碗カ), 土製品3点(土玉), 鉄器2点(刀子), 焼成粘土塊15点が各柱穴から出土している。また、混入した縄文土器片435点(深鉢), 古墳時代の土師器片10点(坏8, 高坏2)も出土している。202はP 2, DP84はP 3, 203はP 5, M 8・M 9はP 6, DP85・DP86はP 8, 213はP 14の埋土からそれぞれ出土している。214はP 7の柱抜き取り後の覆土から出土している。

所見 時期は、出土土器や重複関係、近似した軸方向の掘立柱建物跡の存在から、9世紀後葉と考えられる。



第76図 第23号掘立柱建物跡出土遺物実測図



第 77 图 第 23 号掘立柱建物跡実測図

第23号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第76図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考	出土位置	備考
202	須恵器	坏	[126]	(43)	-	長石・石英・黒色粒子	にぶい黄	良好	体部下端手持ちヘラケズリ		P 2	5%
213	土師器	椀	[126]	(32)	-	長石・石英	橙	普通	内面ヘラミガキ		P 14	5%
203	灰釉陶器	椀*	-	(23)	-	長石	黒灰+1-7 黒土	良好	外面及び内面口縁端部施釉 一部釉剥落		P 5	5% PL25
214	須恵器	壺	[236]	(22)	-	長石・石英	黄灰	良好	縦位の平行引き後ナデ		P 7	5%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP84	土玉	23	1.9	0.7	8.5	長石・石英・赤色粒子	ナデ調整 一方向からの穿孔	P 3	PL22
DP85	土玉	29	2.6	0.5	(17.1)	長石・石英・赤色粒子	ナデ調整 一方向からの穿孔 一部欠損	P 8	PL22
DP86	土玉	29	2.9	0.6	21.4	長石・石英	ナデ調整 二方向からの穿孔*	P 8	PL22

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 8	刀子	(3.8)	1.0	0.3	(3.3)	鉄	断面三角形 切先部・基部欠損	P 6	PL24
M 9	刀子	(1.7)	1.2	0.3	(1.4)	鉄	断面三角形 切先部・基部欠損	P 6	PL24

第24号掘立柱建物跡(第78・79図)

位置 調査区西部のF 8/8区、標高26.3mの平坦な台地上に位置している。

確認状況 P 1～P 6・P 8・P 9の調査を平成21年度に実施した。P 7については、第5号住居跡のP 1として「第308集」で報告されているが、本報告に伴い再検討し、本跡のP 7へと遺構番号の付け替えを行った。

重複関係 第5・14・208A号住居跡、第845・865・872・877・883・905号土坑を掘り込んでいる。

規模と構造 桁行3間、梁行2間の掘立柱建物跡で、桁行方向N-85°-Eの東西棟である。規模は桁行6.31m、梁行4.20mで、面積は26.50m²である。柱間寸法は桁行・梁行ともに2.10m(7尺)で均等に配置されている。柱筋はほぼ揃っている。

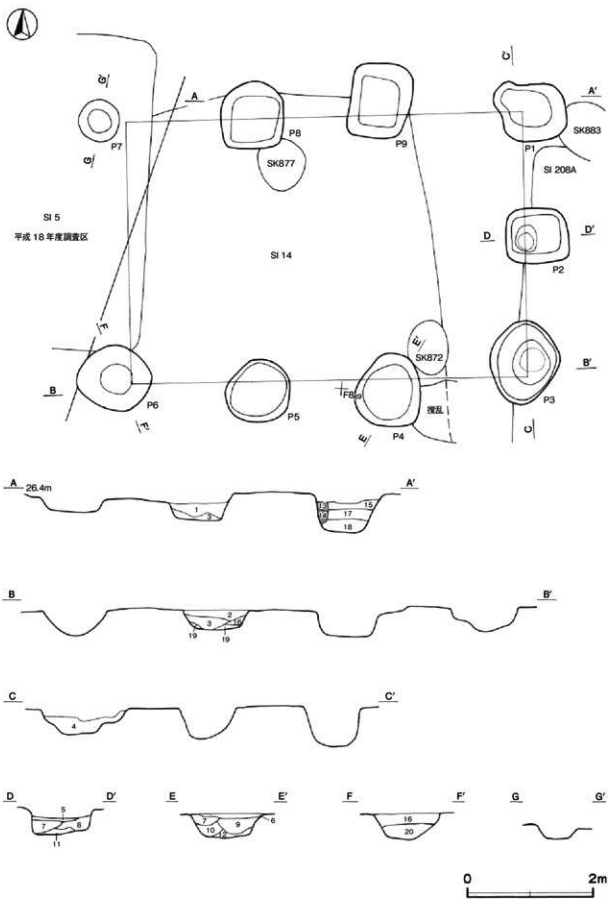
柱穴 9か所。平面形は楕円形または隅丸方形で、P 1～P 6・P 8・P 9は長径100～136cm、短径90～112cmである。深さは24～63cmで、掘方の断面形は逆台形である。第1～12層は柱抜き取り後の覆土、第13・14層は柱痕跡、第15～20層は掘方への埋土である。P 7は第5号住居跡の調査時に掘り込まれていたため、長径0.68m、短径0.64m、深さ24cmしか確認できなかった。

柱穴土層解説(各柱穴共通)

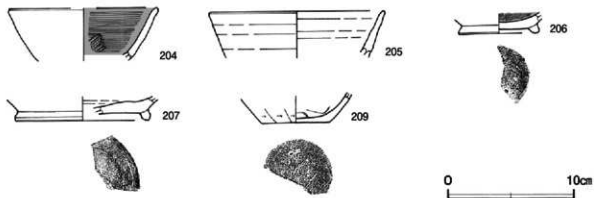
1 暗 褐色	ロームブロック中量	11 暗 褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
2 灰 褐色	ロームブロック・焼土粒子少量	12 暗 褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
3 暗 褐色	ロームブロック少量	13 暗 褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
4 黒 褐色	ロームブロック・炭化物微量	14 暗 褐色	ロームブロック微量
5 暗 褐色	ローム粒子微量	15 暗 褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
6 暗 褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量	16 暗 褐色	ローム粒子少量
7 暗 褐色	ロームブロック少量、炭化物・焼土粒子微量	17 褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
8 暗 褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量	18 褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
9 暗 褐色	ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量	19 暗 褐色	ロームブロック中量
10 暗 褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量	20 暗 褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片86点(坏15、高台付碗1、堿69、小形甕1)、須恵器片8点(坏1、高台付坏1、高盤カ1、堿5)、灰釉陶器片1点(短頸壺)が各柱穴から出土している。また、混入した縄文土器片21点(深鉢)、古墳時代の土師器片2点(坏)も出土している。186・205・207～209はP 4、204・206はP 6の埋土からそれぞれ出土している。186は第219号住居跡・第909号土坑から出土した破片との接合関係を確認できた。

所見 時期は、出土土器や重複関係から9世紀後半と考えられる。



第78図 第24号掘立柱建物跡実測図



第79図 第24号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第24号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第79図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
204	土師器	環	[11.6]	(4.2)	-	灰石・石英・赤色粒子	におい橙	普通	内面ヘラミガキ	P 6	5%
205	須恵器	環	[13.8]	(3.7)	-	灰石・石英・黒色粒子	灰	良好		P 4	5%
206	土師器	高台付環	-	(1.6)	[6.4]	灰石・石英・赤色粒子	橙	普通	内面ヘラミガキ 底部回転ヘラケズリ後、高台貼り付け	P 6	10%
207	須恵器	高台付環	-	(1.8)	[10.4]	灰石・石英・赤色粒子	褐灰	良好	底部回転ヘラケズリ後、高台貼り付け	P 4	5%
209	土師器	小形壺	-	(2.2)	5.4	灰石・石英・片状灰物・赤色粒子	橙	普通	体部外面下位ヘラケズリ 内面ヘラナデ 底部一方向のヘラケズリ	P 4	10%

第25号掘立柱建物跡(第80図)

位置 調査区中央部のF 8 e0区、標高26.2mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第196・201・202A・208A号住居跡、第895号土坑を掘り込み、第22号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と構造 桁行3間、梁行2間の御柱建物跡で、桁行方向N-8°-Wの南北棟である。規模は桁行5.40m、梁行4.20mで、面積は22.68m²である。柱間寸法は桁行が1.80m(6尺)、梁行が2.10m(7尺)で均等に配置されている。柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 10か所。平面形は楕円形または隅丸方形で、長径83~120cm、短径72~107cmである。深さは9~42cmで、掘方の断面形は逆台形字状である。第1~5層は柱痕跡、第6~22層は掘方への埋土である。

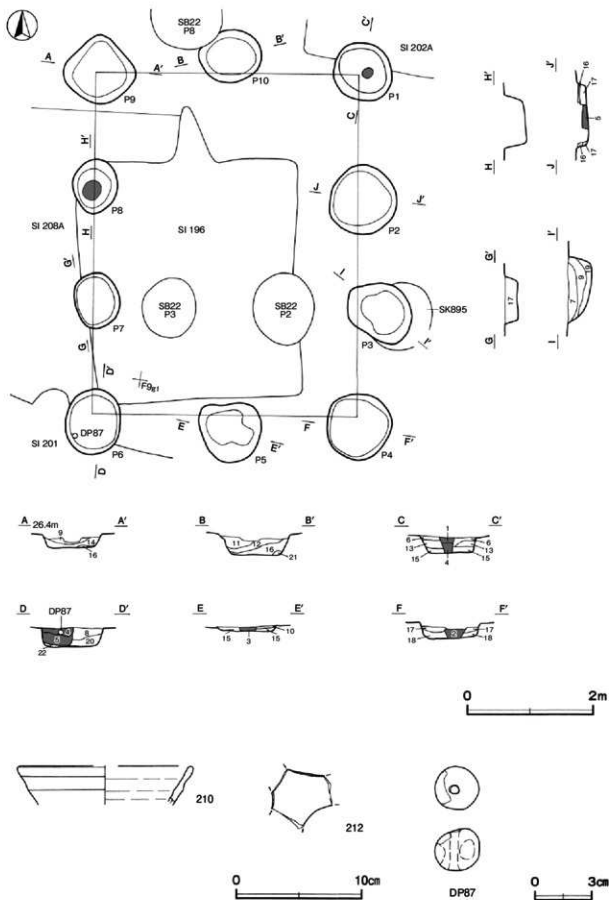
柱穴土層解説(各柱穴共通)

1 褐色	砂粒少量、焼土粒子・炭化粒子微量	12 暗褐色	ロームブロック少量
2 褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量	13 褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
3 褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	14 灰褐色	ロームブロック少量
4 黒褐色	砂粒多量、ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	15 褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
5 暗褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化物・砂粒微量	16 暗褐色	ローム粒子少量
6 褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量	17 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
7 灰褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	18 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
8 褐色	ロームブロック・焼土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量	19 灰褐色	ローム粒子・炭化粒子少量
9 灰褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	20 暗褐色	ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量
10 褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	21 褐色	ロームブロック少量
11 灰褐色	ローム粒子少量	22 褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片85点(坏5, 甕80), 須恵器片15点(坏1, 甕12, 瓶1), 土製品1点(土玉), 焼成粘土塊4点が各柱穴から出土している。また、混入した縄文土器片28点(深鉢)も出土している。

DP87はP 6, 210はP 9, 212はP 10の埋土からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器や重複関係から9世紀前葉と考えられる。



第80图 第25号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第25号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第80図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
210	須恵器	罎	[138]	(31)	-	長石・石英・珪状 灰質・赤色粒子	暗灰黄	良好		P 9	5%
212	須恵器	瓶	-	-	(48)	長石・石英	褐灰	良好	五孔式*	P 10	5%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DF87	土玉	24	22	0.5	123	長石・石英	ナデ調整 一方向からの穿孔	P 6	PL22

表7 平安時代掘立柱建物跡一覽表

番号	位置	桁行方向	柱間数	縦・横	面積	柱間寸法		柱穴		主な出土遺物	時期	備考		
						桁間(m)	梁間(m)	構造	柱穴数				平面形	深さ(cm)
21	F 9/4	N - 5° - W	3 × 2	6.80 × 4.80	32.64	2.25	1.80	欄柱	9	円形・楕円形	21	-	9世紀代	SI169・188・189・193→本跡→SI168
22	F 8/0	N - 85° - E	3 × 2	5.40 × 4.83	26.08	1.80	2.42	欄柱	9	楕円形・隅丸方形	40 - 53	土師器片、須恵器片	9世紀後半	SI196、SI225、SK860・865、886→本跡
23	F 9e3	N - 84° - W	3 × 2	6.30 × 4.20	26.46	2.10	2.10	総柱	14	円形・楕円形	24 - 55	土師器片、須恵器片、灰輪陶器片、土玉、刀子	9世紀後半	SI202A・216、SK780・782、797・804・854→本跡→SK657
24	F 8/8	N - 85° - E	3 × 2	6.31 × 4.20	26.50	2.10	2.10	欄柱	9	楕円形・隅丸方形	24 - 63	土師器片、須恵器片、灰輪陶器片	9世紀後半	SI 3・14・208A、SK645・865・872・877・883・905→本跡
25	F 8e0	N - 8° - W	3 × 2	5.40 × 4.20	22.68	1.80	2.10	欄柱	10	楕円形・隅丸方形	9 - 42	土師器片、須恵器片、土玉	9世紀前半	SI196・201・202A・208、SK885→本跡→SK22

(3) 土坑

第865号土坑(第81図)

位置 調査区西部のF 8/9区、標高26.2mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第14号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径0.62m、短径0.58mの円形である。深さ14cmで、底面は皿状であり、壁は外傾して立ち上がっている。

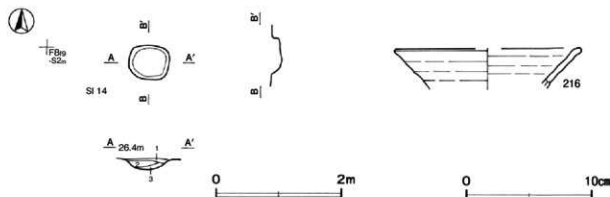
覆土 3層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子少量、ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片1点(甕)、灰輪陶器片1点(椀)が出土している。216は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器や重複関係から9世紀代と考えられる。



第81図 第865号土坑・出土遺物実測図

第865号土坑出土遺物観察表 (第81図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
216	円地陶器	甗	[14.5]	(32)	-	石英	黒灰子・ロー ム土質	良好		覆土中	5% P125

第907号土坑 (第82図)

位置 調査区中央部のF9e2区、標高26.2mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第216号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 径1.18mの円形である。深さ38cmで、底面は平坦であり、壁は外傾して立ち上がっている。

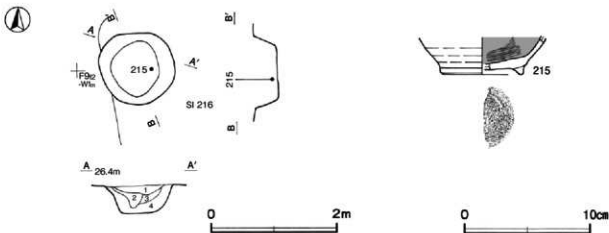
覆土 4層に分層できる。ブロック状の堆積状況を示していることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|---------------------------|-----------------------------|
| 1 暗褐色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 | 3 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片8点(高台付杯1, 甕7), 須恵器片2点(甕)が出土している。また、混入した縄文土器片2点(深鉢)も出土している。215は覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀後葉に比定できる。



第82図 第907号土坑・出土遺物実測図

第907号土坑出土遺物観察表 (第82図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
215	土師器	高台付杯	-	(30)	[6.2]	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	内面ヘラミカキ 底部回転ヘラケズリ痕 高台貼り付け	覆土下層	20%

第909号土坑 (第83図)

位置 調査区中央部のF9g3区、標高26.1mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第214号住居に掘り込まれている。第213号住居跡との重複関係は不明である。

規模と形状 長径1.06m、短径0.80mの楕円形で、長径方向はN-0°である。深さ32cmで、底面は平坦であり、壁はほぼ直立している。

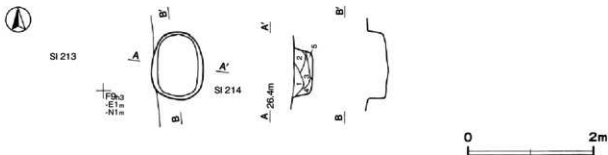
覆土 5層に分層できる。ブロック状の堆積状況を示していることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック少量・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片 12点(坏7, 甕5), 灰軸陶器片 1点(短頸壺)が出土している。186は覆土中から出土している。186は第219号住居跡・第24号掘立柱建物跡から出土した破片との接合関係を確認できた。

所見 時期は, 出土土器や重複関係から, 9世紀後葉に比定できる。



第83図 第909号土坑実測図

表8 平安時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
865	F 8g9	-	円形	0.62 × 0.58	14	皿状	外傾	人為	土師器片, 灰軸陶器片	SI14 → 本跡
907	F 9a2	-	円形	1.18 × 1.18	38	平坦	外傾	人為	土師器片, 須恵器片	SI216 → 本跡
909	F 9g3	N-0°	楕円形	1.06 × 0.80	32	平坦	直立	人為	土師器片, 灰軸陶器片	本跡 → SI214

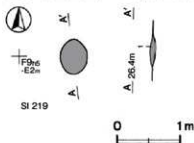
4 その他の遺構と遺物

今回の調査で, 時期や性格が明らかでない地点貝塚2か所, 方形竪穴遺構1基, 道路跡1条, 土坑54基, 溝跡2条, 奈良時代から平安時代にかけての遺物包含層1か所を確認した。以下, 遺構と遺物について記述する。なお, 道路跡, 溝跡の平面図については, 遺構全体図に掲載した。

(1) 地点貝塚

第9号地点貝塚 (第84図)

位置 調査区東部のF 9g5区, 標高26.2mの平坦な台地上に位置している。



第84図 第9号地点貝塚実測図

重複関係 第219号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径0.56m, 短径0.42mの楕円形で, 深さ8cmの土坑内で貝の散布を確認した。長径方向はN-1°-Eである。

貝層 単一層である。貝は土坑内に廃棄されたものと考えられる。出土した貝は, ヤマトシジミ 232点(右殻115, 左殻117)である。

貝層解説

- 1 純貝層 貝多量

遺物出土状況 混入した土師器片7点(坏5, 壺2)が出土している。

所見 時期は、重複関係から9世紀後葉以降と考えられるが、根拠となる遺物が出土していないため、明確な時期は不明である。

第10号地点貝塚(第85図)

位置 調査区東部のF9g5区、標高26.2mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第219号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 北部が攪乱を受けていたため明確な規模は不明であるが、長径0.56m、短径0.42mの楕円形で、深さ6cmの土坑内で貝の散布を確認した。長径方向はN-39°-Eと推定される。

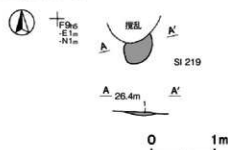
貝層 単一層である。貝は土坑内に廃棄されたものと考えられる。出土した貝は、ヤマトシジミ117点(右殻52, 左殻65)である。

貝層解説

1 純貝層 貝多量

遺物出土状況 混入した平安時代の土師器片1点(坏)が出土している。

所見 第9号地点貝塚とともに第219号住居跡を掘り込み、近接して位置していることから同時期のものと推定される。



第85図 第10号地点貝塚実測図

表9 時期不明地点貝塚一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備 考 重複関係(古→新)
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
9	F9g5	N-1°-E	楕円形	0.56×0.42	8	-	-	-	ヤマトシジミ	SI219→8跡
10	F9g5	N-39°-E	楕円形	0.56×0.42	6	-	-	-	ヤマトシジミ	SI219→8跡

(2) 方形竪穴遺構

第8号方形竪穴遺構(第86図)

位置 調査区南部のG9j2区、標高26.2mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第209号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸2.72m、短軸2.45mの隅丸長方形で、長軸方向はN-15°-Wである。壁高は8~14cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、北東・南東・南西・北西コーナー部が踏み固められている。

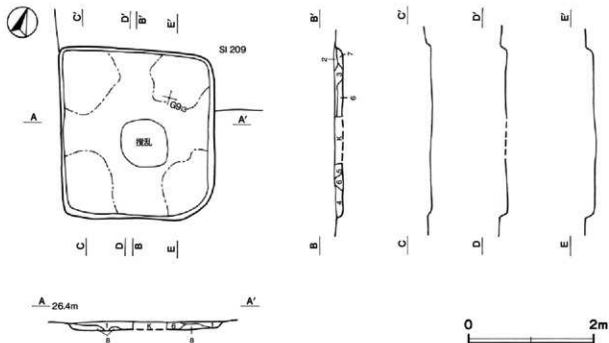
覆土 8層に分層でき、各層とも締まりが弱い。ブロック状の堆積状況を示していることから、埋め戻されている。

土層解説

1 褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	5 褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
2 灰褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量	6 褐色	ローム粒子中量
3 褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量	7 灰褐色	ローム粒子・焼土粒子中量、炭化粒子微量
4 褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	8 褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 混入した縄文土器6点(深鉢), 土師器片45点(坏4, 甕41), 須恵器片3点(坏), 焼成粘土塊11点が出土している。

所見 時期は, 出土土器や覆土の締まりが弱いことから平安時代以降と考えられるが, 根拠となる遺物が出土していないため, 明確な時期は不明である。



第86図 第8号方形堅穴遺構実測図

(3) 道路跡

第3号道路跡 (第87図)

位置 調査区東部のF9i6～F9i5区, 標高26.0～26.1mの平坦な台地上に位置している。

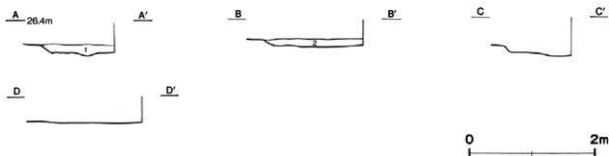
重複関係 第193・206・219・220号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 西部を除く大部分が調査区域外へ延びているため, 長さ11.84m, 幅1.67mしか確認できなかった。F9i5区から北方向(N-17°-E)に直線的に延びている。断面は浅いU字状で, 底面が硬化している。

覆土 使用によって凹んだ部分に, 土砂が堆積している。

土層解説

- 1 黒 褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子少量 2 黒 褐色 ローム粒子・焼土粒子少量



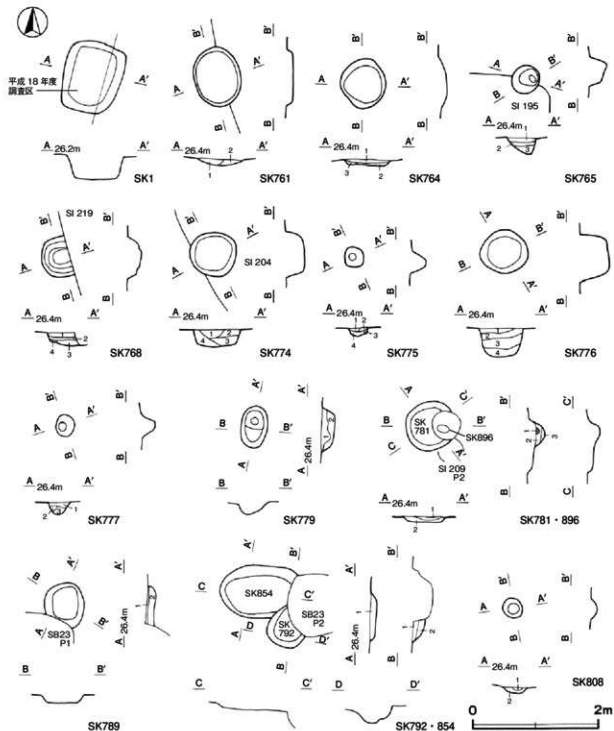
第87図 第3号道路跡実測図

遺物出土状況 混入した土師器31点(坏6, 甕25)が, 堆積土中から出土している。

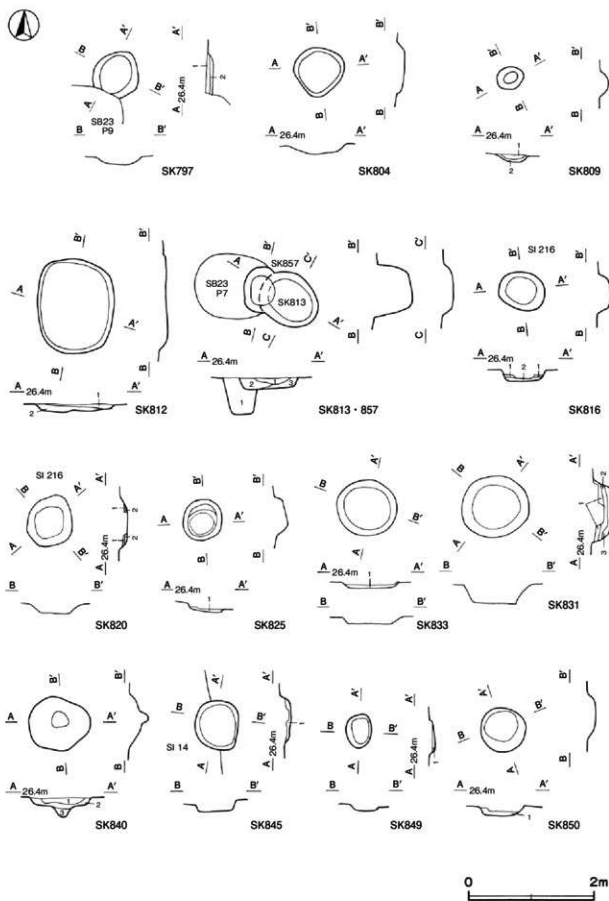
所見 時期は, 重複関係から9世紀後葉以降と考えられるが, 根拠となる遺物が出土していないため, 明確な時期は不明である。

(4) 土坑(第88~91図)

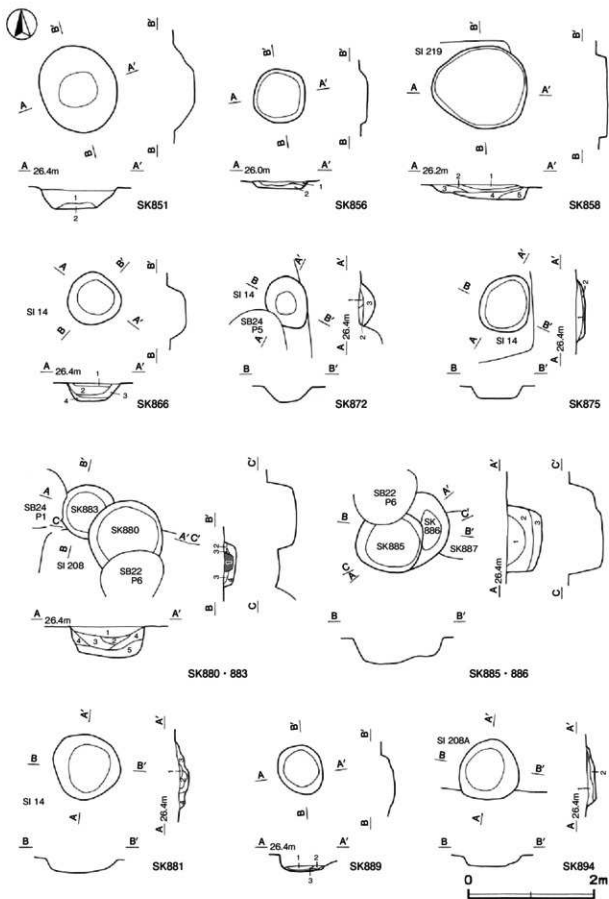
ここでは, 時期不明の土坑54基について, 実測図と土層解説, 一覧表を掲載する。なお, 第883・896号土坑については, 土層から柱穴と考えられるが, 時期・性格ともに不明なためここに掲載する。



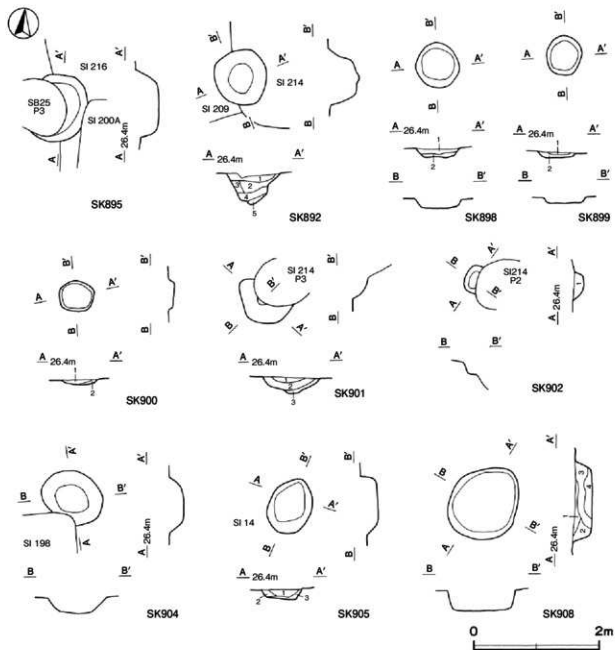
第88図 その他の土坑実測図(1)



第89図 その他の土坑実測図(2)



第90図 その他の土坑実測図(3)



第91図 その他の土坑実測図(4)

第761号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量

第764号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子微量

第765号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 3 褐色 炭化粒子微量

第768号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック・焼土ブロック微量
- 3 褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 4 褐色 ローム粒子少量

第774号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子微量

第 775 号土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量
- 2 灰褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ロームブロック少量
- 4 灰褐色 ロームブロック中量

第 776 号土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量
- 2 暗褐色 ロームブロック多量
- 3 暗褐色 焼土粒子多量、ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

第 777 号土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック中量

第 779 号土層解説

- 1 褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
- 2 褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

第 781 号土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子、炭化粒子微量
- 2 褐色 焼土ブロック・ローム粒子多量、炭化粒子微量

第 789 号土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 灰褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

第 792 号土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

第 797 号土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 灰褐色 ローム粒子微量

第 808 号土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 灰褐色 ロームブロック中量

第 809 号土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

第 812 号土層解説

- 1 灰褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 灰褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

第 813 号土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

第 816 号土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック・焼土粒子微量

第 820 号土層解説

- 1 暗褐色 粘土粒子中量、焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

第 825 号土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

第 831 号土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 灰褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量

第 833 号土層解説

- 1 灰褐色 ローム粒子・焼土粒子少量

第 840 号土層解説

- 1 灰褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子微量

第 845 号土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子微量

第 849 号土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子微量

第 850 号土層解説

- 1 灰褐色 ローム粒子少量

第 851 号土層解説

- 1 灰褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 褐色 粘土ブロック・ローム粒子少量

第 854 号土層解説

- 1 灰褐色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量

第 856 号土層解説

- 1 灰褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 灰褐色 ロームブロック・焼土粒子少量

第 857 号土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

第 858 号土層解説

- 1 暗褐色 炭化粒子中量、焼土ブロック・ローム粒子・粘土粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、焼土ブロック微量
- 3 暗褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量
- 4 黒褐色 焼土ブロック・炭化物・ローム粒子少量、粘土粒子微量
- 5 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量

第 866 号土層解説

- 1 灰褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック・焼土粒子少量
- 4 灰褐色 ローム粒子少量

第 872 号土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子微量

第 875 号土層解説

- 1 褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量

第 880 号土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子・粘土粒子微量

第 881 号土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量
- 4 褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

第 883 号土坑土層解説

- 1 暗 褐色 砂粒多量、焼土ブロック・炭化粒子微量 (柱痕跡)
- 2 褐色 炭化粒子少量、ロームブロック・焼土粒子微量 (埋土)
- 3 暗 褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量 (埋土)
- 4 暗 褐色 ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量 (埋土)

第 885 号土坑土層解説

- 1 暗 褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化材微量
- 2 暗 褐色 ローム粒子少量、炭化物・焼土粒子微量
- 3 灰 褐色 ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量

第 889 号土坑土層解説

- 1 暗 褐色 焼土粒子少量、炭化物・ローム粒子微量
- 2 暗 褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 暗 褐色 ローム粒子・焼土粒子微量

第 892 号土坑土層解説

- 1 暗 褐色 ロームブロック少量
- 2 暗 褐色 ロームブロック微量
- 3 暗 褐色 ローム粒子少量
- 4 暗 褐色 ロームブロック中量
- 5 褐色 ロームブロック中量

第 894 号土坑土層解説

- 1 暗 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 灰 褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

第 896 号土坑土層解説

- 1 暗 褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量 (柱痕跡)
- 2 暗 褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 (埋土)
- 3 黒 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 (埋土)

第 898 号土坑土層解説

- 1 黒 褐色 ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量

第 899 号土坑土層解説

- 1 黒 褐色 ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量

第 900 号土坑土層解説

- 1 黒 褐色 ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗 褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

第 901 号土坑土層解説

- 1 黒 褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 黒 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗 褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

第 902 号土坑土層解説

- 1 黒 褐色 焼土粒子中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量

第 905 号土坑土層解説

- 1 灰 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 2 灰 褐色 ロームブロック少量
- 3 灰 褐色 ロームブロック微量

第 908 号土坑土層解説

- 1 暗 褐色 ロームブロック・焼土粒子微量
- 2 暗 褐色 ロームブロック少量
- 3 暗 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗 褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量

表 10 時期不明土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考 重複関係(古→新)
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
1	F 8d8	N-12'-E	隅丸長方形	1.12 × 0.92	40	平坦	外傾	人為	土燵器片、須恵器片	SI-4→本跡
761	F 9e4	N-18'-W	楕円形	0.95 × 0.73	10	平坦	縦斜	人為	土燵器片	SI191→本跡
764	F 9h1	-	円形	0.79 × 0.73	13	皿状	縦斜	人為	-	
765	F 9g1	-	円形	0.46 × 0.40	26	傾斜	外傾	人為	土燵器片、地成粘土塊	SI195→本跡
768	F 9g5	N-16'-W	[円形・楕円形]	0.65 × (0.44)	22	有段	縦斜	人為	縄文土器片、土燵器片、須恵器片	本跡→SI219
774	F 9j3	-	円形	0.74 × 0.74	30	平坦	外傾・外縦・縦斜	人為	縄文土器片、土燵器片、須恵器片	SI204→本跡
775	F 9j3	-	円形	0.35 × 0.30	24	皿状	縦斜	人為	-	
776	F 9j3	-	円形	0.77 × 0.71	47	平坦	外傾	人為	縄文土器片	
777	F 9j3	N-21'-W	楕円形	0.35 × 0.31	22	皿状	外傾・縦斜	人為	-	
779	F 9h2	N-3'-E	楕円形	0.67 × 0.43	18	皿状	縦斜	人為	土燵器片	SI209→本跡
781	F 9h3	N-17'-E	楕円形	0.80 × 0.74	10	平坦	縦斜	人為	土燵器片	SI209→本跡 →SK606
780	F 9d4	N-18'-E	楕円形	0.70 × 0.64	12	平坦	外傾	人為	-	本跡→SR23
792	F 9e3	N-33'-E	[楕円形]	0.60 × (0.42)	21	平坦	縦斜	人為	-	SK654→本跡 →SI223
797	F 9d3	N-31'-E	楕円形	0.70 × 0.70	16	皿状	縦斜	人為	縄文土器片、土燵器片	本跡→SR23
804	F 9d3	-	円形	0.80 × 0.75	14	傾斜	縦斜	不明	縄文土器片、土燵器片、須恵器片	本跡→SR23
808	F 9d3	-	円形	0.33 × 0.32	10	皿状	縦斜	人為	土燵器片	
809	F 9d2	N-61'-E	楕円形	0.46 × 0.38	13	皿状	縦斜	人為	土燵器片、須恵器片	SI202A→本跡
812	F 9c1	N-32'-W	楕円形	1.50 × 1.28	12	平坦	縦斜	人為	縄文土器片、土燵器片、須恵器片、燵器片	

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
813	F 9 e3	N-62°-W	楕円形	1.00 × 0.80	14	平直	縦斜	人為	縄文土器片、土師器片、須恵器片	SI23 → SK857 → 本跡
816	F 9 f2	N-58°-W	楕円形	0.73 × 0.62	20	平直	縦斜	人為	土師器片	SI216 → 本跡
820	F 9 e2	N-36°-E	楕円形	0.83 × 0.72	15	平直	縦斜	人為	-	SI216 → 本跡
825	F 9 g1	-	円形	0.64 × 0.64	19	平直	外傾	人為	-	
831	F 9 d1	-	円形	1.03 × 1.00	27	平直	外傾	人為	土師器片、須恵器片	
833	F 8 d0	-	円形	0.94 × 0.86	10	平直	縦斜	人為	-	
840	F 8 e9	N-67°-W	楕円形	0.95 × 0.68	32	凹凸	縦斜	人為	-	
845	F 8 f9	N-31°-W	楕円形	0.80 × 0.70	18	平直	外傾	人為	-	SI14 → 本跡
849	F 8 f0	N-14°-W	楕円形	0.53 × 0.40	12	平直	外傾・ 縦斜	人為	-	
850	F 8 f9	-	円形	0.72 × 0.72	11	平直	縦斜	自然	土師器片、焼成粘土塊	
851	F 8 f8	-	円形	1.43 × 1.20	34	平直	外傾・ 縦斜	人為	土師器片、須恵器片	
854	F 9 e3	N-89°-E	楕円形	(1.08) × 0.85	8	傾斜	縦斜	人為	土師器片	本跡 → SK792 → SI23
856	F 8 d0	-	円形	0.88 × 0.87	12	平直	縦斜	人為	縄文土器片、土師器片	SI197 → 本跡
857	F 9 e3	N-21°-E	[楕円形]	(0.70) × (0.30)	56	平直	外傾	人為	-	SI23 → 本跡 → SK813
858	F 9 f6	N-82°-W	楕円形	1.49 × 1.30	18	平直	外傾	人為	縄文土器片、土師器片、須恵器片	SI219 → 本跡
866	F 8 g8	-	円形	0.84 × 0.84	28	皿状	外傾	人為	土師器片、焼成粘土塊	SI4 → 本跡
872	F 8 f9	N-36°-W	楕円形	0.84 × 0.68	25	皿状	外傾	人為	縄文土器片、土師器片	SI4 → 本跡 → SI24
875	F 8 g9	N-28°-E	楕円形	0.96 × 0.80	20	平直	外傾	人為	土師器片	SI4 → 本跡
880	F 8 f0	N-19°-E	[楕円形]	(1.24) × 1.17	50	平直	直立	人為	縄文土器片、土師器片、須恵器片	SI28A → SK883 → 本跡 → SI22
881	F 8 g8	-	円形	1.07 × 1.04	18	平直	縦斜	人為	縄文土器片、土師器片、須恵器片	SI4 → 本跡
883	F 8 e9	N-62°-W	[楕円形]	(0.90) × 0.85	20	傾斜	外傾	人為	土師器片	SI208A → 本跡 → SI24 → SK880
885	F 8 f0	-	円形	1.02 × 0.95	40	平直	外傾	人為	縄文土器片、土師器片、須恵器片、 焼成粘土塊	SI28A → SK886 → 本跡 → SI22
886	F 8 f9	N-10°-E	[楕円形]	1.26 × (0.66)	30	平直	外傾	不明	-	SI28A → SI207 → 本跡 → SK885 → SI22
889	F 8 f0	N-45°-W	楕円形	0.82 × 0.70	18	皿状	外傾	人為	縄文土器片、土師器片	SI208A → 本跡
892	F 9 h3	-	円形	0.90 × 0.82	48	凹凸	外傾	人為	土師器片	SI209 → 214 → 本跡
894	F 8 e0	-	円形	0.98 × 0.98	16	平直	縦斜	人為	縄文土器片、土師器片	SI208A → 本跡
896	F 9 e2	N-23°-E	楕円形	1.10 × (0.43)	33	平直	縦斜	不明	縄文土器片、土師器片、須恵器片	SI24 → 本跡 → SI203 → SI25
896	F 9 h3	-	円形	0.46 × 0.46	28	皿状	縦斜	人為	-	SI209 → SK781 → 本跡
898	F 9 g4	-	円形	0.74 × 0.68	20	平直	縦斜	人為	土師器片	本跡 → SI214
899	F 9 g4	N-1°-E	楕円形	0.64 × 0.56	10	平直	縦斜	人為	-	本跡 → SI214
900	F 9 g3	N-60°-W	楕円形	0.54 × 0.49	8	平直	縦斜	人為	土師器片	本跡 → SI213
901	F 9 h3	N-48°-W	[楕円形]	0.86 × (0.34)	30	平直	縦斜	人為	土師器片	本跡 → SI214
902	F 9 h4	N-32°-E	[楕円形]	0.45 × (0.20)	20	平直	外傾	人為	-	本跡 → SI214
904	F 9 f2	N-48°-W	楕円形	0.99 × (0.80)	25	平直	縦斜	不明	土師器片	SI170 → 本跡 → SI198
906	F 8 f8	N-30°-E	楕円形	0.92 × 0.65	22	平直	外傾	人為	-	SI4 → 本跡
908	F 8 f8	N-37°-E	楕円形	1.24 × 1.10	34	平直	外傾	人為	縄文土器片、須恵器片	

(5) 溝跡

第 49 号溝跡 (第 92 図)

位置 調査区南西部の F 8 h0 区～G 8 a9 区、標高 26.2 m の平坦な台地上に位置している。

確認状況 南部については平成 19 年度に調査し、「第 308 集」において報告している。北部は平成 21 年度に調査した。

重複関係 第170号住居跡、第46号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長さは10.20mで、北方向(N-4°-W)に直線的に延びている。上幅0.90~2.30m、下幅0.73~1.98m、深さ9~21cmである。壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

遺物出土状況 混入した縄文土器1点(深鉢)、土師器6点(甕)が出土している。

所見 時期は、根拠となる遺物が出土していないため、不明である。



第92図 第49号溝跡実測図

第51号溝跡(第90図)

位置 調査区北東部のF8a0区~F8c0区、標高26.3mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第197号住居跡、第2号遺物包含層を掘り込んでいる。

規模と形状 北方向(N-11°-E)に直線的に延びている。第197号住居跡の調査時に掘り込んでしまったため、長さは8.05mしか確認できなかった。上幅0.60~0.94m、下幅0.38~0.63m、深さ25~51cmである。断面はU字状で、壁は外傾して立ち上がっている。

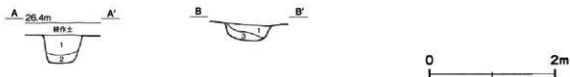
覆土 3層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------|-------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・粘土ブロック | 2 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| | ク・炭化物微量 | 3 黒褐色 | ロームブロック少量 |

遺物出土状況 陶器1点(碗)、磁器1点(碗)が出土しているが、いずれも細片のため図示できない。また、混入した縄文土器片13点(深鉢)、土師器片16点(坏6、甕10)、須恵器片6点(坏4、甕2)も出土している。

所見 時期は、出土遺物から近世以降と考えられるが、遺物がすべて細片のため詳細は不明である。



第93図 第51号溝跡実測図

表11 時期不明溝跡一覧表

番号	位置	方向	形状	規模				断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					
49	F8b0~G8a0	N-4°-W	直線	10.2	0.90~2.30	0.73~1.98	9~21	赤心字状	緩斜	-	縄文土器片、土師器片	SI170→本跡
51	F8a0~F8c0	N-13°-E	[直線]	8.05	0.60~0.94	0.38~0.63	25~51	U字状	外傾	人為	陶器片、磁器片、縄文土器片・土師器片、須恵器片	SI197、HG2→本跡

(6) 遺物包含層

第2号遺物包含層 (第94図)

位置 調査区北西部のE 8g5～F 9c3区、標高25.2～25.8mの台地上から北側に傾斜する斜面に位置している。

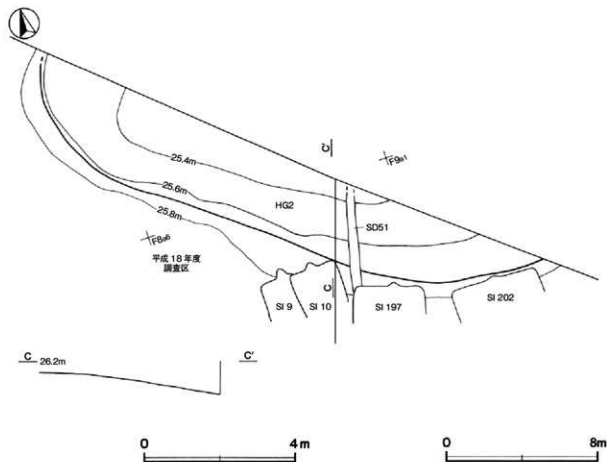
確認状況 西部については平成18年度に調査し、『第308集』において報告している。東部については平成21年度に調査した。

重複関係 第51号溝に掘り込まれている。

規模と形状 北部が調査区域外に延びているため、北西・南東軸方向43m、北東・南西軸方向8mしか確認できなかった。

遺物出土状況 土師器片35点(坏28, 甕7)、須恵器片5点(坏1, 甕4)が出土しているが、いずれも細片のため図示できない。また、混入した陶器1点(碗)、磁器1点(碗)も出土している。

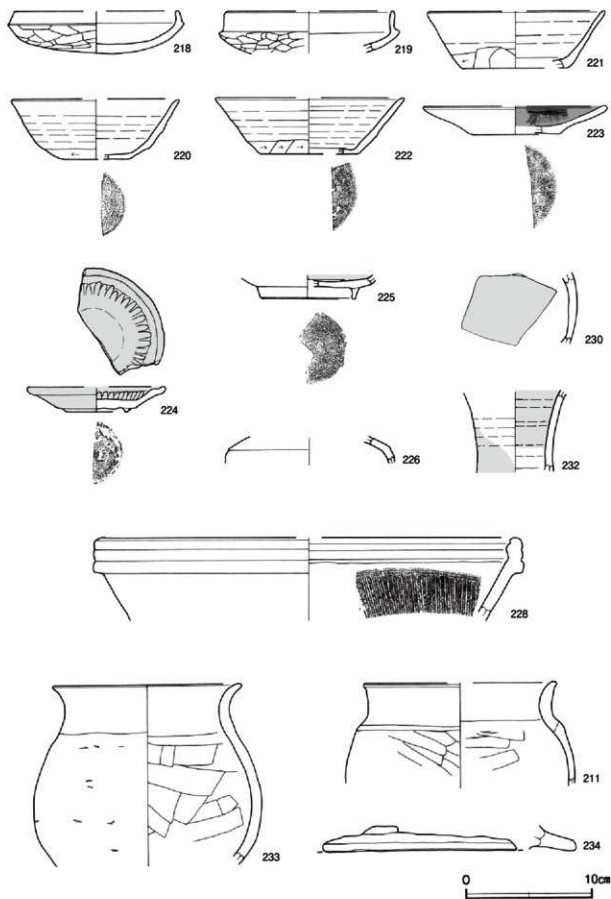
所見 『第308集』において、8～10世紀にかけて形成されたものと推定されている。今回の調査区から出土した遺物も、8～10世紀に収まる時期のものである。



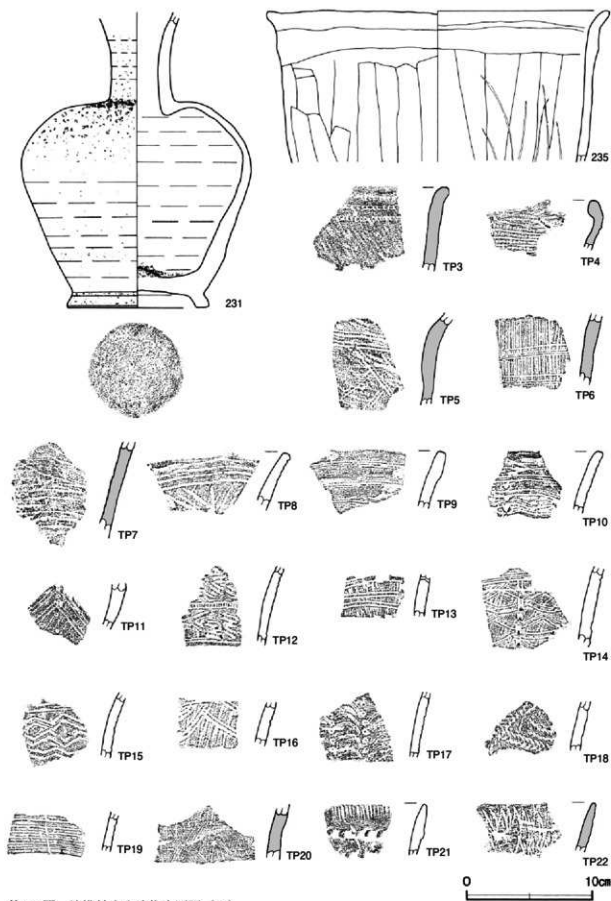
第94図 第2号遺物包含層実測図

(7) 遺構外出土遺物 (第95～98図)

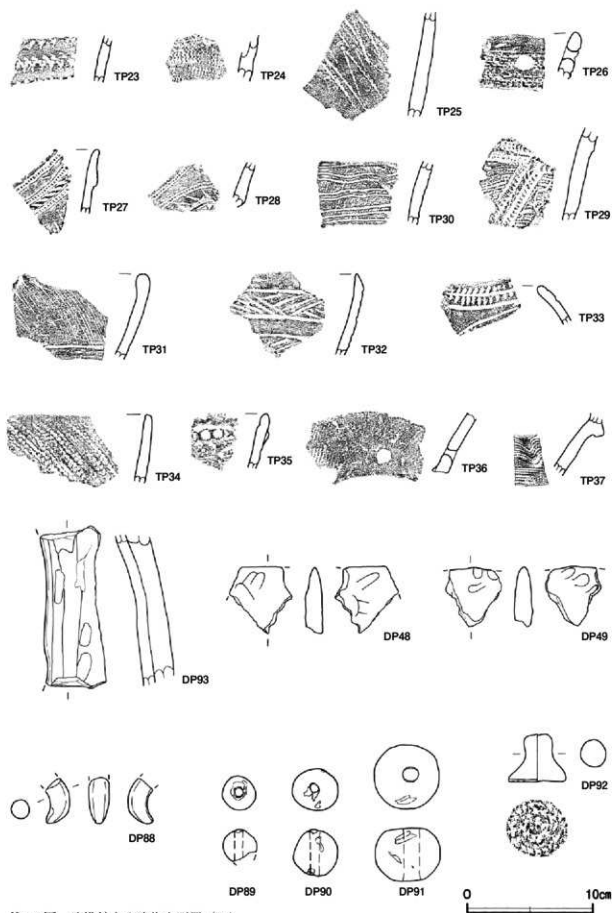
今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物について、実測図と観察表を掲載する。



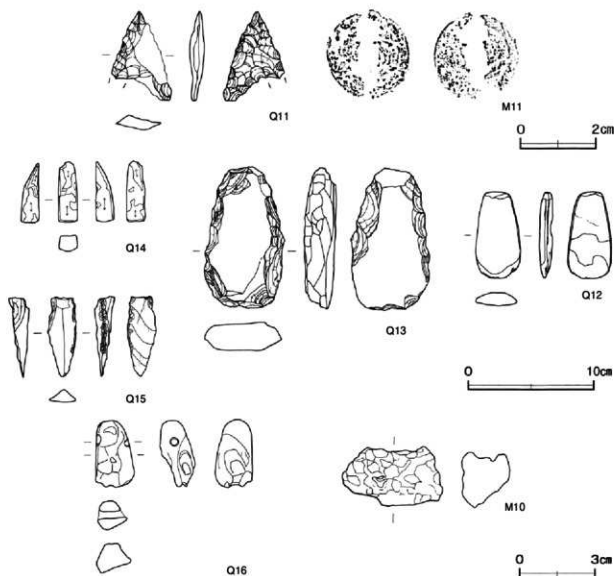
第95图 遗構外出土遺物実測図(1)



第96图 遺構外出土遺物実測図(2)



第97图 遗構外出土遺物実測図(3)



第98図 遺構外出土遺物実測図(4)

遺構外出土遺物観察表(第95~98図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	構成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
218	土師器	坏	[128]	3.4	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面ナデ 体部外面ヘラケズリ	表土	10%
219	土師器	坏	[132]	(3.3)	-	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面ナデ 体部外面ヘラケズリ	表土	10%
220	須恵器	坏	[132]	4.8	[5.0]	長石・石英・赤色粒子	オリーブ	普通	体部下端回転ヘラケズリ 底部一方向のヘラケズリ	表土	30%
221	須恵器	坏	[138]	4.5	[8.4]	長石・石英・赤色粒子	黄灰	良好	体部下端手持ちヘラケズリ	表土	20%
222	須恵器	坏	[148]	4.5	[7.8]	長石・石英・雲母	黄灰	良好	体部下端手持ちヘラケズリ 底部一方向の手持ちヘラケズリ	表土	20%
223	土師器	皿	[143]	2.2	[7.0]	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	内面ヘラミガキ 外面及び底部単純	表土	20%
224	陶器	胡蝶黒	[108]	2.0	[5.0]	長石	黄赤黒 胎土或黒色	良好	体部内面ソギ 高台内輪下手痕	表土	40% PL20
225	灰釉陶器	高台付皿	-	(1.9)	[7.4]	長石	胎土 灰白	良好	内面筒底による自然釉ごく微量付着 底部回転ヘラケズリ(後高台貼り付け)	表土	20% K90号 黒式測 PL25
226	須恵器	坏蓋	-	(2.2)	-	長石	灰	良好		表土	5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
228	陶器	椀鉢	[33.3]	(6.6)	-	長石・石英	灰緑	良好	揉り目	表土	10%
230	須恵器	瓶	-	(5.5)	-	長石・石英	黄灰ナテ 胎土灰化	良好	外面自然釉	SI197	5%
231	須恵器	長頸瓶	-	(23.2)	11.3	長石・石英	黄灰ナテ 胎土灰化	良好	陰灰による自然釉 底部および高台後縁部に松葉状植物灰漬着	表土	70% PL25
232	灰陶器	長頸瓶	-	(6.2)	-	長石	灰 黄 胎土灰白	良好	刷毛による施釉	表土	5%
211	土師器	甕	[15.0]	(8.3)	-	長石・石英・赤色 粒子・黒色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラナデ 内面ヘラナデ	SI25	10%
233	土師器	甕	14.8	(14.3)	-	長石・石英・雲 母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部内面ヘラナデ	表土	40% PL20
234	土師器	羽釜	-	(2.1)	-	長石・石英・赤 色粒子	にぶい橙	普通	胴部 ナデ調整	表土	5%
235	土師器	瓶	27.0	(12.1)	-	長石・石英・粗 漉・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦位のヘラケ スリ 内面ヘラナデ後ヘラミガキ	表土	30%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP3	縄文土器	深鉢	長石・石英	明黄緑	普通	口縁部平截竹管による二条の刺突文	表土	前期後半 TP.20
TP4	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	単節縄文 RL	SK885	前期後半 TP.20
TP5	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄緑	普通	単節縄文 RL 施文後。平截竹管による平行沈線	SI193	前期後半 TP.20
TP6	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄	普通	縦位の沈線施文後。横位の沈線	表土	前期後半 TP.20
TP7	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	貝殻条痕文	表土	前期後半 TP.20
TP8	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	有筋平行沈線文	SI214	前期後半 TP.20
TP9	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	横位の縦歯状線文	SI194	前期後半 TP.20
TP10	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐	普通	平截竹管による沈線文と連続山形文施文後。爪形の刺突文付加	SI196	前期後半 TP.20
TP11	縄文土器	深鉢	長石・石英	赤褐	普通	平截竹管による沈線施文後。円形刺突文付加 内面ミガキ	SI195	前期後半 TP.20
TP12	縄文土器	深鉢	長石・石英	赤褐	普通	平截竹管による沈線文と爪形文	SI202A	前期後半 TP.20
TP13	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐	普通	平截竹管による沈線文 穿孔1か所	SI195	前期後半 TP.20
TP14	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	平截竹管による連続山形文施文後。沈線	SI201	前期後半 TP.20
TP15	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	平截竹管による連続山形文と沈線	SK880	前期後半 TP.21
TP16	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	地文然赤文し施文後。平截竹管による平行沈線文	SI198	前期後半 TP.21
TP17	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄	普通	平截竹管による肋骨文施文後。円形の刺突文付加	表土	前期後半 TP.21
TP18	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄緑	普通	変形爪形文	表土	前期後半 TP.21
TP19	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	平截竹管による沈線文	SI216	前期後半 TP.21
TP20	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	平截竹管による沈線文	SI220	前期後半 TP.21
TP21	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	赤褐	普通	口縁部条痕文 中位および下位に刺突文	SI202A	前期後半 TP.21
TP22	縄文土器	深鉢	長石・石英	明褐	普通	外面貝殻線による波状文	SI214	前期後半 TP.21
TP23	縄文土器	深鉢	長石・石英	赤褐	普通	貝殻線による波状文	SI198	前期後半 TP.21
TP24	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	貝殻線文	SI195	前期後半 TP.21
TP25	縄文土器	深鉢	長石・石英	明褐	普通	貝殻線文	SI193	前期後半 TP.21
TP26	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	平截竹管による結節沈線文 穿孔1か所	SI200	中期前半 TP.21
TP27	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部直下に結節沈線文 斜位のキザミを有する隆帯に沿って結節沈線文と沈線施文後。爪形の刺突文付加	表土	中期前半 TP.21
TP28	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	赤褐	普通	口縁部直下に結節沈線文 斜位のキザミを有する隆帯に沿って結節沈線文と沈線施文後。爪形の刺突文付加	SI194	中期前半 TP.21
TP29	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐	普通	単節縄文 RL 施文後。結節沈線文 沈線に斜位のキザミ	表土	中期前半 TP.21
TP30	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	然赤文し施文後。平截竹管による平行沈線文	SI194	中期前半 TP.21
TP31	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	横位の沈線 斜位の沈線文	SI208	長野中葉 TP.21

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP32	縄文土器	深鉢	長石・石英・細礫・赤色粒子	橙	普通	横位の沈線 斜位の沈線文	SI25	表層中巻 PL21
TP33	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部2条の刻文帯		表層中巻 PL21
TP34	縄文土器	深鉢	長石・石英	黄橙	普通	外面卑胎縄文LR 口縁部内面沈線	SI294	表層中巻 PL21
TP35	縄文土器	深鉢	長石・石英	赤褐	普通	外面隆帯に指頭任痕 横位の沈線 口縁部内面沈線	表土	表層中巻 PL21
TP36	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	普通	外面卑胎縄文LR 内面ミガキ 穿孔2か所	表土	PL21
TP37	灰土器	壺	長石	暗灰黄	良好	外面輪飾成状文と帯飾横線文	表土	PL25

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP48	不明土製品	(53)	(50)	1.4	(267)	長石・石英	ナデ調整	SI14	
DP49	不明土製品	(47)	(44)	1.5	(219)	長石・石英	ナデ調整	SI14	

番号	器種	幅	高さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP93	置き皿	(130)	(48)	(143.2)	長石・石英	ナデ調整	表面採集	PL23

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP88	勾玉	(24)	1.3	1.1	(3.3)	長石・石英	ナデ調整 一部欠損	表土	PL23

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP89	土玉	18	(1.7)	0.8	(4.4)	長石・石英	ナデ調整 一方からの穿孔	表土	PL22
DP90	土玉	24	2.5	0.6	11.7	長石・石英	ナデ調整 工具痕 一方からの穿孔	表面採集	PL22
DP91	土玉	3.5	2.8	1.0	(309)	長石・石英・赤色粒子	ナデ調整 工具痕 一方からの穿孔 一部欠損	表土	PL22

番号	器種	最小径	最大径	高さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP92	スリブ(片土製品)	1.4	3.0	2.5	15.5	長石・石英	スタンプ部半截竹管による渦巻き状の刻文	SI192	PL23

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 11	石鏡	24	1.7	0.4	(1.1)	ホルンフェルス	両面押圧潤滑	SI202A	PL24
Q 12	磨製石斧	6.8	3.6	1.0	44.4	緑色凝灰岩	両面研磨	SI217	PL24
Q 13	打製石斧	11.2	6.4	2.4	220	流紋岩	両面調整 表裏に自然面を残す	SI193	PL24
Q 14	凝灰石	4.8	1.5	1.4	150	凝灰岩	紙面4面	表土	PL24
Q 15	二次加工(有す4面)	6.4	2.3	1.6	17.5	チャート	先端部摩耗 使用痕	SK776	PL24

番号	器種	長さ	幅	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 16	不明石製品	27	1.6	1.4	0.3	3.2	ガラス質褐色(アイザイト)	穿孔1か所 双方からの穿孔	SI217	PL24

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 10	鉄滓	2.4	4.0	2.0	22.3	鉄	輪状滓	SK812	PL24

番号	鏡名	径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 11	不明	(22)	—	0.1	(1.66)	銅	両面磨しく劣化	表土	

第4節 ま と め

1 はじめに

薬師後遺跡の平成18・19年度の調査結果は、『茨城県教育財団文化財調査報告 第308集』(以下「第308集」)として刊行されている。また、その中で当遺跡は、古墳時代後期から平安時代にかけての集落を中心とした遺跡であることが報告されており、平成21年度の調査区からもおよそ同時期の遺構を確認した。当遺跡における集落の変遷や出土遺物の様相については、『第308集』において詳しく触れられているため、ここでは、平成21年度の調査区における各時期の遺構と遺物について概観するとともに、これまでの調査区を含めた当遺跡の特徴について若干の補足・追考を行い、まとめたい。なお、ここで用いる住居跡と掘立柱建物跡の規模を表す語句については、『第308集』の区別に準拠する¹⁾。また、平成21年度の調査によって新たな遺構が確認された時期に関しては、グループの再考を行った上で略式の集落変遷図を掲載した。しかし、各時期(6・7・8・9世紀)の前・中・後葉のいずれかに位置付けることができない遺構もあり、これらの図化については割愛してあることを断っておきたい。また、これらの遺構については、分析対象からも除外している。

2 平成21年度の調査結果から

(1) 古墳時代の様相

古墳時代の遺構は、住居跡15軒(6世紀前葉3軒、6世紀中葉2軒、6世紀後葉4軒、6世紀代3軒、6世紀後半1軒、7世紀前葉2軒)、土坑2基(6世紀前葉・6世紀代)を確認した。

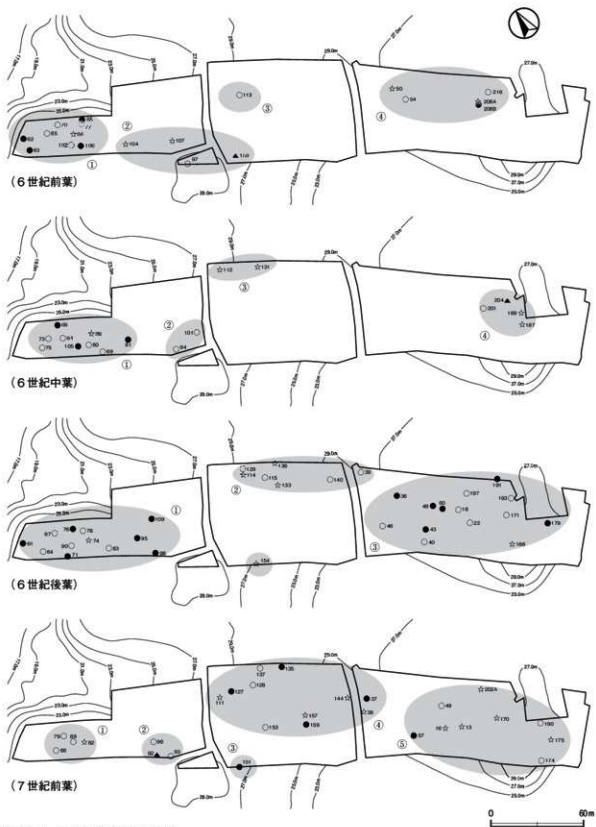
6世紀前葉の住居跡は第208A・208B号住居跡、第216号住居跡が該当し、第208A号住居跡は大形、第208B号住居跡は中形で、中形から大形の住居へと拡張されている。第216号住居跡は、他の遺構に掘り込まれているため詳細な規模は不明であるが、短軸の規模から中形と推定される。第208B号住居跡は北竈で、他の住居跡では竈は確認できなかった。また、第208A・208B号住居跡には、南壁際のやや西寄りに円形の貯蔵穴が付設されており、拡張の前後で貯蔵穴の形状や位置が一貫している。同様の位置と形状の貯蔵穴は既報告の第86号住居跡で見られる。土師器には赤彩が施されたものがあり、次期以降は赤彩が施された土器は激減する。第208A号住居跡からは滑石製の白玉が出土している。本期の集落は4グループに大別した。第208A・208B号住居跡は④グループに含まれる(第99図)。

6世紀中葉の住居跡は第201、204号住居跡が該当し、第201号住居跡は中形で、北竈の住居跡である。第204号住居跡の規模は不明である。第204号住居跡からは滑石製の白玉が出土している。本期の集落は「第308集」において4グループに大別されており、第201、204号住居跡は④グループに含まれる(第99図)。

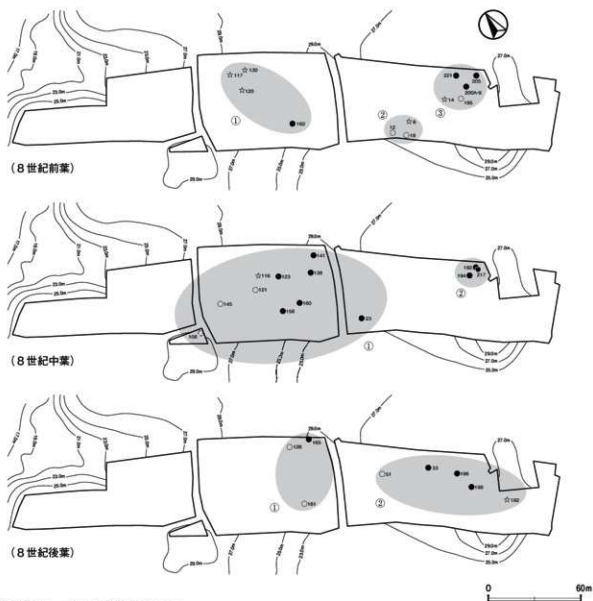
6世紀後葉の住居跡は第22・191・193・197号住居跡が該当し、第22・193・197号住居跡が中形、第191号住居跡が小形である。本期の集落は「第308集」において3グループに大別されており、第22・191・193・197号住居跡は③グループに含まれる。第154号住居跡については、別グループの可能性はある(第99図)。

7世紀前葉の住居跡は第170・202A号住居跡が該当し、いずれも大形で北竈である。第202A号住居跡からは有孔円板や土製勾玉が出土しており、石製模造品を用いた祭祀から土製品を用いた祭祀への過渡期の住居跡として注目される。本期の集落は5グループに大別したが、②・③グループについては、同一グループの外縁部にあたる可能性がある。第170・202A号住居跡は⑤グループに含まれる。「第308集」においては、これらのグループはさらに2～4軒からなる小グループに細別されている(第99図)。

凡例 ☆…大形住居跡 ○…中形住居跡 ●…小形住居跡 □田田田…掘立柱建物跡



第99圖 古墳時代集落變遷圖



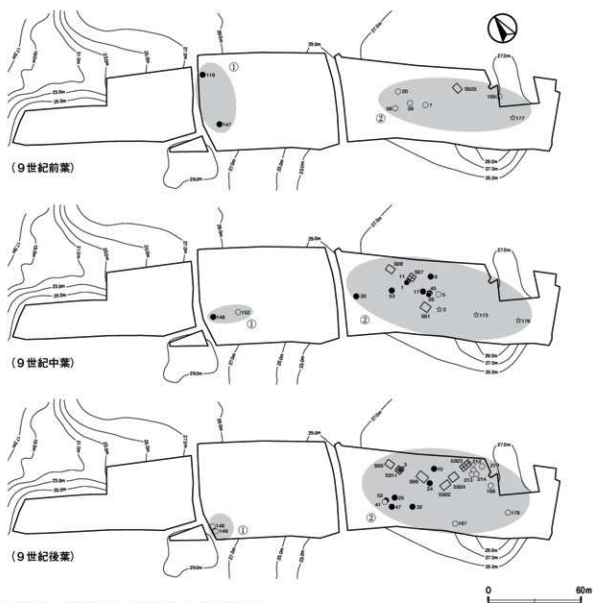
第100図 奈良時代集落変遷図

(2) 奈良時代の様相

奈良時代の遺構は、住居跡11軒（8世紀前葉6軒，8世紀中葉3軒，8世紀後葉2軒），土坑2基（8世紀後葉・8世紀後半）を確認した。

8世紀前葉の住居跡は第14・195・200A・200B・205・221号住居跡が該当し，第14号住居跡が大形，第195号住居跡は中形，第200A・200B・205・221号住居跡は小形である。第200B号住居跡は200A号住居へ拡張されている。第221号住居跡からは円面硯の破片が出土しており，注目される。本期の集落は2グループに大別し，平成21年度の調査区で確認した住居跡については②グループに含まれる。また，②グループについては，さらに北東部の一群と南西部の一群の2グループに細別できる（第100図）。

8世紀中葉の住居跡は第192・194・217号住居跡が該当し，いずれも小形で北窓である。平成21年度の調査区で確認した3軒の住居跡については，これまで確認されていたグループとは別のグループ（②グループ）とみられる（第100図）。



第101図 平安時代（9世紀代）集落変遷図

8世紀後葉の住居跡は第196・198号住居跡が該当し、いずれも小形である。竈は両道構とも北壁に付設されているが、第196号住居跡のものは煙道部が長く、特徴的である。遺物は、第196号住居跡から円面硯や東海産の須恵器長頸瓶(86)が出土しており、注目される。(86)は第843号土坑から出土した破片と接合している。第196号住居跡から出土した口縁部から頸部に関しては、支脚として再利用された可能性があるものの、火熱瓶がごく僅かであったため、両道構に大幅な時期差は無いものと考えられ、遺物の廃棄のあり方として興味深い事例である。また、このほか第196・198号住居跡から出土した須恵器壺(87)にも遺構間接合が確認できた。いずれも竈の火床部から破片の状態で出土しており、破砕の後両住居の竈に分け置かれ、廃絶の際に埋め戻されたものと考えられる。竈祭祀と関連のある事例とも考えられるが、詳細は不明である。今後の課題としたい。本期の集落は②グループに大別した。第196・198号住居跡は、②グループに含まれる(第100図)。

(3) 平安時代の様相

平安時代の遺構は、住居跡7軒（9世紀中葉1軒、9世紀後葉5軒、10世紀中葉1軒）、掘立柱建物跡5棟（9世紀前葉1棟、9世紀後葉3棟、9世紀代1棟）、土坑3基（9世紀後葉2基、9世紀代1基）を確認した。このうち第21号掘立柱建物跡P1は補足調査で確認した。また、遺構に伴わない灰釉陶器に関しては、その一部を写真図版に掲載した。

9世紀前葉の遺構は、第25号掘立柱建物跡が該当する。2間×3間の中形側柱建物跡で、桁行方向は西に振れている南北棟である。本期の集落は2グループに大別した。第25号掘立柱建物跡は、②グループに含まれ、当遺跡における最も早い段階の掘立柱建物跡である（第101図）。

9世紀中葉の住居跡は、第5号住居跡が該当し、中形である。本期の集落は「第308集」において2グループに大別されており、第5号住居跡は②グループに含まれる（第101図）。

9世紀後葉の住居跡は、第10・212・213・214・219号住居跡が該当し、すべて中形で北窓である。第212号住居跡からは円面視の破片が出土している。また、第212・213・214・219号住居跡のいずれからも灰釉陶器が出土しており、注目される。また、第22・23・24号掘立柱建物跡も本期の遺構である。いずれも桁行方向はN-84°-85°-Eの東西棟である。第22・24号掘立柱建物跡は2間×3間の中形側柱建物で、第23号掘立柱建物跡は総柱で、東庇のつく中形建物である。平成21年度の調査区内における本期の掘立柱建物跡はすべてが東西棟であり、面積も26～26.5m²と近似している点が注目される。これまでの調査においては、10世紀前葉の第12号掘立柱建物跡のみが東西棟で、そのほかの建物はすべて南北棟である。遺物は、第219号住居跡と第24号掘立柱建物跡と第909号土坑の埋土から出土した灰釉陶器短頸壺（186）が接合しており、第219号住居跡の廃絶と第24号掘立柱建物跡の築造がごく近接した時期であることが判明した。本期の集落は2グループに大別した。掘立柱建物跡は、台地東部に集中して築造されている。②グループに関しては、小形住居跡は西部、中形住居跡は東部に集中する傾向にあり、グループ内で住み分けが行われていた可能性が高い（第101図）。

3 これまでの調査結果を概観して

ここでは、これまでの調査結果を概観し、当遺跡の中心となる古墳時代から平安時代について、遺構と遺物から検討を行い、そこにみられる特徴について述べたい。比較対照とする遺跡は、3章第1節「歴史的環境」で触れた遺跡である。

(1) 古墳時代

①集落について

平成21年度の調査区においても5世紀代に遡る住居跡はなく、本格的な集落の開始が6世紀前葉であることが改めて確認された。6世紀前葉から7世紀前葉までの住居跡の規模と軒数に目を向けると、6世紀後葉に最も集落の軒数が多いことが分かる。（表13）また、この時期は前期に比べ中形住居跡が倍以上、小形住居跡が4倍になっており、中・小形住居跡を中心に軒数が増加したことが分かる。7世紀前葉になると、今度は中・小形住居跡が減少し、大形住居跡の軒数が増加している。この点については、後述する須恵器保有率との係わりが想定される。次に、住居内の施設に目を向けたい。当遺跡では6世紀前葉の住居にのみ貯蔵穴が付設され、その後姿を消すことは「第308集」において述べられているところであり、平成21年度の調査区からも貯蔵穴を有する住居跡が確認されている。当遺跡の住居に付設さ

れた貯蔵穴の平面形は円形もしくは楕円形であり、周辺遺跡で多くみられる長方形や、それに近い形状の楕円形のもの無く、付設位置も竈と反対壁の東寄りであり、特徴的である。これに近い形状の貯蔵穴は池平遺跡第17・18号住居跡でみられ、第17号住居跡は長軸を東西方向に持つ住居で、本跡の第208B号住居跡と近い形態である。なお、6世紀前葉をもって貯蔵穴が消滅する現象についても周辺遺跡においては稀であり、当遺跡の特徴であるといえる。

②遺物について

遺物については、まず須恵器の保有率についてみてみたい(表12)。6世紀前・中葉はいずれも保有率が20%未満で、出土はほぼ大形・中形住居跡に限られている。続く6世紀後葉には26%に上昇し、小形住居跡からも出土するようになる。更に7世紀前葉では50%まで上昇している。須恵器保有率の増加傾向については、当遺跡における大形住居跡の増加と近しい様相を示しており、特に7世紀前葉の須恵器保有率の急上昇は、大形住居跡の増加と連動している可能性がある。このほか、各住居跡から出土した須恵器の破片数を計算したところ、甗類の出土は各時期を通して大形住居跡に集中する傾向がみられたことも付け加えておきたい。須恵器の保有率と大形住居跡の関係については、消費地における一元的な観察結果に過ぎないが、古墳への副葬品や、墳丘で行われた祭祀との関わりから須恵器の存在意義を考えたとき、これらは関連ある事象と思われる。また、鉄製品の保有率も同様の傾向を示しており、合わせて触れておきたい。このほか、当遺跡

においていわゆる「常総型甗」が出土するようになるのは、6世紀後葉段階からである。常総型甗の成立からほどなくして当遺跡からの出土がみられるという点から、生産地と目されている

表12 古墳時代住居跡 須恵器保有率・出土須恵器一覧表

時期	住居数	須恵器出土軒数	出土住居	須恵器保有率	出土器種
6世紀前葉	19	3	大形1 中形1 不明1	16%	大形) 甗 (中形) 坏身、环蓋 (不明) 甗
6世紀中葉	17	3	大形1 中形2	18%	大形) 坏身、环蓋、甗類 (中形) 坏身、甗、甗
6世紀後葉	34	9	大形2 中形4 小形3	26%	大形) 环蓋、甗類、甗類、甗類、甗 (中形) 坏身、甗類、甗、不明 小形) 坏身、环蓋、甗
7世紀前葉	28	14	大形6 中形2 小形6	50%	大形) 坏身、环蓋、平瓶、長頸瓶、甗類、甗 甗、甗、不明 (中形) 环蓋、甗 小形) 坏身、环蓋、甗類、甗

新治窯跡群周辺地域との関係も想定される。

祭祀に関わる遺物については、ミニチュア・手捏土器、石製品・石製模造品、土製品などが出土しており、このうちミニチュア・手捏土器と石製品・石製模造品については概ね6・7世紀を通じて出土しており、6世紀後葉からはこれに土製勾玉が加わっている。なお、当遺跡においては、石製模造品を使用した祭祀の下限が問題となるところである。7世紀初頭に位置付けた住居跡から出土したものに関しては、廃絶に伴う埋め戻しの際に混入した可能性も完全には否定できないが、当遺跡における石製模造品自体の出土量が少ないため、混入と判断するには疑問が持たれる事や、北方約4.7kmに所在する種の台古墳群第3号墳からも7世紀初頭の遺物の付近から有孔円板が出土しているなど、当遺跡周辺における祭祀形態に関わる重要な問題をはらんでいるものと思われる。資料の増加を待って検討する必要がある。

③小結

当遺跡の所在する台地周辺においては、中期後葉から後期前葉にかけて新規集落が増加する傾向にあることが確認されており、それらの遺跡の立地から、この現象は台地縁辺の低地開発による生産基盤の強化が図られたことに起因するものと推定され、当遺跡もその一例であると考えられる。鎌の出土もそのこと

を裏付けており、それらの生産活動を背景として6世紀後葉にみられる住居跡の軒数の増加や、7世紀前葉の大形住居の増加があったのではないだろうか。また、当遺跡の南方約500mには台坪古墳群、南方約800mには桑山古墳群が所在しており、集落内の有力者層との係わりから、調査が待たれるところである。当遺跡における集落の興りについては、当時の拠点集落からの人の移動も想定されるが、当遺跡における貯蔵穴の形状や付設位置は周辺遺跡との共通性が薄く、現時点で明確にすることはできない。また、7世紀中葉以降8世紀初頭に至るまでの集落の断絶期についても新たな知見が得られなかったため、これらの点については今後の調査結果に委ねたい。

(2) 奈良時代の様相

①集落について

7世紀中葉から集落の断絶期を迎えた当地に再び集落が形成されるのは、8世紀前葉になってからである。まず、住居跡の規模と軒数を目に向けてみたい(表13)。8世紀代は、各時期を通して古墳時代よりも軒数が少なく、8世紀前葉・中葉にかけては軒数の増減がみられない。8世紀中葉には大形住居跡の軒数は減少し、遺跡内に1軒しか見られなくなり、代わって小形住居跡の割合が増加している。8世紀後葉は、大形・中形住居跡の軒数に変動はなく、小形住居跡のみが減少している。

②遺物について

注目される遺物としては、円面硯が8世紀前葉と後葉の住居跡から出土しており、集落内に識字層の存在が窺える。須恵器に関しては、8世紀前葉から新治窯跡群産の製品とともに在地産(以下、「稲敷産」)の須恵器が出土しており、当遺跡における集落の再形成が稲敷市周辺に須恵器窯が操業開始した以降であることが分かる。当遺跡出土の稲敷産須恵器に関しては、『第308集』において、胎土の特徴や調整技法について詳しく述べられているため、そちらを参照願いたい。次に、鉄製品の保有率やその他の遺物の出土傾向に目に向けてみたい。鉄製品の保有率は8世紀前葉をピークとして、中葉・後葉と減少していく。特に8世紀前葉段階ではミニチュア・手捏土器、土玉についても大形住居跡から集中して出土する傾向にあり、集落における生産活動や祭祀の統括を行っていたかのような様相を呈している。また、続く8世紀中葉においても、大形住居跡からは一線を画す量の土玉とともに鉄製品が出土しており、同様の傾向が窺える。続く8世紀後葉段階では、大形住居跡に集中してみられた特定の遺物の出土傾向はみられなくなる。しかし、円面硯や東海産の須恵器長頸瓶、折戸10号窯段階の灰釉陶器短頸壺の出土が、集落内に依然として有力者が存在したであろうことを窺わせる。

③小結

当地に集落が再び形成されたのは、律令制の成立からほどなくしてからであり、この時期の前後には、信太郎の郡守と目されている下君山庵寺の造営や交通網の整備など、信太郎内に大規模な開発が相次いでいたと考えられ、それに見合う取引量も必要不可欠なはずである。当遺跡の所在する台地は北西部から南部にかけて谷津が入り込んでおり、農耕に適していたであろうことや、鎌の出土を考えると、集落の形成は低地開発に関わりが深いものと考えられ、奈良時代に見られる特徴を総合すると、本跡は集落の有力者と、その元で生産活動に従事していた人々が構成した集落であると考えられる。先に述べた8世紀中葉にみられる大形住居の減少、8世紀後葉にみられる全体の軒数の減少については明確にできない部分が大き

いが、信太郡高田郷内の集落遺跡である柏木古墳群、幸田遺跡、幸田台遺跡では8世紀中葉に軒数が急増しており、8世紀中葉から後葉にかけて郷を越えた集落の再編成が行われた可能性がある。今後、周辺遺跡の調査結果の蓄積を待って分析を試みたい。

(3) 平安時代の様相

①集落について

まず、住居跡・掘立柱建物跡についてみていきたい(表13・16)。8世紀中葉以降、9世紀前葉までは大形住居跡は1軒のみで、9世紀前葉段階には掘立柱建物跡が出現している。その後9世紀中葉段階において全体の軒数増加と共に大形住居跡の軒数も増加し、それとともに掘立柱建物跡が増加する。9世紀後葉になると、更に軒数が増加し、平安時代における最盛期を迎える。この頃には大形住居は姿を消すが、依然として長軸6mを超える規模の住居跡は存在しており、第167・168・214・219号住居跡がそれに該当する。これらの住居に住まった人々が、この頃の集落の中心人物もしくはそれに準ずる人物であったと考えられる。掘立柱建物跡は、遺跡東部に「く」の字状の配置で築造されており、第2号遺物包含層を取り囲むように築造されていたようである。第2号遺物包含層の堆積年代については8世紀から10世紀と推定されており、9世紀後葉には依然として若干の窪地が残っていたであろうことから、傾斜部を嫌っての配置と推定される。『第308集』においては、大形住居跡の減少・消滅と掘立柱建物跡の増加に関わりがあるものと推定されており、大形住居に住まった人物の居宅が、堅穴住居から掘立柱建物へと移行した可能性について述べられている。この後、10世紀前葉段階では中形住居跡が姿を消し、集落内には小形住居跡しかみられなくなる。これに伴い全体の軒数も減少しているが、それとは逆に掘立柱建物跡は増加している。10世紀中葉には、住居跡・掘立柱建物跡ともに減少している。10世紀後葉には住居跡の軒数が再び増加し、集落内に再び中形住居跡が出現する。この頃には、集落から掘立柱建物跡が姿を消し、この後、集落は11世紀前葉段階で急激に衰退し、終焉を迎えている。

②遺物について

遺物については、まず鉄製品の保有率についてみていきたい(表14)。鉄製品の保有率は、9世紀前葉をピークとして9世紀中葉には減少し、9世紀後葉には再び増加している。10世紀に入ると保有率は20%を下回り、10世紀中葉では出土していない。10世紀後葉段階で再び鉄製品を保有する住居跡がみられるようになるが、10世紀代を通して、保有率が20%を超えることはなかったようである。11世紀前葉の住居跡からは、鉄製品は出土していない。次に、灰釉陶器の保有率についてみていきたい(表17)。ここで述べる「保有率」に関しては、住居跡から出土した破片数を集計したものであり、甕式については考慮していない。当遺跡における灰釉陶器の保有率は9世紀前葉段階で25%、9世紀中葉では14%で、その後9世紀後葉に急上昇しており、40%超という高い保有率が見て取れる。また、この時期には緑釉陶器段皿も出土しており、住居跡の軒数や掘立柱建物跡の数と考え合わせると、平安時代の最盛期が9世紀後葉であることが強く窺える。続く10世紀前葉では、保有率は33%と減少し、これ以降灰釉陶器は出土しなくなっている。灰釉陶器の出土状況を概観すると、各時期を通して大形住居跡からはみられず、むしろ大形と中形の中間に位置する長軸6mの住居跡や、中形、小形住居跡から出土している点が注目される。他遺跡における出土傾向との比較を今後の課題としたい。

表 13 住居跡数推移表

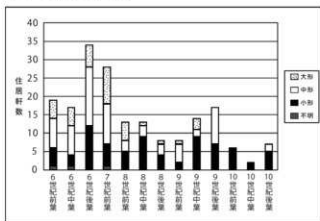


表 14 鉄製品出土率推移表

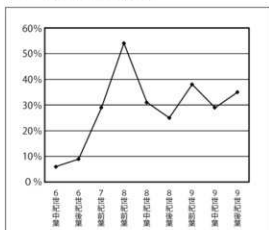


表 16 掘立柱建物跡一覧表

番号	桁行方向	時期	桁行方向(全体)		
SB25	N - 8' - W	9世紀前半	-		
SB 1	N - 19' - W	9世紀中葉	N - 19' - 20' - W		
SB 7	N - 20' - W				
SB 8	N - 20' - W				
SB 6	N - 16' - W	9世紀後半	N - 16' - 18' - W N - 84' ~ 85' - E		
SB11	N - 16' - W				
SB 9	N - 18' - W				
SB22	N - 85' - E				
SB23	N - 84' - E				
SB24	N - 85' - E				
SB21	N - 5' - W			9世紀代	-
SB16	N - 14' - W	10世紀前半	N - 14' - 15' - W N - 21' - 24' - W N - 75' - E		
SB17	N - 15' - W				
SB10	N - 15' - W				
SB 2	N - 21' - W				
SB 3	N - 21' - W				
SB 4	N - 24' - W				
SB15	N - 24' - W				
SB12	N - 75' - E				
SB 5	N - 18' - W			10世紀中葉	N - 18' - 19' - W
SB13	N - 18' - W				
SB14	N - 19' - W				

表 15 土玉・土鍾出土率推移表²⁾

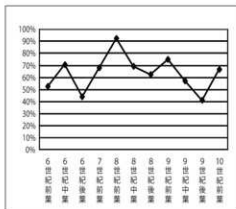


表 17 灰軸陶器保有率・出土灰軸陶器一覧

住居番号	住居の 大きさ	灰軸陶器 出土数(總計数)	種類内容	時期	灰軸陶器 保有率
7	中形+	灰皿瓶1、瓶類5		9世紀前半	25%
20	中形+	瓶類4		9世紀後半	41%
17	小形	瓶類1			
5	中形	灰皿瓶1			
10	小形	瓶2、灰皿瓶2			
25	小形	灰皿瓶1	段耳1		
47	小形	広口壺1			
212	中形	灰皿瓶1			
213	中形	灰皿瓶6			
214	中形+	灰皿瓶8			
219	中形+	灰皿瓶7、瓶1			
15	小形	瓶1、灰皿瓶1		10世紀前半	33%
44	小形	灰皿瓶1			

※「中形+」は、長軸6cm以上・6cm 50cm未満の住居を指す。

③小結

ここまで平安時代の概観を述べてきたが、特に注目されるのは灰軸陶器の保有率であろう。9世紀後葉における灰軸陶器保有率の急増の背景には、生産地である東海地方での生産体制の変容も大きく関わっているものと考えられるが、当遺跡からの出土数は、一般集落からのそれとは一線を画す量である。これに加え当遺跡は、郡衙・郡寺の有力候補地で東海道が通っていたと考えられている下君山周辺地域とも小野川を介しての行き来が容易であったものと推定され、信太流海を媒介としての交易ルートの中継点にもなり得る立地にある。また、円面硯や緑軸陶器の出土などを含めると、当遺跡が交通の要衝としての性格を有していた可能性は高いものと考えられる。

4 おわりに

平成21年度の調査により台地東部における古墳時代から平安時代の集落の様相をつかむことができた。このことにより、当遺跡の全容解明という課題は一步前進したと言える。特に平安時代に関しては、かねてより当期の中心部と推定されていた地点の調査であり、調査によって得られた結果もそれを裏付けるに足る内容であったため、平成21年度の調査結果が果たすところは大きいものと思われる。当遺跡の立地する台地は、信太郎の政治的中枢と信太流海を結ぶ小野川とほど近く、当時の交易を考えた時、非常に恵まれた立地にあることは明確であり、当地から円面硯や灰軸陶器など有力者層の存在を色濃く感じさせる遺物が出土したことは、大変重要な成果であるといえよう。また、古墳時代から平安時代を通して鎌や土玉など、生業活動の一端を垣間見ることのできる遺物も出土しており、小野郷内において当集落の果たした役割の一端を解明することができたものと思われる。今後の調査事例の増加により、常陸国の玄関口として、また、文化や物資の通り道としての信太郎の姿もより鮮明になってくるものと思われる。その時、信太郎小野郷における当跡の性格も明確になってくのではないだろうか。最後になるが、最新の調査事例としては、当遺跡の南方、谷津を挟んだ台地上に位置する神屋遺跡・清水古墳群の調査が行われており、古墳時代・平安時代の集落や古墳、中・近世の遺構などが確認されている。当遺跡との位置関係からも報告が待たれるところである。引き続き、稲敷市周辺の調査結果に注目していきたい。

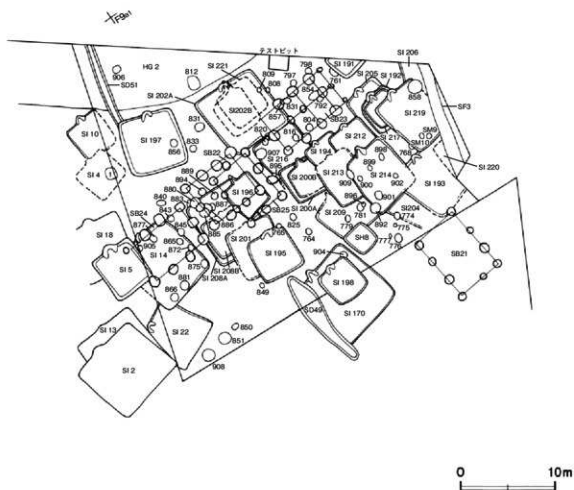
註

- 1) 住居跡の規模に関しては、小形が長軸4.5m未満、中形が長軸4.5m以上6.5m未満、大形が長軸6.5m以上と表現する。掘立柱建物跡の規模に関しては、小形が面積20m未満、中形が面積20m以上40m未満、大形が面積40m以上と表現する。
- 2) 土玉・土鍾の保有率は、6世紀前葉から10世紀前葉に至るまで、40%を常に上回っており、当遺跡の生業活動の一端として漁労との深い関わりが想定される。

引用・参考文献

- ・「常陸國文」編集部『常陸國風土記』常陸國文センター 1992年8月
- ・江戸崎史編さん委員会編『江戸崎町史』江戸崎町 1993年3月
- ・田中広明「関東地方の施軸陶器の流通と古代の社会(1)」『研究紀要』第11号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1994年3月
- ・櫻村宣行「『常陸型甕』編年小考－茨城県南部を中心として－」『列島の考古学』渡辺誠先生還暦記念論集刊行会 1998年2月
- ・奈良・平安時代研究班「茨城県域における施軸陶器の検討(5)」『研究ノート』8号 茨城県教育財団 1999年6月
- ・東町史編纂委員会編『東町史 通史編』東町 2003年3月

- ・大関武「信太郎東部における奈良・平安時代の土器様相」『埋蔵文化財部年報』27 茨城県教育財団 2008年9月
- ・成島一也他「薬師後遺跡 一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第308集 2009年3月
- ・千葉隆司「常陸国信太郎の遺跡と古代豪族-霞ヶ浦南岸地方の古墳時代素描-」『婆良岐考古』第31号 婆良岐考古同人会 2009年5月
- ・高橋一夫「常陸型甕と武蔵型甕」『埼玉考古』第45号 埼玉考古学会 2010年6月
- ・稲敷事務所「現地説明会資料 神屋遺跡 清水古墳群」茨城県教育財団 2011年8月



第102図 平成21年度調査区 遺構全体図

写 真 図 版



薬師後遺跡 調査区全景（西上空から）

葉師後遺跡
調査区全景
(東から)



第22号住居跡
完掘状況



第191号住居跡
完掘状況



PL2



第193号住居跡
完掘状況



第197号住居跡
完掘状況



第201号住居跡
完掘状況



第202A号住居跡
遺物出土状況



第202A号住居跡
遺物出土状況



第202A号住居跡
完掘状況

PL4



第204号住居跡
完掘状況



第206号住居跡
完掘状況



第208A・208B号住居跡
完掘状況

第216号住居跡
完掘状況



第906号土坑
遺物出土状況



第14号住居跡
遺物出土状況



PL6



第195号住居跡
完掘状況



第196号住居跡
竈遺物出土状況



第196号住居跡
完掘状況

第198号住居跡
完掘状況



第200A号住居跡
遺物出土状況



第200A号住居跡
完掘状況



PL8



第200B号住居跡
完掘状況



第205号住居跡
甕遺物出土状況



第205号住居跡
甕遺物出土状況

第205号住居跡
完掘状況



第217号住居跡
遺物出土状況



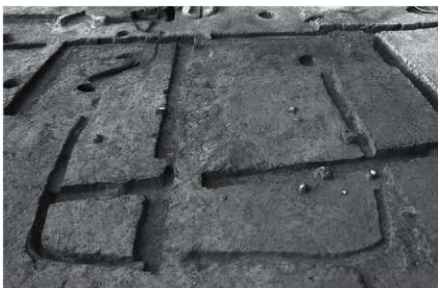
第217号住居跡
竈遺物出土状況



PL10



第192・217号住居跡
完掘状況



第213号住居跡
遺物出土状況



第214号住居跡
遺物出土状況

第214号住居跡
完掘状況



第219号住居跡
遺物出土状況



第219号住居跡
完掘状況



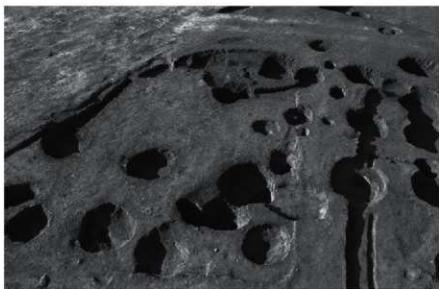
PL12



第22号掘立柱建物跡
完掘状況



第23号掘立柱建物跡
完掘状況



第24号掘立柱建物跡
完掘状況



第8号方形竖穴遺構
完掘状況



第3号道路跡
完掘状況



第51号溝跡
完掘状況











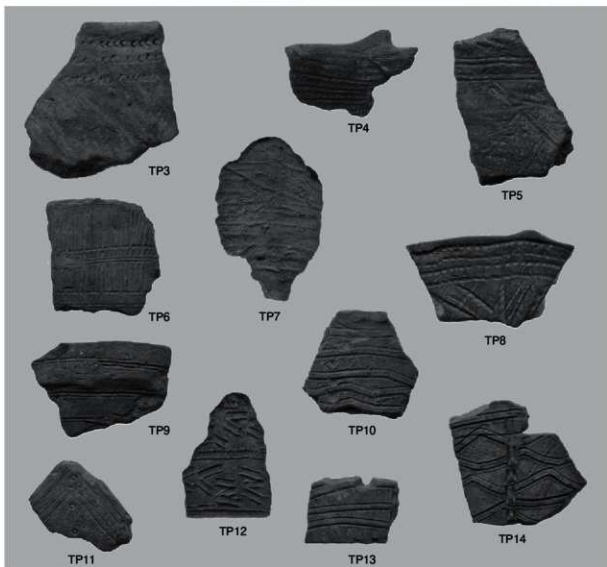




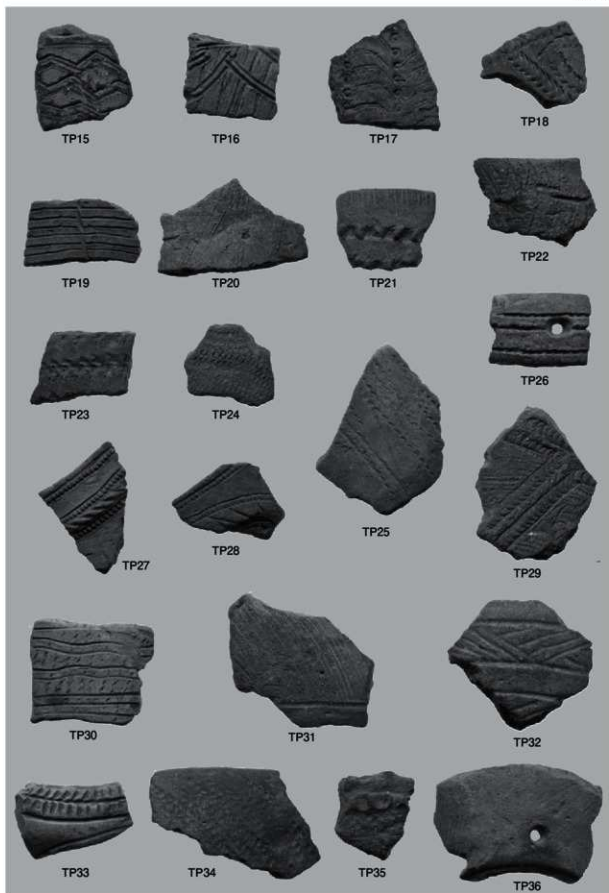
遺構外-224



遺構外-233



遺構外出土土師器・陶器・縄文土器



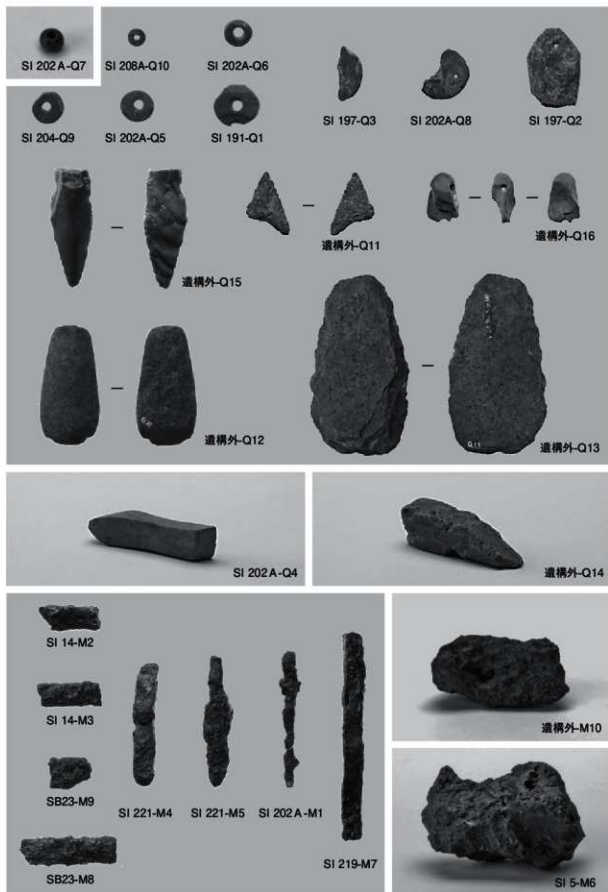
遺構外出土縄文土器



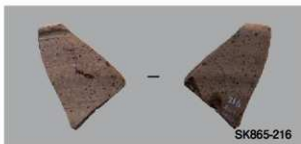
第14・170・191・193・195・198・200A・201・204・205・208A・208B・212・214・216・220号住居跡，第23・25号掘立柱建物跡，第906号土坑，遺構外出土土製品



第194・197・202A・205・212・217・219・221号住居跡，遺構外出土土製品



第5・14・191・197・202A・204・208A・219・221号住居跡，第23号掘立柱建物跡，遺構外出土石器・石製品，出土鉄製品



第196・212・214・219号住居跡，第23号掘立柱建物跡，第865号土坑，遺構外出土須惠器・灰釉陶器



第213・219号住居跡，遺構外出土灰釉陶器

抄 録

ふりがな	やくしうしろいせき							
書名	薬師後遺跡2							
副書名	一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告第350集							
著者名	大久保 隆史							
編集機関	財団法人茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行日	2012(平成24)年3月16日							
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
薬師後遺跡	茨城県稲敷市 椎塚字大久保 1370番地ほか	08229 - 441149	36度 24分 54秒	139度 44分 59秒	25 ~ 28 m	20090701 ~ 20090930	802 m ²	一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業に伴う事前調査
			(36度 25分 5秒)	(139度 44分 47秒)				
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
薬師後遺跡	集落跡	古墳	堅穴住居跡	15軒	土師器(坏・高坏・鉢・壺・甕・甌・手捏土器)、須恵器(坏身・坏蓋)、土製品(勾玉・土玉・支脚)、石器・石製品(白玉・小玉・剣形模造品・有孔円板・砥石)、鉄製品(鐵)	奈良時代の住居から円面硯。平安時代の住居跡からは灰軸陶器が出土しており、有力者の存在が窺える。本跡は、小野川を通じて郡衙推定地周辺や霞ヶ浦とも行き来が容易な立地にあるため、併せて注目される。		
			奈良	堅穴住居跡	11軒		土師器(坏・鉢・甕・小形甕・甌・手捏土器)、須恵器(坏・高台付坏・蓋・盤・円面硯・長頸瓶・平瓶・瓶類・甕・甌)、土製品(土玉・紡錘車・支脚)、鉄製品(刀子・鐵)	
			平安	堅穴住居跡	7軒		土師器(坏・高台付椀・皿・高台付皿・蓋・無台盤・鉢・甕・小形甕)、須恵器(坏・高台付坏・蓋・盤・鉢・円面硯・長頸瓶・甕・甌)、灰軸陶器(長頸瓶・短頸壺・瓶類)土製品(土玉・置き壺・支脚)、鉄製品(刀子)	
	その他	奈良~平安 時期不明	遺物包含層	1か所	縄文土器(深鉢)、土師器(坏・皿・甕・甌・羽釜)、須恵器(坏・坏蓋・長頸瓶・瓶類・甕)、陶器(折縁皿・擂鉢)、磁器(碗)、灰軸陶器(高台付皿・長頸瓶)、土製品(勾玉・土玉・スタンプ形土製品・置き壺)、石器・石製品(剥片・石鏃・磨製石斧・打製石斧・砥石・白玉)、鉄製品(鉄滓)、貝類(ヤマトシジミ)			
要約	今回の調査区は、遺跡の所在する台地の東部にあたり、これまでの調査区とはほぼ同時期である古墳時代後期から平安時代の集落を確認した。特に平安時代は遺構が密であり、今回の調査区周辺が集落の中心部であったことが改めて裏付けられた。							

印刷仕様

編集	OS	Microsoft Windows XP Professional Version2002.ServicePack3
	編集	Adobe Indesign CS4
	図版作成	Adobe Illustrator CS4
	写真調整	Adobe Photoshop CS4
	Scanning	6×7 film Nikon SUPER COOLSCAN9000 図面類 EPSON offlio ES-1000G
	使用Font	OpenType リュウミンPro・L
	写真	線数 モノクロ175線以上 カラー210線以上
	印刷	印刷所へは、Adobe Indesign CS4でレイアウトして入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第350集

葉師後遺跡 2

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道
新設事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成24（2012）年 3月14日 印刷

平成24（2012）年 3月16日 発行

発行 財団法人茨城県教育財団

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL 029-225-6587
HP <http://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 株式会社あけぼの印刷社

〒310-0804 水戸市白梅1-2-11
TEL 029-227-5505